

---

# 獵闇師 ~ 悪蟲夢 ~

雷紋寺 音弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猟闇師 ～ 悪蟲夢 ～

### 【Nコード】

N7235P

### 【作者名】

雷紋寺 音弥

### 【あらすじ】

トップアイドルグループであるT Driveの一員、長谷川雪乃。

ステージで見せる笑顔の裏側で、彼女は自らの身体を毒虫に食われるという悪夢に悩まされていた。

年末の地方公演の最中、やがて悪夢は雪乃の現実までをも侵蝕し始める。

それに伴い、徐々に孤立の色を深めてゆく雪乃。

呪いか、それとも妖怪の仕業なのか。

悪夢に悩むアイドルに、外法使い犬崎紅が下した判断とは。

そして、闇の裏で狡猾な罫を張り、雪乃を陥れようとしていた真の黒幕の存在とは……。

猫閻師シリーズ第六弾。

虫が嫌いな人は、くれぐれもご注意を……。

く 逢魔ヶ刻 蟲夢 く (前書き)

その身に毒を蓄えし者が集いし時、狂気の晩餐が幕を開けん。

闇の中に閉ざされし者達、己が欲を満たすため、互いにその身を  
食い滅ぼし合はん。

争い終わり、最後に生き残りし者、巫蠱となりて人界に災厄をも  
たらすものなり。

師走とは、十二月の別称である。いつ、誰がこのような呼び方を始めたのかは分からないが、少なくとも平安時代には既に用いられていたとされている。

一説によれば、僧侶が仏事で走り回る程に忙しくなることからつけられたといわれており、ここでの僧侶とは師に当たる。また、言語学的な推測として、『年果てる』や『し果つ』が師走に変化したとも言われており、この場合の師走という漢字は単なる当て字ということになる。

暮の頃に一際忙しくなる僧侶の姿を指したもののなか、それとも単なる当て字なのか。未だ完全な結論は出ていないが、少なくとも暮が迫ると人々が忙しく動き回るようになるようになるのは本当である。それは何も僧侶だけに留まらず、芸能界においても同じことが言えた。長谷川雪乃<sup>はせがわゆきの</sup>も、そんな人間の一人である。

芸能界が常に慌ただしいことは、雪乃もこの業界に入ったときから知っていた。春夏秋冬を問わず、今では多くの局で多種多様なバラエティー番組が放送されている。単に流行りの歌をステージで歌っていればよいという時代は既に終わり、今では歌手、俳優、そして司会やレポーターなど、実に様々な仕事をこなさなければ、この業界では生き残ってゆくことなどできはしない。

そんな厳しい風の吹く業界において、雪乃はアイドル歌手という立場にいた。無論、彼女一人ではなく、他の二人のアイドル達とチームを組んで、T Driveという名のユニットで売り出していたが。

T Drive。デビュー当時はまったく目立たないユニットであったものの、今では雪乃達も国民的なアイドルだった。彼女たちの名前を知らない者など十代の若者の中にはおらず、歌番組に顔を見せない時の方が少ないほどだ。

正直なところ、未だ高校生の雪乃にとって、勉強とアイドル活動の両立は厳しいものがあつた。現に今は学校さえ殆ど行つておらず、実家にも帰っていない。会社が用意してくれた都内のアパートで、一人暮らしを続けていた。

「雪乃！ そろそろ、私達の出番が来るわよ！！」

楽屋の扉の向こうから、雪乃の名を呼ぶ声がする。慌てて衣装を確認しながら、雪乃は扉の向こうにいるであろう人物に返事をする。

「あつ、夏樹ちゃん。今……ドアを開けるから……」

そう言つて扉に手をかけようとしたが、彼女がそれを開けるよりも早く、向こう側にいた少女が扉を開け放つた。

「遅い！！ まったく……折角の地方公演だつて言うのに、いつまで楽屋に籠っているつもりなの！？」

「う、ごめんなさい……。私……なんだかちょっと、緊張してて……」

「ここまで売れて、武道館でもドームでもライブをやつたようなことだつてあるのに、今さら何言つてんのよ！！ マイペースなのもいいけど、時間は意識してもらわないと困るわよ！！」

扉を開けるなり、その向こう側から現れた少女が雪乃を責めた。もっとも、決して悪意があつてのことではなく、彼女なりに思うことがあつてのことなのだ。

「とにかく、もうすぐ私達の出番ってことは変わらないからね。精神統一するのは勝手だけど、舞台には遅れないようにしてよね！」

眉根を吊り上げたまま、その少女は雪乃を置いてつかつかと廊下を歩きだした。その衣装からして、彼女もまた雪乃と同じアイドルであることは間違いない。だが、普段のファンに見せているような笑顔は完全に消え去り、その表情は大いに苛立ちを露わにしていた。

すすもりなつき  
鈴森夏樹。それが、先ほど雪乃を叱責していた少女の名前だった。彼女もまた Driveの一員であり、同時にユニットのリーダーでもある。すらりと伸びた背丈と、どことなく気品のある細面な顔が特徴的である。

その容姿からも想像できるように、夏樹は気丈な少女だった。それだけでもリーダーとしての資質は十分だったが、同時に自分にも他人にも厳しいところがあるのは否めない。夏樹の時間に対する細かさは彼女たちのプロデューサー以上だったし、歌であろうとドラマや舞台における演技であろうと、一切の妥協を許さぬプロ意識があつた。

苛立つ気持ちを抑えながら、夏樹はこれから始まるステージの裏へと回った。彼女たちの出番はまだ先のことだったが、それでも早めに行動しておくにこしたことはない。

どんな舞台であれ、常に最高のステージにすること。それが、夏

樹の掲げている自分の中での目標である。今でこそトップアイドルグループの仲間入りを果たしているT Driveだが、その結成経緯は決して明るいものではなかった。

ユニットのリーダーは夏樹であり、その以外には温和で大人しいキャラクターで売っている雪乃、メンバー最年少でありムードメーカーの鳴海咲花なるみさかがいる。その誰しもが、ユニット結成前から芸能界に足を突っ込んでいた経験のある者だった。

そもそも彼女達がアイドルとしてデビューしたときは、三人が三人ともソロだった。

業界では少々名の知れた舞台俳優を母に持つ夏樹は、親の七光を嫌って自分の路線を築くためにデビューした。

雪乃は元々アイドル志望だったが、その大人しい性格が災いし、なかなか強引な売り込みをかけられずにいた。歌唱力は決して低くはなかったが、業界でトップアイドルとされる者達から比べれば、まだまだデビューしたてのひよっこに過ぎなかった。

そして、最後に咲花であるが、彼女は子役の出身である。歌が好きでミュージカルの舞台に出ることもあったが、やはり彼女も売れてはいなかった。それは、もっと歌を歌いたいという気持ちから、アイドル歌手としてデビューしても同じだった。

その経緯はそれぞれに異なりながら、奇しくも同じ時期に同じ事務所でデビューした三人。だが、その誰もがデビュー当初はまったく売れず、持ち歌が毎週のヒットチャートに載ることもなかった。上位百番にさえ掠りもしなかったのだから、ほとんど見向きもされていなかったと言ってよい。加えて、彼女たちの所属しているのが



業界内でも弱小のプロダクションだったということも相俟って、その売り上げは実に悲惨なものだった。

そんな三人の窮状を見かねてか、彼女たちのプロダクションの社長がユニットを結成して活動することを勧めてきた。プライドの高い夏樹は反対したものの、売れないアイドルが何を言っても所詮は机上の空論に過ぎない。結局、三人はなし崩し的にユニットを結成させられ、それからはチームで活動してきたというわけである。

売れないアイドル達をなんとか売れるようにするために、これまで弱小のプロダクションが打ち出した苦肉の策。だが、一つ一つではまったく輝かなかった彼女達は、ユニットを組むことで徐々に頭角を現し始めた。そして、今では夢のトップアイドルの仲間入りを果たし、現在は暮の地方公演の真っ最中というわけである。

開幕の時間が徐々に迫る舞台裏で、夏樹は自分が夢にまで見た高みに昇り詰めていることを、ゆっくりとその胸に刻み込んでいた。

どんな時も、初心を忘れない。それが彼女独自の精神統一法である。慢心は己を墮落させ、つかんだ栄光を瞬く間に奪い去る。そのことを知っているだけに、今日のライブの流れに関しても抜かりはない。

(私は……私は、もっと上を目指すのよ……。こんな地方公演や、ドームでのライブだって物足りない……。いつかはこの業界で、お母さんを越えるような存在になってやるんだから!!)

そう、夏樹が思ったとき、彼女の後ろから聞き慣れた声がした。

「お待たせ、夏樹ちゃん。準備、整ったよ」

後ろにいたのは雪乃だった。冬だというのに、腕や脚の露出した衣装は見るからに寒そうだ。夏樹も同じような衣装を着ているために人のことは言えないが、雪乃は特に色白なため、それが際立って見える。

「時間ぎりぎりってとこね。まあ、あなたのことだからへまはしな  
いと思うけど……もう少し、ゆとりを持って行動した方がいいんじ  
ゃない？」

「う、ごめんなさい……。私、昔からマイペースなところがあるか  
ら……夏樹ちゃんには、いつも迷惑かけてるよね……」

雪乃が視線を下に向け、思わず口元を抑えて後ずさった。それを  
見た最後のメンバー、鳴海咲花が、すかさず持ち前の明るさで場の  
空気を戻す。

「まあまあ……。ライブの前から、そんなにピリピリしても仕方な  
いですよ、夏樹さん。雪乃さんも、あんまりネガティブな気持ちで  
舞台に出ると、本当にステージで転んじゃったりしますよ」

「ピリピリッて……。私は別に、そんなつもりじゃ……。!」

「そういう眉毛が、もう怒ってますう。歌を歌う時は楽しい気持ち  
で歌わないと、ファンの人達にも楽しんでもらえないんですよ」

「ったく……。相変わらず咲花はお気楽ね。楽しむのいいけど……  
少しは緊張感つてもものを持った方が、あなたのためにもなるんじ  
ゃない？」

はあつ、という溜息をつきながら、夏樹は半ば諦めたような口調で言った。それを見た雪乃が、間髪入れずに咲花に賛同する。

「でも……あまりガチガチに緊張するよりも、少しはリラックスして歌った方がいいと思うな。その方が、なんだか自分でも、変に気取らないで済む感じがするし……」

「悪かったわね、いつも気取ってて!! でも……それであなた達が力を発揮できるって言うなら、私は何も言わないけど。せいぜい、こっちの足を引っ張らないように気をつけてよね!!」

「はあい、先生! 咲花はちゃんと注意しまあす!!」

傍から見れば嫌味にしか聞こえないような夏樹の言葉に、咲花が何ら気にしていない様子で手を上げて言った。その横では、雪乃が二人のやり取りを見て、懸命に笑いを堪えている。

趣味も性格も、そしてデビューした経緯も違う三人。一見して滅茶苦茶なチームに思われそうだが、不思議と彼女達のユニットは上手く動いていた。それぞれが特有の個性を持っていることもまた、様々な客層のファンを獲得するのに上手く働いていたのかもしれない。

「それじゃあ、そろそろ出番だからね。最初は私がセンターで歌うけど、その後は雪乃、最後は咲花のソロパートもあるんだから……」。緊張して、歌詞を忘れていたら承知しないわよ!!」

「大丈夫、大丈夫。いざとなったら、その辺はアドリブでGOってね!!」

手にしたマイクを大きく掲げ、咲花が悪びれた様子もなく口にする。その言葉に突っ込みを入れたくなる気持ちを抑え、夏樹も、そして雪乃も自らのマイクを握り締めて呼吸を整えた。

バックバンドの激しい音楽に合わせ、三人は既にライトアップされたステージの上に颯爽と躍り出る。眩いばかりのスポットライトが彼女達を照らし、観客の声援が熱気となって、舞台の上の彼女達を包み込む。

それから先は、正に現実を忘れてしまう程に高揚した時間だった。

舞台の上で、華やかな衣装に身を包んだ少女達が踊り、歌う。常にプロ意識を持って仕事に挑む夏樹や天性の明るさを持った咲花は言うに及ばず、普段は控え目な雪乃でさえも、その魅力を存分に発揮する。観客の興奮は瞬く間に最高潮に達し、バックバンドの演奏にも力が入る。

額から迸る汗さえも吹き飛ばし、少女たちは歌い続けた。天使、妖精、様々な形容のしようがあるだろうが、やはりここは歌姫と呼んだ方が相応しいだろう。そう、まさに彼女達は、現代を生きる若者達にとっての姫、プリンセスなのである。

「みんなー、今日はありがとう！ 盛大なアンコールに答えまして……最後に、もう一曲だけ歌いまーす！！」

持ち歌を一通り披露したところで、そう言いながら観客に手を振っているのは夏樹だ。舞台裏で見せていた気丈でプライドの高い姿は影を潜め、始終アイドル歌手であることに徹している。普段はともすれば高飛車とも思える態度を取っていても、ファンの前でアイドルらしさを失わないよう努めているところが、いかにも夏樹らし

い。

未だ熱気の冷めやらぬ舞台に、最後の曲が鳴り響く。それは、三人がユニットを結成して初めて世に出した歌。T Driveの結成と同時に作られた曲であり、彼女達を代表する曲でもあった。

「それじゃあ、最後の曲は私達の最新曲……」

「Snow White Love で!!」

三人が言葉を重ねて曲名を告げると同時に、後ろのバックバンド達が再び演奏を始めた。曲のタイトルからして、正に冬の恋を表した歌。歌詞の内容も、真冬の寒い街で恋人を待ちながら物想いに耽るような場面から始まるのだ。

舞い散る雪をイメージした、六角形の結晶のような光がステージのバックに映し出された。スポットライトは薄い青色に代わり、少女たちの衣装もまたその色に染められる。

特に、雪乃の色白な肌はこの曲の雰囲気を引き立てるのに一役買っており、場合によってはリーダーの夏樹以上に目立っていた。彼女の歌うパートが少女の切ない想いを伝える個所であることも相俟って、その相乗効果は高いものがある。

全ての演目を終えた時、会場は今までにない激しい興奮に包まれていた。歌の最中は歌詞に聞き入っていた観客達が、今までに抑えこんでいた感動を一度に爆発させたようだ。

舞台の向こう側で声援を送り続ける観客達に、夏樹も雪乃も、そして咲花も、最高の笑顔を振りまきながら手を振っている。武道館

やドームに比べれば明らかに小さいステージでしかなかったものの、その舞台から見える輝きは、決して劣っているように思えなかった。

その日のライブは熱狂の渦の中に終了した。仕事を終えた雪乃達は着替えを済ませ、今は宿泊先であるホテルの一室にいる。プロデューサーからは無暗に出歩かないように注意されていたため、今は夏樹の部屋で反省会の真っ最中だ。

もつとも、反省会と言っても、それは最初の内だけである。大抵は夏樹が初めに厳しい意見を少し述べ、その後は女の子だけの秘密の会話タイムになるのが常である。

「でね、でね……。この前仕事で会った俳優さんが、超カッコよかつたんですよ！！」

「それ、今話題の上嶋リョウさんかみしまでしょう？　確かに、あんな人と一緒に仕事ができたらすてきなあ……………」

「そう思いますよね、雪乃さん！　絶対そうですよね！！」

他のメンバーそっちのけで、勝手に盛り上がっているのは咲花だ。この地方公演の前に収録した、年末に放送する予定のバラエティー番組で出会った俳優に一目惚れしたらしい。その時の彼の様子がいかに格好良かったのかを、延々と残る二人に語っている。

「まったく……咲花の面喰いにも困ったものね。この前はTATU MAKIの河野君（この）が好きって言うてたくせに、鞍替えするの早過ぎでしょ」

あくまで咲花の調子に合わせて話を聞いていた雪乃とは違い、夏樹は冷静に切り捨てた。その言い方は悪意を込めたものではなく、むしろ呆れていると言った方が正しい。

ちなみにTATU MAKIとは、彼女たちとは事務所も別の男性アイドルグループである。十代の女性達の間ではかなりの人気があり、新曲は常にヒットチャートのベストファイブにランクインするほどだ。

「ううう……。相変わらず、夏樹さん手厳しいですう……」

自分にも思い当たる節があったのか、咲花は先ほどの勢いを失って小さく丸まった。

「手厳しいもなにも、私達はプロのアイドルなのよ。番組の収録中に共演者に見惚れているようじゃ、良い仕事なんてできるはずじゃない。それに……。あなたがさっき言っていた上嶋さんだけど、ちゃんと婚約を前提とした恋人がいるみたいよ」

「ガアアアン！！ 告白前から失恋なんて……。超ショックウウウウツー！！」

「告白って……。まさかあなた、本気で相手にされると思っていたんじゃないでしょうね……」

ここまで来ると、もはや呆れ果てて物も言えない。そんな顔をし

ながら、夏樹は腕を頭の後ろに組んで椅子の背もたれに体重を預けた。

「まあ……夏樹ちゃんの言っていることは本当だと思うけど、それでも悲観することはないと思うよ。咲花が上嶋さんのことを好きって気持ちは、今も変わらないでしょう」

今まで黙って話を聞いていた雪乃が、泣き出しそうな表情になっている咲花の頭を撫でながら言った。

こういったとき、必ずフォローに回るのは雪乃の役目となる。

「ううう……。雪乃さんは、いつも優しいですう……」

咲花が目元に溜まった涙を拭くような仕草をしながら、そのまま雪乃の肩に身体を預けてくる。露骨な嘘泣きで甘えているのが見え見えのため、夏樹からすれば見るに耐えない光景と言ったところだが。

「はあ……。雪乃、あなたもちよっと、咲花を甘やかしすぎじゃない？ だいたい、相手は大人の男なのよ。咲花はまだ中学生だし、私達だって高校生。いくらこっちが本気になったところで、向こうが本気で私達のことを、女として見るわけがないじゃない」

「でも、私も上嶋さんのことは、普通に格好良いと思うけどな。恋人にしたい……とは思わないけど、あんな人がお兄さんだったらいいなって思うわよ」

「お兄さんねえ……。言っておくけど、あなた達が思っているほど、世の中には格好良い兄なんてのはいないのよ。駄目兄貴や馬鹿兄貴なんてのは、巷に腐るほど溢れているみたいだけどね」



最後の方は、少し乱暴に吐き捨てるような言い方になった。

鈴森夏樹には、歳の離れた兄がいる。雪乃や咲花も、そのことは知っていた。そして、夏樹が自分の兄に対し、あまり良い印象を抱いていないということも。

夏樹の兄は、今ではフリーのカメラマンをやっている。だが、自分の努力で仕事にありついたわけではなく、業界の中で初めから力を持っていた、父と母の威光に縋ったことだった。

それでも夢だけは馬鹿みたいに大きく、今に最高のカメラマンになってやると豪語しているのだから救いようがない。両親の力を自分の力と勘違いして大物ぶる、典型的な馬鹿兄だった。

優しくて気立てのよい兄の存在など、所詮は夢物語に過ぎない。少なくとも夏樹はそう思っていたが、彼女の口から兄のネタが飛び出した瞬間、咲花がさかさずそれに食い付いた。先ほどの涙などどこかに吹き飛び、まるで新しい玩具を見つけたときの幼稚園児のように、嬉しそうな表情を浮かべている。

「そっかぁ……。夏樹さんは、お兄さんのことが嫌いなんですねぇ……」

「な、なによ、その意味深な顔は……。あの馬鹿兄貴のことを私が嫌っているのは、前にも話したじゃない」

「でもぉ……。口ではそんなこと言ってますけどぉ……。本当は、夏樹さんもお兄さんのことが好きなんじゃないですかぁ？」

「なっ……いきなり変なこと言わないでよね！！ どうして私が、あんな馬鹿兄貴のことを……」

突然、咲花の口からとんでもないことを告げられて、今度は夏樹がたじろいだ。その隙を逃さず、咲花は意地悪そうに笑いながら夏樹に追い打ちをかける。形勢逆転、先ほどの仕返しとばかりに、その追及には容赦がない。

「ふっふっふっ……。そう言っていられるのも、今の内ですよ、夏樹さん。私……この地方公演が始まる前に、見ちゃったんですから」

「み、見たって……何をよー!!」

「この前の仕事の帰り、夏樹さん、デパートで男物のネクタイ買ってましたよね。しかも、お父さんが使うような渋いやつじゃなくて、割と派手目でお洒落なやつを……」

「なっ……ど、どうしてあなたがそれを……」

夏樹の顔が、見る間に赤くなってゆく。誰にも見られていないはずの、自分だけの秘密。そう思っていたことを、なんとメンバーの一人に知られていた。その現実が、彼女からいつもの冷静さを少しずつ奪ってゆく。

「実は、ちょっと面白そうだったんで、勝手に尾行させていただきましたあ！ で……あれは、いったい誰へのプレゼントですかねえ？ お兄さんじゃないって言うなら……まさか、恋人ですかあ？」

「ばっ……ち、ちがうわよ！！ あれは……その……もうすぐ三十路にもなるうってのに、彼女の一人もできない馬鹿兄貴が寂しがる

といけないから、仕方なくよ……。そう、仕方なく買ったの!!」  
「へえ……。仕方なく、ですか……。それにしても、随分と念入りに選んでいたような……」

「う、うるさい、うるさい、うるさい!! 咲花……。あなた、それ以上の減らず口は、自分の寿命を縮めることになるって、わかっ  
て言ってるんでしょね!？」

ひきつった笑いを浮かべながら、ついに夏樹が立ち上がった。それを見た咲花は「きゃあっ! 怖いですう!!」と言いながら、慌ててドアの方へと逃げて行く。そして、そんな二人の姿を見て、雪乃は笑いを堪えるのに必死だった。

口では色々と言っているが、夏樹も咲花も決して仲が悪いわけではない。今しがたの言葉の応酬とて、単なる悪ふざけの延長ではないことを知っている。それに、夏樹も咲花も互いに信頼し合っているからこそ、あのような内容の話も本音で口にすることができるのだ。

逃げる咲花と追いかける夏樹。部屋の出口である扉に咲花が手をかけ、廊下に出ようとしたときだった。

咲花が扉を開けると同時に、彼女の身体が扉の向こう側にいた男にぶつかった。その姿を見た三人の顔が、瞬く間にいつもの仕事で見せているときのそれに変わる。

「あっ……。高槻プロデューサー……」

扉の向こうにいたのは、彼女たちのプロデューサーだった。

高槻護。たかつきまもる T Driveの結成当初から、雪乃たちのプロデューサーを続けている男である。もっとも、プロデューサーとしての仕事だけでなく、彼女達のマネージャーも兼ねていた。

本来は彼女たちを売り込むだけが仕事のようなものだが、何しろ所属しているプロダクションが弱小である。人手不足は深刻で、一人の人間が複数の仕事をこなさざるを得ない。

T Driveが売れている今となつては高槻がマネージャー業まで手を出す必要はないのだが、夏樹も雪乃も、そして咲花も、彼が自分達の下から離れるのを頑なに拒んだ。無名時代から様々なことで世話になってきた分、彼に対する信頼も厚かった。

「まったく……。まだ、起きていたんだな」

ぶつかって尻もちをついてしまった咲花に手を差し伸べながらも、高槻は少し困ったような顔をした。

「公演はまだまだ続くんだから、あまり夜更かしして体力を消耗するのはよくないって言っただろう。見知らぬ土地で歌うことに昂奮する気持ちもわかるけど……。あまり飛ばし過ぎると、後が辛くなるぞ」

「ううう……。ごめんなさい……。今度から気をつけますう……」

先ほどの勢いはどこへやら。咲花は急にしおらしくなり、高槻の前で俯いた。横目で時計を見ると、既に時刻は夜の十二時を回ろうとしている。他の宿泊客がいることも考えると、さすがに騒ぎ過ぎたと思うたのだろう。

「それじゃあ、僕はもう行くからね。後……これが、明日のスケジュールだ。ついでに持ってきたもので悪いけど、寝る前に一通り目を通しておいてくれないかな」

高槻の手から、クリアファイルに入った数枚の用紙が渡された。咲花はそれを受け取ると、中に入っていた用紙を夏樹と雪乃にも配る。書かれていた起床時間を見ると、なんと朝の六時だ。ここは高槻の言う通り、そろそろ寝ないと本当に明日の仕事に支障が出る。

「ふう……。なんか、ちよつと冷めちゃいましたね。明日も早いみたいですし……夏樹さんも、雪乃さんも、そろそろ寝ませんか？」

「ええ、そうね。私も自分の部屋に戻るから、咲花もちゃんと早く寝るのよ」

用紙に記された予定を確認しつつ、雪乃もそう言いながら立ち上がる。最後に高槻に就寝の挨拶だけ述べて、そつと自分の部屋に舞い戻った。

雪乃の部屋は、夏樹の部屋の隣である。部屋の作りは変わらないが、広げている荷物の中身から違いは明白だ。

雪乃は決して荷物の整理が下手な方ではない。むしろ、几帳面過ぎるくらいに片付けているのだが、それが返って彼女のいる部屋を殺風景なものにしていた。咲花のように自分の荷物を部屋中に撒き散らすようなことはしないが、夏樹のように女の子達が憧れる化粧品の種類を持っているわけでもない。

アイドルなのに、殆どすっぴん同然の薄化粧。それが彼女の魅力

だというファンも多かったが、雪乃自身はあまり納得していなかった。

もし、自分がアイドルではなく、普通の女の子だったらどうだろう。夏樹も咲花も、T Driveの全員がアイドルという立場抜きにして並んだ場合、本当に可愛いと思ってもらえるのは誰だろう。

夏樹は気が強い一面はあるものの、ファッションには人一倍気を使っている。それも、決して自分の姿を誇示するためではなく、あくまで周囲に対しての礼儀として自分を綺麗に見せることを心がけている。

その点、中学生の咲花は未だ子どもな面もあるものの、その天真爛漫な底抜けの明るさが強みだろう。いつも元気で笑っていて、それでいて少しドジなところもある。そういった諸々の態度が、特に年長者の保護欲求に訴えることが多い。要するに、『理想の妹』や『守ってあげたい娘』といった感じである。

そこへゆくと、雪乃自身は、自分のことが随分と面白見のない人間に思えて仕方がなかった。

アイドルというネームバリューが無ければ、自分など路傍の石も同然だ。それだけ普段の雪乃は大人しく、目立たない人間だった。

「はあ……。ああやって、舞台の上で歌っているときは全然気にならないのに……。どうして、普段の私はこんなに地味で目立たないのかな……」

自分がどちらかといえば内気な性格であること。それは雪乃自身

も十分に承知している。

舞台上でファンに笑顔を振りまいているときは、アイドルという仮面と衣がそれを隠してくれる。だからこそ、自分はあれだけの人の前で、何ら臆することなく歌うことができるのだと思った。これが、素の自分を知っている者の前だったとしたら 例えば、学校の文化祭のステージなどとしたら 普段の力の半分も出しきれなくなってしまうのは想像に難くない。

だが、それにしても、今日の舞台は雪乃に向けられた声援が一際大きかったような気もしていた。慢心などではなく、現に雪乃自身 T Drive のファンの間でも自分の人気が上がってきていることは耳にしていた。

個性だけで見れば、夏樹や咲花の方がよっぽど強い。いつたい、ファンの人達は、自分の何を気に入ってくれたのか。雪乃には、それが不思議でならなかった。

「ふう……。まあ、考えていても仕方ないよね。明日も早いみたいだし、今日はもう寝ようかな……」

時計を見ると、時刻は既に深夜の一時になろうとしていた。あれこれと物想いに耽っている間に、いつの間にか時間が経っていたらしい。

部屋の灯りを全て消し、雪乃はベッドの中に潜り込んで丸くなった。枕が違つと眠れないのではないかと思っていたが、ライブを頑張った疲れもあったのか、すぐに睡魔に負けて眠りについてしまった。

暗い、どこまでも続く闇の中を、雪乃は独りで彷徨っていた。

彼女の周りは前も後ろも、そればかりか上も下も闇一色である。まるで宇宙空間に放り出されたかのように、闇の中を雪乃の身体だけが漂っていた。もっとも、地に足がついている感触はあったため、そこが決して宇宙の果てではないことだけは確かだったが。

闇の中、ぼんやりとした淡い光が雪乃の前に姿を現した。初めのうち、それはどろどろとした不定形な塊だったが、すぐに細く長く伸びて、人間の身体を形作る。両手、両足、それに首が粘土細工のようにして生まれ、最後に少し茶色く染めた髪が伸びて風に揺れた。

「あつ……」

目の前に現れた異形なる者に、雪乃は思わず口に手を当てて声を飲み込んだ。

彼女の前に現れたもの。それは、紛れもない雪乃自身だった。今日の舞台で使っていた衣装をそのまま身に纏い、じっとこちらを見つめている。頭の前から足の先まで、その姿は雪乃自身と寸分の狂いもない。それこそ、鏡に映し出された像のように、何から何まで雪乃と同じだった。

雪乃の前に現れた、もう一人の雪乃。彼女は何も言うことなく、ただじつと雪乃を見つめている。そして、その瞳に見つめられた雪乃もまた、石のように身体が硬直して動かなくなっていた。



ガサリ……。

無音の闇。今まではそう思っていた空間に、何かが蠢くような音がした。

ガサリ……ガサリ……。

また、音がした。今度はもっと大きく、もっと激しい音だった。それこそ、得体の知れない無数の何かが、正に雪乃自身の隣で蠢いているような感じなのだ。

(や、やだ……。これって……)

雪乃の中に、忌まわしい記憶が蘇る。この光景は、以前にも自分は見たことがある。決して忘れられず、その恐怖から逃れられない悪夢として、雪乃の脳裏にしっかりと刻み込まれていたものだ。

次の瞬間、雪乃の目の前にいるもう一人の自分の口が、カツと大きく開かれた。そして、その開かれた穴の中から、無数の毒虫が這い出してきた。

ガサガサガサガサガサ……！！

今度は蠢くなどという生易しいものではなかった。

目の前にいる自分の姿をした何者かの口から這い出してくる、薄気味悪い姿をした虫、虫。血のように赤い体に緑色の斑模様を持った、蠍のような姿をした毒虫である。それらは尻尾を振り立てながら、時に何かを咀嚼しているように口を動かす、一斉に雪乃の方へと向かってきた。

「い、いやあああつー!!」

溢れ出した毒虫達が雪乃の足元を這い回り、徐々にその脚を伝って上へと這い上って来る。なんとか逃げようと脚に力を入れるものの、まるで金縛りに遭ってしまったかのように身体が動かない。

脚を昇り、腹を伝い、とうとう毒虫は雪乃の首筋まで迫ってきた。その間にも、目の前にいるもう一人の自分からは、洪水のように虫が溢れ出して来る。最後は眼球さえも零れ落ち、顔に空いた二つの大きな穴の奥からも、同じように毒虫が溢れ出てきた。

固い、キチン質の殻を持った毒虫たちが、雪乃の全身を徐々に覆ってゆく。服の中、そして髪の毛の間にまで入り込まれ、終いには顔の上をも這い回られた。

「あ……ああ……」

既に恐怖から、雪乃は悲鳴を上げることさえできなくなっていた。ひきつった顔の真ん中で大きく開かれた口の中に、毒虫が次々と入り込んでくる。口の中、そして喉の奥さえも蹂躪され、自分の身体が毒虫達に侵されてゆく。

その感触は、夢にしてはあまりに生々しく、また強烈なものだった。自分の身体が中から毒虫に食われてゆく。そんな感覚に全身を支配されたまま、雪乃の意識は深い闇の中に沈んで行った。

「う……」

雪乃が意識を取り戻したとき、そこは自分の泊まっているホテルの一室だった。部屋の中は薄暗く、まだ太陽が完全には昇っていないようである。

時計を見ると、時刻は朝の五時半を示していた。起床時間が六時であったことを考えると、どうやら寝過ぎさずには済んだようだ。もっとも、あんな嫌な夢を見た後では、これから再び二度寝しようなどとは思わなかったが。

痛む頭を抑えながら、雪乃はそっとベッドから出た。服の中や髪の間を確認してみたが、当然のことながら、あの毒虫達の姿はない。

安堵の溜息をつきながら、それでも雪乃は自分が見た夢のことが頭から離れなかった。

T Driveが結成された頃から、雪乃は奇妙な夢にうなされるようになっていた。夢の内容は様々だったが、最後は暗い闇の中、決まって毒虫に自分の身体を蹂躪されて終わる。思い出すのもおぞましい悪夢だったが、その悪夢を見るときの法則性のようなものに、雪乃は薄々感づいていた。

自分が悪夢を見るときの方則。それは、雪乃が何か仕事で大きな成功をしたときだ。

例えば、プロデューサーの営業が思いの他に上手くいって、T Driveの新曲が予想以上に売れた時。その他では、ライブのチケットが早々に完売したり、彼女の出ているテレビ番組の視聴率が高かったりしたときなども挙げられる。

そういえば、昨日のライブも例に漏れず、雪乃にとっては大成功と言ってよいものだった。地方公演に入って既に数力所でライブを行っていたが、昨日のライブは中でも一際観客数が多く、また盛り上がったものだった。

自分はいつたい、どうなってしまったのか。なぜ、輝かしい成功をしたときに限って、あんな嫌な夢を見なければならぬのか。あれこれと考えてみたものの、雪乃自身に思い当たる節はない。

結局、あれはただの夢。今までのことも、偶然に過ぎない。そう、割り切ることにして、雪乃は顔を洗うために洗面所へと向かった。冬場の冷たい水で顔を洗えば、気持ちも引き締まって気分も変わるだろう。

冷水に少しずつ指先を馴染ませながら、雪乃は思い切ってそれをすくい、一気にかけるようにして顔を洗った。冷たい水が肌を刺激し、今まで半分眠っていた身体が一度に目覚め出す。

横に置いてあるタオルを取り、雪乃はそれで顔を拭いた。水と一緒に嫌な気分まで洗い流したようで、なんとも清々しい。だが、そんな自分の後ろに映る影の中で無数の何かが蠢いていたことに、こ

の時の雪乃はまったく気づいてはいなかった。

> i 1 5 7 9 2 | 1 2 4 5 <

く 逢魔ヶ刻 蟲夢 く (後書き)

本作品は一部に暴力的な表現を含みますが、これは作中の暴力行為をその他を推奨するものではありません。

また、一部の人間が差別的な考え方に囚われて非道な行いを働いたり、それらの人間が法ではなく、個人の意思や超常的な存在によって裁かれる描写が存在します。

これらの描写に対して政治的道德観、及び宗教観から不快な思いをされる可能性がある方は、これより先の内容を読むことを控えるようお勧めいたします。

九条神社の裏手、獣道のような林道を進んだ先に、その泉はあった。泉の向こう側には崖があり、その上から流れ落ちる水が白糸のような滝を作りだしている。

泉の淵で深呼吸をすると、九条照瑠はその清く澄んだ水の中へ、そっと自分の足を挿し入れた。

(ううっ……！ 冷たい……)

瞬間、指先を切り裂かれるような痛みと共に、彼女の身体の芯を冷気が駆け抜けた。爪先から背骨を通り、頭まで走り抜けるようにして、彼女の身体に震えが走る。

このまま、足を引き抜いた方がよいのではないか。そんな思いにも駆られたが、済んでのところでは気が取り直した。真冬の水は彼女の肌を執拗に刺激していたが、ここで怯んでは先に進めない。

そろそろと、少しずつ水に身体を慣らすようにして、照瑠は泉の中へと入ってゆく。纏っている白装束が水を含み、彼女の身体にしっとり張り付いてきた。

腰の辺りまで身体を沈めると、照瑠は手にした桶で水をすくい、それを頭から思い切り被った。

「ひっ……！！」

今まで慣らしていなかった場所に、急に水をかけたからだろう。

思わず口から情けない悲鳴が漏れてしまったが、なんとかその先を咬み殺して寒さに耐える。一つ間違えれば心臓麻痺を起こしかねない行為だったが、それでも照瑠は再び泉の水をすくうと、何度も身体にかけていった。

今、照瑠が行っているのは、典型的な禊の一種だった。神事の前に穢れを払うために行うもので、最も簡単なものでは、神社の一般参拝者が手を水で清めることも含まれる。これが更に厳しいものになると、滝に打たれて精神を研ぎ澄ます滝行などになってくる。

両手、肩、そして最後とは胸元にも水をかけ、照瑠は少しずつ自らの身体の穢れを被ってゆく。腰まで伸びた長い髪は水に濡れ、その先端は泉の中に広がって漂っていた。肌張り付いた白装束が彼女の身体の線を強調し、その姿はいつもよりどこか神秘的な空気を漂わせている。

神事に携わる者でなければ意識もしないことだろうが、俗世間を生きているだけで、人は様々な穢れにさらされている。日常生活を送るのには何ら支障がないものの、神事を行う際には十分な障害となり得るものだ。穢れたままの身体では神に触れることさえも許されず、修業そのものも上手く行かなくなる。

滝行とまではいかなかったものの、照瑠の行っているものは、彼女の神社に代々から伝わる禊の儀であった。滝に打たれず、冷水で身体を清めるだけだったが、それでも真冬に行うのはかなりの抵抗感がある。禊の際に着るものが薄手の白装束一枚ということも相俟って、その寒さは想像を絶するものがあるのだ。

泉の水を一通り浴び終えたところで、照瑠は逃げるようにして泉の中から飛び出した。あのままいつまでも泉の中にいたら、それこ



そ身体の芯から凍ってしまふ。

濡れた衣はそのままに、照瑠は泉の淵に脱いだ草履を履いて林道を下った。途中、道を吹き抜ける風にさらされる度に、衣の下の皮膚に鳥肌が立っているのがはつきりとわかった。どうやら自分は、まだまだ精神的な面でも肉体的な面でも修業が足りないようだ。

林道を抜け、境内の隅にある脱衣所に入ると、照瑠はそこで今まで着ていた白装束を脱ぎ捨てた。そして、あらかじめ用意しておいた巫女の服に着替えると、そのまま社務所の裏口に向かう。

「お父さん、戻ったわよ!!」

裏口で父のことを呼ぶと、社務所の奥から眼鏡をかけた男が顔を出した。その手には、なにやら小さな木の枝を挿した、鉢植えのような物を持っている。

九条穂高<sup>くじょうほたか</sup>。照瑠の父であり、この九条神社の神主を務める男である。が、神主と言っても婿養子に過ぎず、彼は所詮お飾りに過ぎない。神霊に通ずる力など殆ど持ち合わせておらず、形式的な儀式を執り行うだけに留まっている。

そんな父ではあったものの、彼とて腐っても神主。神事に関する知識だけは豊富であり、それは九条家に代々伝わる修業の内容に関するしても同じだった。

「楔は終わったようだね、照瑠。それじゃあ……いつもの通り、木の枝との対話を始めようか」

そう言って、穂高は照瑠を社務所から続く社の本殿へと連れて行

った。いつもは一般の参拝客さえ入らないような場所だけに、そこは常に静寂に包まれていると言っても過言ではない。

本殿は拝殿とは違い、その神社の御神体が安置されている場所である。照瑠はおろか、神主の穂高でさえも滅多に開けない場所だったが、穂高は何の躊躇いもなく本殿の鍵を開けると、照瑠をその中に招き入れた。

中の様子は拝殿とは異なり、実に殺風景な場所だった。もともと御神体を安置するのが目的の場所であり、供物を備えたり神事を執り行ったりするのは拝殿の方である。

本殿の中へ足を入れると、穂高は照瑠にその場に座るように言った。そして、手にしていた鉢植えを彼女の前に置くと、自分は一足先に本殿を出る。そのまま本殿の鍵を閉め、中には照瑠と鉢植えだけが取り残された。

薄暗い部屋の中で、照瑠は目の前に置かれた鉢植えの枝を見つめていた。彼女の正面には御神体の安置されている箱があり、それは注連縄でしっかりと封印が施されている。中に何が入っているのかは、照瑠も穂高から教えてもらってはいない。

大きく息を吸い込んでから、照瑠は鉢植えに刺さっている木の枝にそつと手を伸ばした。上から下へ、慈しむように枝を撫でながら、その中に自分の持つ癒しの気、生命力の根源とも呼べる力を注ぎ込んでゆく。

自分に不思議な力があると気がついたのは、いつたい何時の頃からだっただろうか。恐らく、生まれ持った備わった力なのだろうが、本格的にそれを意識し始めたのは、照瑠が高校に上がったからだっ

た。

自分が手を握ったり患部をさすったりすることで、頭痛や腹痛を起こしている相手の苦しみを和らげることができる。照瑠の友人であり都市伝説マニアの少女、嶋本亜衣の命名した神の右手。

初めは下らない迷信だと思っていたが、今では照瑠も、その力の存在をはつきりと感じ取ることができるようになった。それは一重に、彼女自身が自らの力を使いこなせるようになりたいと思ったことが大きい。

一カ月程前、彼女の住んでいる火乃澤町ほのさわを中心に起きた連続殺人事件。照瑠もまたその事件に巻き込まれ、最後は自らも命の危険にさらされた。そして、そんな照瑠を救ったのが、事件の数週間前に彼女が出会った少女、天倉癒月あまぐらひづきだった。

照瑠を救うため、そして己の父親の所業を清算するため、癒月は炎に包まれる天倉医院の中に姿を消した。その際、自分は何もできず、ただ怯えて震えているだけだった。

別れ際に、天倉癒月は照瑠に言った。照瑠がいつも癒月自身を助けてくれていたと。だから、今度は自分が照瑠を助ける番なのだと。そう言っつて、癒月は狂気に支配された自らの父親を抑え、最後は照瑠の目の前でこの世を去った。

事件の後、照瑠は自分が本当に癒月の力になってやれていたのかを改めて考えた。確かに、彼女が悪夢にうなされていることに対して相談に乗ったり、廊下で倒れた彼女を保健室まで運んだりもしたが、それが本当の意味で癒月の助けになっていたとは、照瑠には到底思えなかった。

癒月が巻き込まれていたのは、他でもない向こう側の世界の力が関係した事件だった。禁術という忌まわしき闇の力によって運命を狂わされた癒月は、自らの命を絶つことでしか、その呪われた力から解放されることができなかつた。

もう、癒月のような者を増やしてはならない。そのためには、自分の中に眠る力を解放する必要がある。そう考えて、照瑠は父である穂高に巫女としての本格的な修業を行いたいと頼んだのだ。

照瑠からその言葉を聞いた時、初めは穂高も難色を示した。今は亡き彼の妻の遺言によれば、照瑠には可能な限り、普通の女の子としての生活も経験させてやって欲しいとのことだったからだ。

本当は、照瑠が十六歳の誕生日を迎えるまで、穂高はこの話を秘密にしておくつもりだった。それまで照瑠には普通の女の子として生活してもらい、頃合を見計らって巫女の修業を開始する。彼の頭の中にあつたのは、そんな計画である。

だが、娘である照瑠から修業したいと申し出て来たのであれば、穂高もそれを断るわけにはいかなかった。

元より、九条家は代々女系の一族である。巫女としての力は女にしか遺伝せず、その中でも最も強い力を持った者が、次代の巫女となる。照瑠の母も、祖母も、そうやって巫女としての力を手に入れて、最後は街の癒し手として多くの人の助けになってきた。

再び息を大きく吸い込むと、照瑠は肺の中に溜まった空気を、そっと吐き出しながら木の枝を愛でた。優しく、慈しむようにして、その根が鉢に根付くように祈りながら。その枝先に、春になれば青

々とした若葉となる、小さな蕾が生まれるように願いながら。

九条家の巫女に代々伝わる力。それが、照瑠も潜在的に持っていた癒しの力だった。父の話によれば、照瑠の潜在能力は代々の巫女の中でも極めて高いものらしい。無意識の内に力を発動することも稀ではなく、それが今まで、彼女が友人達の頭痛や腹痛を払ってきた原因だったのだろう。

癒しの力は、闇の力と相反するもの。その力があれば、闇に呑まれて苦しみながら死んでゆく人間も助けられるのではないか。あの、天倉癒月のような者を、これ以上出さずに済むのではないか。そう考えた照瑠が修業に精を出すようになったのは、実に自然な流れだった。

「ふう……。今日は、ここまでかな……」

自分の肩に軽い脱力感を感じながら、照瑠は鉢植えから静かに手を離れた。随分と長い時間、それこそ実に小一時間ほど気を送っていたために、照瑠の顔にも少々疲れが見える。

程なくして本殿の扉が開き、穂高が照瑠のことを迎えに来た。彼女の前に置かれた鉢植えを手にとって見ると、穂高は「まだまだ、相手のことを感じ取る力が弱いね」とだけ言っただけで本殿から出た。

照瑠も無言のまま立ち上がると、穂高に続いて本殿を後にした。そのまま二人して社務所の裏口に回り、少し古びた木製の扉を横に開く。

あれだけ頑張っただけなのに、父は一言も誉めてはくれなかった。だが、今日の結果は照瑠自身もよくわかっていただけに、何

かを言い返す気にはならない。

穂高の話では、照瑠は既に自分の中にある気の存在を感じ、その力で他人を癒すところまではできるようになっていたことだった。もつとも、照瑠自身にその自覚はない。無意識の内に、それこそ感覚的にやっているだけで、自分で力をコントロールしているとは到底思えない。要は、やってみたら、何故だか知らないが上手く行ったという程度のものだ。

自分でも知らない内に、力の使い方を徐々に覚えて行く。それだけでも凄い事ではあるのだが、照瑠の目指すものはその先にある。

穂高の話では、今の照瑠は一方的に相手に陽の気を送りこんでいるだけのことである。相手の調子に合わせることなく、とにかく気を送りこんで活力を与える。一見して強い癒しの効果があるように思えるが、これでは駄目なのだ。

ヒーリングとは、時に相手の気の流れを感じ、さらには相手に合わせて局所的に気を送り込むことで初めて成功する。一方的に気を送り続けることは、言うなれば点滴のようなもの。一時的に全身が活力に満ち溢れるが、それでは真の癒しの効果は望めない。

現に、先ほど照瑠が撫でていた枝も、彼女が修業を始めてからまったく成長の兆しを見せていない。神社の裏山にある御神木の枝を挿し木にしたものなのだが、一向に鉢植えに根付いた様子がないのだ。

照瑠が気を送り続けることで枯れてしまうことはなかったが、それでも所詮は延命治療のようなもの。彼女が真に自分の力を操れるようになるのは、まだまだ先のことになりそうである。

「まあ、そう慌てずに、ゆっくりと力をつけることだよ」

修業が思うように捗らない照瑠に、穂高はそう言った。

照瑠の才能は、穂高もよく心得ている。彼自身、神霊に通じる力は殆どないと言ってよかったが、それでも自分の妻が生前に見せていた力を知っているだけに、その一端を娘が無意識の内に使いこなせるというだけでも密かに感心していたのだ。

「それじゃあ、私は掃除に行ってくるから。お父さんは、悪いけど鉢植えをよろしくね」

「ああ。この季節、まだまだ枯れ葉も多いからね。修業に神社の仕事に、それから学業……。しばらくは大変だと思うけど、くれぐれも無理をして風邪なんか引かないでくれよ」

「わかってるって。お父さんこそ、テレビ見ながらコタツで寝て、悪い風邪を引き込まないようにしてよね」

「大丈夫だよ。その時は、照瑠の力で治してもらえばいいことだからね。この調子なら、来年から我が家は医者要らずってことになるだろうし……」

「ちょっと、お父さん！ 自分の娘を風邪薬代わりに使おうなんて……本当に調子がいいんだから！！」

玄関先にある竹箒を手を取って、照瑠が少々呆れた顔をしながら叫んだ。

常に飄々とした様子で人を食った態度を崩さない。神主の癖に妙に俗っぽく、どこまで本気で物事を考えているのかさえもわからない。

照瑠から見ても、穂高はそんな父親だった。修業をするために彼の知識を頼らねばならないとはいえ、話をしているとどうにも調子が狂ってくる。年頃の娘にありがちな父親を毛嫌いする関係にまでは至らなかったが、それでも照瑠はもう少し自分の父にしっかりと欲しいと思っていた。

ガラガラ、という戸の閉まる音がして、照瑠は社務所を出て行った。独り残された穂高は社務所の奥に引込むと、そのまま客人を招くときに使う応接室の襖を開けた。

いつもであれば、殆ど使われることのない社務所の一室。正月にはまだ早いと、参拝客がここを利用することも少ない。が、今日に限って卓袱台の上にはお茶の入った湯飲みが置かれ、その前には赤い目をした一人の少年が座っていた。

湯飲みのお茶を飲み干して、少年は無言のまま穂高を見た。その肌の色は雪のように白く、髪の色もまた脱色されたような白金色に染まっている。虹彩は血のように赤く、その瞳の中には常に影のよくなものを漂わせてもいる。彼が先天的に失陥した白子症であることは、誰の目からも明らかだった。

「お待たせしましたね、犬崎君」

穂高はそう言って卓袱台の前に腰を下ろしたが、少年は答えなかった。



犬崎紅<sup>けんさきこう</sup>。闇を用いて闇を被う、赫の一族の末裔。己の影に犬神を住まわせ、あらゆる魂を貪欲に喰らう妖刀をも使いこなす、現代を生きる外法使い。

今年の六月に起きた『八ツ頭事件』において、彼はその裏で暗躍する古の怪物を封じるために、火乃澤町にやってきた。穂高と彼は、その際に知り合った。

「いやあ……それにしても、我が娘ながら、照瑠の才能には驚かされますよ。修業を始めてから一月と経っていないというのに、もう自分で癒しの力を相手の身体に送り込むことができるようになっていたのですから」

「親ばか……というやつか？ あいつの才能は俺も十分に知っている。だが……才能だけで全てが上手く行くほど、向こう側の世界に通ずる力の制御は楽ではないぞ」

「これは手厳しいですね。ですが……まったくもって、その通りですよ。現に照瑠は、まだ感覚でなんとなく対象に力を送っているに過ぎません。もっとも……それでさえ、並みの霊能者でも数年は修業を積みねばできないことなのですけどね」

穂高は何気なく言っていたが、彼の言っていることが極めて特殊な例であることは、紅も十分に理解していた。

向こう側の世界の者と戦う力を得るために、紅自身もまた厳しい修業を積んできた経験のある人間である。それこそ、物心ついた時から祖父に剣の使い方を手解きされ、小学生の頃は、ひたすらに常人が見ることのできない存在を見ることができるよう力を開発された。

四国の山奥にある村で、代々退魔師としての仕事を続けて来た家系の紅でさえ、素のままでは向こう側の世界に通じる力を操ることなどできなかつた。己の家系、赫の一族の中でも最年少と呼べる程に紅は若かつたが、彼の力は決して才能に依存して得たものではない。

九条照瑠の力が優れていることは、紅も彼女と出会った頃から気づいていた。古の魔物との戦いで傷つけられた紅の霊体を、照瑠は触れるだけで癒したのである。今まで膝を大地についでいた紅が、すぐに立ち上がって山道を降りられるまでに回復させたのだから、その力の凄さがわかるといふものだ。

しかし、紅はそれだけに照瑠のことが心配だった。

向こう側の世界に通じる者は、自らもまた向こう側の世界の存在と引き合う運命にある。それは、時に偶然の様な出会いかもしれないが、互いの存在がテレパシーのような何かで、無意識に引き合っていたことには変わらない。

照瑠が強い力の持ち主であり、その力を更に開発しているのであるとすれば、これからも彼女は向こう側の世界の存在と関わることになるのだろう。そして、優れた才能は時として、その持ち主を闇の世界に引き込むきっかけを作ってしまうこともある。

「ところで……俺をこの場に呼び付けた理由は何だ？ まさか、わざわざ娘の自慢をするために、ここへ呼んだわけでもないだろう？」

お茶を飲み干した後の湯飲みを脇に退け、紅はその燃えるように赤い瞳で穂高を見た。彼の予想が正しければ、穂高が紅をここへ呼

び付けた理由はただ一つだ。

果たして、そんな紅の考えは正しく、穂高も自分の前にある湯飲みのお茶を飲み干して紅を見た。中身は既に冷めてしまっていたが、さほど気にはしていないようである。そして、少しだけずれた眼鏡の位置を指で直すと、先ほどとは異なる真面目な表情に変わって語り出した。

「やはり、さすがと言うべきなのでしょうね、犬崎君。私がいかにオブラートに包もうとしても、あなたはいつもその先にあるものを感じてしまう。本音と建前を使い分けるのは得意なつもりだったのですが……私もあなたには隠し事ができそうにありません」

「前置きはいい。それで……俺をここへ呼んだ理由は何なんだ？」

「それも、あなたは既に気付いているのでしょうか？ 私があなたをここへ呼んだのは、他でもない照瑠のことで頼みがあるからですよ」

「やはりな……。修業で少しずつ力を操れるようになっていくのが、一番危険な時でもある。慢心から己の力に溺れたら、その結果に待つのは破滅だけだからな」

紅の目に、憂いとも取れる表情が浮かんだ。その瞳が意味するものを、穂高は知らない。が、紅の過去に思い出したくない何かがあることだけは、彼にもわかった。

「まあ、慢心というわけではありませんが……照瑠は少し急ぎ過ぎているような節がありますね。そう簡単に力を操れるようになれば苦労はしないというのに、少し行き詰まっただけで、早くもスランプになりそうな感じなのですよ」

「なるほど。だが、俺にはあなたの娘の修業を手伝うような真似はできないぞ。あいつが悩んでいるからといって、カウンセラーの役割を引き受けるのも柄じゃない」

「そこまでは望みません。ですが、今の照瑠がひじょうに不安定な状態にあるのも確かです。無論、あなたの言う向こう側……側の世界の住人との邂逅が、より悪い方向で果たされる可能性も含めてね」

「それは言えているな。ならば俺も、もうしばらくは火乃澤町に留まろう。その間、あなたの娘が妙な連中と関わり合いを持たないように努めること。そして、万が一のことがあった場合、その闇をあいつに代わって被うこと。それが、そちらの望みだろうか？」

「いや、さすがに話が早くて助かりますよ。では、これからもうちの娘を頼みますよ」

「ああ、任せておけ。こちらもそれとなく見張らせてもらっさ。せいぜい……ストーリーカーに間違われない程度にな」

そこまで言って、紅は自分の言葉に思わず苦笑した。

一向こう側の世界の住人と関わるようになってから、冗談などとは無縁の生活を送ってきた。そんな自分の口から、先ほどのような台詞が出る。これも、この火乃澤町に来てから出会った、様々な人間の影響かと思えた。

今まででも多くの霊的な存在が関わった事件に巻き込まれながら、それでも真っ直ぐに立ち向かうことを忘れない九条照瑠。都市伝説オタクで、底抜けの明るさと奇妙な人脈を持つ少女、嶋本亜衣。そ

して、その他にも自分の周りで実に賑やかな学園生活を送っている、様々な級友たち。

その数は決して多くはなかったが、今の自分は昔に比べて恵まれている。その影響が自分にもまた現れていることに、紅は不思議な気持ちになった。

四国の外れ、故郷の土師見村はじみにいたときには、およそ考えられなかったことである。古くからの因習に囚われた村の中で、紅達の一族に向けられていたのは偏見の入り混じった畏敬の念。それは時に露骨な差別として紅を幾度となく苦しめた。

この世に生を授かったときから、自分には異端者としての人生しかない。だが、それを受け入れられなかった一人の少女は、紅に対して依存することで苦しみから逃れる術とした。その結果、彼女は心を闇に蝕まれた上で、紅の手にかかって現世うつしよから消えた。

忘れもしない、自分が初めて本格的に向こう側の世界に足を踏み入れたときの事件である。あれから既に二年程の時が経った今でも、そのやるせなさは未だに紅の心の奥底に染みついて離れない。

傍らに置いてあった荷物を片手に、紅はその場を何も言わずに立ち上がった。もう一杯、お茶でも飲んで行けと促す穂高を適当にあしらい、そのまま部屋を後にする。

九条照瑠が変わって行くように、自分もまた変わって行く。それは喜ばしいことなのかもしれないが、それでも紅は、自分の中にある闇を忘れたわけではない。

自分が九条照瑠を守ると決意した理由。それは、生まれながらに

強い力を持った者が、その力の強さ故に闇に堕ちてゆくのを救いたいという想いからだ。

赫の一族として、自分が背中に背負っている様々な咎。それを清算するために、贖罪の一環として闇と戦う決意をした。そのためには、己の中に巢食っている闇を、決して忘れてはならないのだ。

自分に純粹な好意を抱いていた一人の少女。彼女をその手にかけてしまったことを含め、まだまだ紅自身、己の業に対する贖罪を果たせたとは思っていない。

神社の境内を掃除する照瑠に気づかれないうち注意しながら、紅はそつと社務所の外に出た。幸い、照瑠は裏手の方に回っているようで、鳥居の前には誰もいない。

枯れ葉を踏んで足音を立てないように気をつけつつ、紅は急ぎ足で鳥居に続く階段を降りた。穂高の依頼のことを照瑠には伝えていないため、彼女に出会って話がこじれるのはよくないと思った。

入相の鐘が鳴り響き、辺りは既に血のような夕日に染められている。神社の鳥居に向かって伸びる紅の影は、その背丈の数倍はあるうかという長さにまで伸びている。

石段を降りたところで、紅はちらりと後ろを振り向き、その先に見える自分の影に目をやった。傍から見れば何の変哲もない影だったが、紅にはそれが、金色の目をした巨大な犬の姿に映っていた。

暮も近くなると、それに伴い学校も行事が減ってくる。やれクリスマスだ、大晦日だと家が騒がしくなる一方で、それらに直接関わっている学校行事がないことが原因だろう。

照瑠達の通う県立火乃澤高校も、それは例外ではない。今週の金曜で学校も終わり、その翌日はクリスマス。そして、そのまま流れるように冬休みに入り、後は翌月の第二週辺りになるまで学校はない。ただ、その前に学校行事の中でも最も面白くないものの一つ、通知表渡しがあるのが気に入らなかつたが。

「おっはよ、照瑠！ 今日寒いなー！」

照瑠が校門をくぐろうとしたその時、聞き慣れたハスキーボイスが耳に入った。声のする方に顔を向けると、そこにあるのは小学生程の背丈しかない少女の姿。もっとも、彼女の着ているコートからして、同じ火乃澤高校の生徒であることは間違いない。

「あら、亜衣じゃない。あなたが遅刻しないで来るなんて、珍しいじゃない」

目の前の小柄な少女、嶋本亜衣に対し、照瑠は少々驚いたような表情をして言った。

都市伝説マニアで有名な間が、実際のところ、その趣味は実に多岐に渡る。思いつきでボランティアに参加してみたり、祭りともあれば年甲斐もなく騒ぎまくったりと、その行動には枚挙に暇がない。怪しげな深夜番組を夜通しで見て、その結果、寝坊して学校に遅刻することもしばしばである。

そんな亜衣だったが、今朝は珍しく照瑠と同じ時間に登校して来ていた。朝のホームルームが始まるまでは、まだ三十分も時間がある。

遅刻魔として担任からも目をつけられている亜衣が、こつも早く学校に来る。これはきつと、また何か妙なことを企んでいるに違いない。思わずそんな考えが頭をよぎり、照瑠は心の準備をしてから亜衣に話しかけることにした。

「ねえ、亜衣……。あなた、今日は随分と早いけど……。何か、また変なことを企んでいるってわけじゃないわよね？」

「むうう……。変なこととは失礼な！今日は照瑠に、とってもハッスルできる話を持ってきたってのに！！」

「とってもハッスルって……。悪いけど、私はあなたみたいに、後先考えずに馬鹿騒ぎするような人間じゃないからね」

「大丈夫、大丈夫。今回のやつは、普通の人でも絶対に楽しめることだから！！」

自信に満ち溢れた表情を浮かべ、亜衣は照瑠にそう言った。だが、亜衣の価値観が一般のそれと微妙にずれていることを考えると、ここで油断して話に乗るわけにもいかない。

「まあ、あなたが何を考えているのかは知らないけど、とりあえず話だけは聞いてあげるわ。それで、私にも楽しめそうなものだったら、その時は改めて御一緒させてもらおうよ」

「おお、話が早いですな、照瑠殿！でも……。物が物だけに、ちょ



つとこんな場所で話すのも気が引けるんだよね……。つてことで、  
続きは教室に入ってからつてことでもいい？」

「散々勿体つけておいて、オチはそれなの？ 確かに、こんな寒い  
場所で立ち話つてのは、私もどうかと思うけど……」

「まあまあ、そう言わずに。楽しみは最後まで取つておいた方が、  
感動も大きくなるつて言うしね！！」

妙に説得力のある台詞を言いながら、亜衣は滑るようにして通用  
口へと走り込んで行く。その後を、照瑠も仕方なしに追つて行く。

校舎の中に入ると、そこはほんのりと温かい空気が広がつていた。  
火乃澤町は東北にある小さな町。豪雪地帯に位置しているだけあつ  
て、学校側も冬場に備えた暖房の用意は抜かりない。

階段を上がつて教室に入ると、廊下よりも更に温かい空気が照瑠  
達を迎え入れた。手袋とマフラーを外すと、首元や手先が冷えない  
ことに思わず安堵の溜息が出る。

「さて、と……。それじゃあ、どこから話しましょうかね、照瑠殿  
？」

亜衣が椅子に後ろ向きに腰かけて言った。

「どこからも何も無いわよ。私はまだ、あなたが何を考えているの  
かさえ聞いてないんだから」

コートを教室の壁にあるフックに掛けながら、照瑠も亜衣に言葉  
を返す。それを見た亜衣は、「そうでしたあゝ」などと言いながら、

わざとらしく頭を叩いた。

「それで……話っているのは何なの、亜衣？」

「ふっふっふ……。聞いて驚いたら駄目だよ、照瑠。実は私……こんな物を手に入れたんですなあ……」

思わせぶりな笑みを浮かべながら、亜衣は鞆の中から数枚のチケットのような物を取り出した。よくよく見ると、それはどうやら何かのコンサートのチケットのようだ。大方、怪しげな都市伝説の本でも出してくると思っただけに、照瑠としては少々拍子抜けである。

「それ、コンサートか何かのチケットよね？ いったい、誰のコンサートなの？」

「よくぞ聞いてくれました！ 実はこれ、今話題のT Driveのやっている、地方公演コンサートのチケットなんだよね。今度の土曜日にやるらしいから、照瑠もよかつたら行って見ない？」

「T Driveって……それ、今巷で人気のトップアイドルのコンサートじゃない！ ファンクラブの会員だってチケットを入手するのが難しいって言われているのに、どうしてまたそんな物を……」

「いやいや、そこは『人脈の亜衣ちゃん』ですから。もともと、さすがの照瑠も私がT Driveのメンバーの一人、長谷川雪乃ちゃんの幼馴染だっことは知らなかったみたいだけどね」

「は、長谷川雪乃の幼馴染って……。亜衣、あなた、それ本当なの！？」

亜衣の口から出た言葉に、照瑠は思わず目を丸くして声を上げた。

長谷川雪乃と言えば、紛れもないT Driveのメンバーの人だ。普段は大人しく控え目な印象が目立つが、ステージで歌っている時の歌唱力はかなりのものがある。照瑠は彼女のファンというわけではなかったが、国民的なアイドルの一人を知らないわけではなかった。

それにしても、あの嶋本亜衣が、T Driveの一員と幼馴染だったとは。いつもは『人脈の亜衣ちゃん』という彼女の自称に呆れてもいたが、今回ばかりは脱帽である。

しかも、長谷川雪乃と亜衣が幼馴染であるということは、雪乃はこの火乃澤町の生まれということになる。確かに彼女は公式のプロフィールでも東北の生まれとされていたが、まさかそれが、自分の住んでいる街だとは思わなかった。なんというか、世界というのは広いようでいて、意外と狭いものである。

「それで……あなた、どうやってコンサートのチケットを手に入れたわけ？ 大方、長谷川雪乃のマネージャーか、または本人に頼んで強引に手に入れたんでしょうけど……」

「ご名答！ ゆっきーと私は、今でも時々メールでやり取りするよ。うな仲だからね。コンサートのことを聞いて、これはチャンスと違って連絡したら、気前よく四枚も送ってくれんだ!!」

「なるほどね。でも、どうして四枚も送ってもらったのよ。あなたがコンサートに行くだけなら、一枚だけでいいじゃない」

「うん……。実は、そのことなんだけど……」

照瑠から言われ、亜衣は突然決まりが悪そうな顔をしながら言葉を濁した。先ほどまでの調子は姿を消し、どこか人の目線を避けるようにして話し出す。

「ゆつきーに頼んで送ってもらったチケットの内の三枚を、ネットオークションで転売しようとしたことが親にバレまして……。ネット上でもダフ屋行為は禁止されているようなものだから、さすがに怒られちゃってね。誰か、友達と一緒に行くとか……。とにかく全部のチケットを正しい使い方で使い切らない限り、コンサート前に全部没収だって言われちゃったんだよね……」

「はあ……。まったく、どうしてあなたは、いつも妙なところで悪知恵を働かせるのよ……。しかも、チケットの転売って……。さすがに今回ののは、正直笑い事じゃ済まないわよ」

「はい、反省してます……。と、いうわけで……。私と一緒に、コンサートに行ってくれませんかね、照瑠殿？ このまま誰も一緒に行く人がいなかった場合、チケットは漏れなく一枚残さず親に没収されてしまうわけでして……」

「仕方ないわね……。今週末の土曜日って言うと、調度クリスマスの日よね。私も別に用事があるわけじゃないし、一緒に行ってあげるわよ」

「おお、照瑠殿〜！ やはり、持つべきものは、お互いに彼氏のいない友達ですなあ……」

そう言いながら、亜衣は照瑠の手を大袈裟に握り締めてきた。まったくもって呆れ返るばかりの展開に、照瑠は開いた口が塞がらな

い。トップアイドルと幼馴染だったと知って、少し感心したら、もうこれである。

「とにかく、これでチケットの内の一枚は消えたわね。残るは二枚だけど……他に誰か誘う当てでもあるの？」

「いや、それがさっぱりなんだよね……。クリスマスは、みんな何処かしらに出かける予定が入って……。今から誘うとなると、やっぱり難しいんだよ」

「そっかあ……。なら、詩織と長瀬君でも誘おうかな。あの二人だったら、割と気軽につき合ってくれそうな気がするけど……」

自分の所属する文芸部の友人と、その彼氏である少年。二人のことが頭に浮かんだ照瑠だったが、亜衣はそんな照瑠の提案をすぐさま否定した。

「駄目だよ、照瑠。クリスマスともなれば、恋人とは水入らずで一緒にいたいと思うものだって」

「そうよねえ……。いくら二人の仲を皆知っているからって、やっぱり友達も混ぜって過ごすっていうのは、ちょっとムードに欠けるわよね……」

「そうそう。それこそ、今週末はあの二人、『玄関開けたら二分であはん』な甘々の展開になっているかもしれないんだしさ」

「朝から真顔で下ネタ言うの止めなさい、亜衣……。でも、そうすると、他に誘えそうな人って思い当たらないなあ。亜衣のお得意の人脈でも暇人を捕まえられないんだから、私じゃこれが限界か……」

「だよねえ……。このままじゃ、チケット取り上げ確定だったのに……ああ、どうしよう、照瑠」

「そうやって、捨てられた子猫みたいな目で見られても困るわよ。まあ、今週末までには、まだ時間があるんでしょ？ だったら、その間に暇している人を見つければいいじゃない」

目の前で泣きそうになっている亜衣をなだめながら、照瑠はふと犬崎紅のことを考えた。いつも図書室で居眠りしている彼ならば、暇なことには違いない。

だが、そんな自分の考えも、今の状況を変えるためにさして役立つとは思えなかった。あの犬崎紅が、自分からアイドルのコンサートに出掛けるような人間とは到底思えない。仮にこちらが誘ったとしても、面倒臭そうな顔をして断るに決まっている。

やはり、紅は当てにできない。ここは友人のためにも、なんとか今週中にコンサートに行くメンバーを集めないとまずそうだ。

月曜の朝からとんだ苦労を背負い込むことになった照瑠だったが、それでも彼女は心のどこかで週末のコンサートを楽しみにしていた。

ここところ、家での修業もなかなか進展がない。あれこれと悩んでいても行き詰まるだけだし、ここは一つ、気分転換にもなるだろう。アイドルの歌などまともに聞いたことは少ないが、たまにはそういった類の曲で盛り上がるのも良いかもしれない。

暮の迫る最中、降って湧いたように訪れたコンサートへの誘い。だが、この時は、それが新たな事件の幕開けであることに、照瑠は

まったく気づいていなかった。

週末の土曜日までは、瞬く間に時間が過ぎた。今週は間に祝日が挟まったことも相俟って、いつも以上に学校に行っていた気がしない。その上、祝日明けの金曜日は終業式があるだけだったので、比較的のんびりと過ごすことができた。

駅前の待ち合わせ場所で、照瑠は独り空を見上げながら亜衣のことを待っていた。

今日は亜衣の言っていた、T-Driveのコンサートの日である。開会の時間にはまだ早かったが、それでも照瑠は不安だった。

コンサート会場は火乃澤町から少し離れた県庁所在地の市内にある。ここから市内までは、特急を使っておよそ一時間と少し。チケットを持っているとはいえ、会場には朝早くから並んでおかねば良い場所を先に取られてしまうだけに、どうしても気持ちばかり焦っていた。

（はぁ……。それにしても、結局コンサートに誘える人なんて見つからなかったな。亜衣は大丈夫だって言っていたけど……。いったい誰を連れて来ることやら……）

亜衣の頼みを聞く形で、照瑠も今日のコンサートと一緒に行けるような友人を探してはいた。が、やはりクリスマス当日は、誰しも予定が入っているもの。そうそう簡単に誘えるような相手も見つからず、結局は全て亜衣に任せる形になってしまった。

亜衣の自称は、『人脈の亜衣ちゃん』である。その名前から察す



るに、恐らくは誰かしら当てがあるのだろう。

もつとも、あの亜衣の友人だけに、あまり期待しない方が身のためではある。アイドルのコンサートというからには、きつとファンの一人でも連れて来るつもりなのだろう。眼鏡をかけて丸々と太った、いかにもオタクを絵に描いたような人間が来たらどうしようか。照瑠がふと、そんな想像をしたときだった。

「随分と早いな、九条。お前の方が、先に来ていたか……」

突然、彼女の後ろから声がした。慌てて声の聞こえてきた方へと振り向くと、そこには彼女の良く知る赤い瞳の少年の姿があった。

「け、犬崎君！？ ど、どうしてあなたが、こんなところへ……？」

「月曜の放課後に、嶋本のやつに呼ばれてな。今週の昼飯を全部奢るから、代わりにコンサートにつき合えと言われた」

「それで、二つ返事で了解したってわけ？ それとも……まさか犬崎君、実はT Driveのファンでした、なんてことはないわよね？」

「当然だ。アイドルだかなんだか知らないが、俺はそう言った類の人間が歌っている歌を聞く趣味はない。だが、女から昼飯代を巻き上げるのも気分が悪いからな。仕方なく、義理でつき合ってやることにしただけだ」

「義理って……。それ、コンサートで歌っている人達に失礼よ」

相変わらずの無愛想な表情で淡々と語る紅の前に、照瑠も少しだ

け眉を吊り上げて言い返した。チケツトが欲しくても手に入らない人だっているというのに、紅のこの態度はさすがに理解できない。

興味がないのであれば最初から行かなければ良いというのに、昼食を奢ると言われただけで簡単に話しに乗ってしまふ。それでいてコンサートへの参加はあくまで義理などと言いつつ放つたから、紅の考えていることは本当にわからない。

貧乏性で金に意地汚いところがあるかと思えば、妙なところで義理固い。いったい彼の価値基準とは、何に重きを置かれているのだろうか。

（そう言えば……犬崎君って、いつもどんな生活しているんだろう？）

紅の頭の中身について考えていた照瑠は、なんとなくそんなことが気になった。

紅がどこに住んでいて、いつも何をしているのか、照瑠はまったく教えてもらったことがない。照瑠の知っている紅と言えば、授業中か否かに問わず、常に爆睡している締まりのない姿。後は、恐ろしい力を持った向こう側の世界の住人と戦っているときの、鬼気迫る表情だけである。

まぬけで浮世離れしている普段の姿と、その荒々しい本性を剥き出しにして闇と戦う影の姿。これらもまた、同じ人間の性質とは思えないほどにかけ離れているものだ。行動にしろ価値観にしろ、どうやら紅は極めて裏表の激しい人間のようなようである。

（まあ、考えていても仕方ないわよね。犬崎君が、いつも何してい

るかなんて……別に、聞いたって何か得なことがあるわけでもなさそうだし)

目の前で退屈そうに欠伸をしている紅を見て、照瑠は今しがた自分の頭に浮かんできた疑問を振り払った。

紅の普段の生活など、今はどうでも良い話だ。それよりも、言い出しっぺの亜衣が未だ姿を見せていないことが気にかかる。

まさかとは思うが、こんな日に限って寝坊したのではあるまいか。そんな不安を照瑠が抱いた矢先、通りの向こうから駆けて来る小柄な少女の姿が目に入った。

「おーい、照瑠〜!!」

「あつ……遅いわよ、亜衣! 自分から呼んでおいて、その張本人が遅刻したら話にならないじゃない!!」

「まあまあ、そう怒らずに。特急電車が来るまでには少し時間があるし、最後の一人だって、ちゃんと声をかけておいたからさ」

照瑠の前に現れた亜衣が、何ら悪びれる様子もなく言うてのける。散々人を巻き込んでおいて、お調子者なのは相変わらずだ。もっとも、そんな亜衣にいつも最後までつき合っただけでいる自分もまた、かなり酔狂な人間なのではないかと照瑠は思ったが。

「それで……その、最後の一人って言うのは誰なの? あなた、月曜には誘う相手がいないってばやっていたじゃない」

「月曜は月曜、今は今だよ。現に、こうしてちゃんと犬崎君に来て

もらっているしね」

「食事を餌に釣って、強引に誘っただけでしょう……。どうせ呼ぶなら、ちゃんとしたフアンの人を呼んだ方が喜ばれるっていうのに……そんなことじゃ、自慢の人脈が泣くわよ」

「それを言わんでくださいな、照瑠殿。それに、何を隠そう最後の一人は、その人脈を使って呼んだようなものだからね」

多少の皮肉も入った照瑠の突っ込みを、亜衣は自信に満ちた表情で受け流す。殆どの場合は根拠のない虚勢か勘違いのことが多いのだが、それにしても妙に強気だ。

果たして、そんな亜衣の言葉通り、最後の一人が照瑠達の前に姿を現した。緑色のトレンチコートに身を包んだ、照瑠達よりも一回りほど上の年齢の青年である。

「やあ、君たち。久しぶりだね」

「もう、遅いじゃん！ 刑事なのに遅刻するなんて……そんなんじや、事件の犯人に逃げられちゃうよ！！」

「そう言ってくれるなよ。こちらら、昨日は夜遅くまで残業だったんだから……」

そう言って頭をかいている青年を、亜衣が顔を膨らませて小突いている。傍から見れば小学生が知り合いの大人とじゃれ合っているようにしか思えないだろうが、照瑠は目の前にいる人物の顔を見て、空いた口が塞がらなかった。

「ねえ、亜衣……。これ、いったいどういうこと？」

「どういうことって……。この人が、今日のコンサートに行く最後のメンバーだよ。さすがの照瑠も、このサプライズにはびっくりしたでしょ？」

「サプライズって……。あなたねえ……」

目の前で亜衣の攻撃を適当に流している青年の顔を改めて見て、照瑠は全身から力が抜けて行くのを感じていた。今、自分の前にいるのは、他でもない本物の警察官なのだから。

くみちちる  
工藤健吾。照瑠の街にあるN県警火乃澤署に務める刑事の一人だ。まだ二十代半ばであるにも関わらず、ノンキャリアで巡査部長まで昇進したやり手である。が、その気前の良い性格が災いし、どうにも貧乏くじを引かされることが多い、少し哀れな男でもある。

工藤のことは、照瑠もよく知っていた。今までに自分が巻き込まれた心霊事件に、彼は何らかの形で関わるが多かった。もっとも、どうやら工藤はお化けや幽霊の類が苦手らしく、あまり役に立っているところを見たことはないのだが。

「あの……。刑事さん。今日は土曜日ですけど……。お仕事、お休みなんですか？」

照瑠が工藤に、少し遠慮がちな口調で尋ねた。大方、亜衣が無理やりに誘ったと思われるため、どうしても相手に対して引け目を感じてしまう。

「一応、僕も今日は非番だよ。もっとも、折角のクリスマスだって

いうのに、一緒に夜を過ごせるような彼女はいないけどね」

自嘲気味な笑みを交えながら、工藤は照瑠に答える。

「まあ、それでも折角のお誘いだ。T Driveのファンってわけじゃないけど、たまには高校生の頃に帰って、一緒に楽しむのも悪くないと思ったしね」

「刑事さん……。その台詞、なんだか少し親父臭いですよ……」

「おいおい、手厳しいなあ。こう見えても、僕はまだ二十代なんだけど」

自分は照瑠達よりも一回り上の年齢だが、親父と呼ばれるにはまだ早い。もともと、現役の高校生からすれば、二十代も三十代も、さして変わりのないことなのかもしれない。そんな現実に、工藤も思わず苦笑した。

「それじゃあ、そろそろ電車も来る頃だし、行くとしますか。早く並ばないと、良い場所を取られちゃうからね」

メンバーが全員集まったことを確認し、亜衣が独り張り切って指揮を執り始める。なんだか完全に彼女のペースに巻き込まれている気がしたが、照瑠は何も言わずに黙っていた。

神社の巫女に都市伝説マニアの少女。現役警察官に、果ては現代を生きる外法使い。まったくもって無茶苦茶な組み合わせの珍道中だったが、そんな妙な人間関係にも、照瑠はどこか慣れてきている自分がいることを感じていた。

N県内にあるコンサート会場の控室で、長谷川雪乃は自分の出番を待っていた。同室には夏樹や咲花の姿もあり、それぞれが舞台の最終確認に余念がない。

十二月に入ってから行ってきた地方公演コンサートも、今日で一応の終わりとなる。その後、雪乃は自分の地元を二日ほど帰省し、再び東京へと戻る予定になっていた。

雪乃の地元は県内にある小さな町だ。アイドル活動を続けるために上京してからというもの、殆ど実家には帰っていない。だが、年の暮は少しでも家族と過ごした方が良いというプロデューサー側の配慮もあって、雪乃は数日の間だけ家に帰ることを許されていた。

地方公演の最後の場所がN県なのも、そこに雪乃の実家があるからである。何を隠そう、今回の公演で各県を周る順番を決めたのは、他でもないプロデューサーの高槻だ。交渉はかなり難航したらしいが、それでも高槻は、最後の公演を行う場所に関してだけは譲ることはしなかったという。

自分は様々な人に支えられている。最終公演を控えた雪乃は、改めてそれを感じていた。

常に厳しく、しかし責任感のある行動を取り続けるリーダーの夏樹。

明るいまードメーカーで、常に笑顔を絶やすことをしない咲花。

そして、担当しているアイドル達のことを第一に考えて行動し続ける高槻プロデューサー。

自分はなんと多くの人に支えられて、ここまで来ることができたのだろうと思う。中学を卒業すると同時に、メンバーの中では最も遅く芸能界に足を踏み入れた自分。その自分が、一年も経たない内に、ここまで大きな舞台に立てるようになった。それが現実だとわかる度に、身体に言い様のない震えが走る。

今までにもドームや武道館でのライブを経験してきたが、それでもコンサートの前になると、どうしても緊張してしまう自分がいた。ともすれば物事を後ろ向きに考えがちなのは悪い癖だと思っていたが、そんな彼女の考えは、早速夏樹に見抜かれた。

「ちょっと、雪乃！ あなた、さっきから随分と固まっているみたいだけど……本番、大丈夫なんでしょうね？」

「えっ……。あ、うん。私は大丈夫だよ、夏樹ちゃん」

「ならいいけど。それにしても……地方公演の最後を東北で締め括るっていうのも、なんだか不思議な感じよね。普通だったら東京で、それこそ武道館やドームでフィナーレを迎えるようなものなのに」

「まあまあ。たまには、こういうのもいいじゃないですか、夏樹さん。私達の歌う曲だって、冬の歌なんですし。雪の多い東北で歌うのも、臨場感が出ると思いますよ」

明らかに不満そうな顔をしている夏樹に、咲花がフォローを入れた。柄にもなく臨場感などという難しい言葉を使えたことに、彼女



の方は妙に満足げな表情である。

「ちょっと、何得意気になってるの？ 言っておくけど……これが、地方公演最後の舞台なのは変わりないんだからね。咲花は少し、雪乃の緊張感を分けてもらった方がいいんじゃないかしら？」

「そうですねえ！ きっと、その方がバランスも取れて、コンサートも上手く行くと思いますっ！！！」

夏樹のきつい一言にも、咲花は何ら変わらない表情で笑って答えた。どうやら夏樹の心配していることなど頭にないらしく、いつも通り楽観的に考えているだけのようである。

「はあ……。まあ、ガチガチに緊張しているよりは、普段と同じ気持ちで歌った方が上手く行くこともあるか……」

何を言われても応えない。そんな咲花に向かって溜息をつくとき、夏樹は半ば諦めたような口調でそう言った。

時刻は既に、コンサート開幕まで三十分を切っている。そろそろ持ち場に向かわなければ、現場で待機しているスタッフにも迷惑をかけることになるだろう。

互いに簡単な打ち合わせを終え、三人は控室の外に出た。会場へ続く長い廊下を抜けると、そのまま舞台の裏に出る。ここでは既に音響や照明の人間が準備を進めており、誰も彼もが忙しなく動いているのが見て取れた。

「おや、こんなところにいたのかい、君達」

舞台裏に入ってきた雪乃達の姿を見つけたのだろう。プロデューサーの高槻が、彼女達の前に姿を見せた。

「あつ、高槻プロデューサー！ 鳴海咲花他、T Driveの三名、ただ今到着しましたあ！！」

「ははは……。咲花はいつも元気だな。その調子なら、今日のステージも問題なさそうだな」

「はい！ 咲花はいつも、元気百倍絶好調ですう！！」

「ちょっと、咲花！ あなた、何勝手に独りで仕切ってるのよ！ T Driveのリーダーは、この私のはずでしょう！？」

高槻の姿を見つけるなりはしゃぎ出した咲花を、夏樹がやや強めの口調でたしなめた。

未だ中学生の咲花にとって、プロデューサーの高槻は年の離れた兄のような存在だ。聞くところによれば、咲花はこれでも実家では長女ということらしい。そのため、年上の人間に甘えるという機会に乏しく、高槻の前ではいつもこんな調子になる。

担当プロデューサーと仲良くすることが、別に悪いわけではないが、それでも今は本番前だ。適度な緊張感を持って仕事に挑んでもらわねば、チームの連携を乱しかねない。

こちらの言葉をまるで聞いていない様子の咲花に、夏樹は再び注意を促そうとした。ところが、そんな夏樹を高槻は片手で制し、三人に一度集まるよう言葉をかけた。

「三人とも、とりあえずは落ち着こうか。実は、今日の舞台を裏で応援しているのは、僕だけじゃないんだよ」

「えっ!?!? でも……ステージの裏には、ファンの人は入れませんよね?」

「普通はね。まあ、君達も合えばわかると思うから」

そう言つて、高槻は雪乃達をステージ裏の隅の方へと連れて行く。そこには数人の少女たちが集まつており、その中央にはスーツに身を包んだ恰幅の良い男が立っていた。

「あつ、社長だ!!!」

男の顔を見て、咲花が真つ先に叫んだ。夏樹と雪乃の二人も、その声に目の前にいる男が誰であるか直ぐに理解した。

「やあ、君達。こんな寒い日にまで、地方公演ご苦労さまだね」

男が少女達を掻き分けるようにして前へ出た。頭には白髪が目立つものの、いかにも社長という貫録に包まれている。椅子に座つて葉巻を啜えれば、それなりに様になりそうな男である。

かもがみゆつじ  
鴨上裕司。それが、男の名前だった。雪乃達の所属する芸能事務所、鴨上プロダクションの社長であり、かつては自分も芸能人のプロデューサーに携わっていたことがあるらしい。

業界内において、鴨上プロダクションの名前は決して大きいものではなかった。所属しているアイドル達も、雪乃達を除いて特別名の売れている者はいない。その上、抱えているアイドル達の大半が

未だ候補生ということも相俟って、まともにデビューしている人間の方が少ないのだ。

正直なところ、鴨上プロダクションの売り上げは、雪乃達によって支えられていると言っても過言ではなかった。T Driveの人氣がうなぎ昇りのため、なんとか社員をリストラせずに済んでいるものの、実際の経営は自転車操業からようやく抜け出した程度のところである。

現在のT Driveは、正に会社の広告塔的存在。そんな彼女達を応援するために、社長自ら駆けつけた。大方、そんなところだろう。

「社長……。わざわざ激励に来ていただけたのは嬉しいのですが……会社の方は、大丈夫なのですか？」

夏樹が不安そうに鴨上を見る。暮の忙しい最中、会社に社長がいないのでは仕事に差し障りが出るのではないか。そう思ったのだ。

「いや、これはすまんね、夏樹君。だが、心配は要らないよ。会社の方は残る社員たちでも十分に仕事を回せるし、私も会社をこころで大きくしてくれた君たちに、直々にお礼が言いたくてね。それに君達の活躍を生で見ることができれば、後輩達にも良い刺激になるだろうと思っただけ。今日は、我が社の抱える候補生達も一緒に連れて来たというわけだよ」

「そうだったんですか……。それなら、今日のコンサートは絶対に成功させなければいけませんね」

「おお、気合が入っているね、夏樹君。その調子なら、色々と期待

させてもらっても良さそうだね」

夏樹の心配を他所に、鴨上は至って落ち着いた様子で話していた。そんな社長の姿を見て、夏樹も気分を新たに今日のステージを成功させる決意をする。

「そうそう、ところで……」

夏樹と一通りの話を終えた後、鴨上は次に雪乃へと顔を向けた。

「雪乃君。最近、君の人気はファンたちの間でも評判だそうじゃないか。君のような子を抱えることができ、私も鼻が高いよ」

「えっ……！ わ、私が、ですか……！？」

「他に誰がいると言うのだね？ 雪乃君は気づいていないだけかもしれないが、君が我が社に貢献してくれた事柄は、数え上げればきりがない程なのだよ。今日、私と一緒に来て貰った候補生達の中にも、君に憧れてこの業界に入った者がいるくらいなのだからね」

「そ、そんな……。大袈裟ですよ、社長……」

突然、自分のことを持ち上げられて、雪乃はしばし困惑した表情で言葉を濁した。

T Driveが結成される前から、自分はこの業界の中でも目立たない存在だった。曲もバラードが中心だったし、歌以外には特に取り得があるわけでもない。現に、ソロでデビューさせてもらった際には、まったく言っていないほど売れなかった。

今のT Driveの人気は、いったい誰が作っているのか。リーダーの夏樹がこぞという時にチームをまとめているのもあるだろうし、咲花の底抜けに明るい性格がウケているのも大きいだろう。また、マネージャー兼プロデューサーである高槻が、縁の下の力持ちになって彼女達を支えているのもある。

どちらにせよ、今のT Driveの人気は雪乃自身の力で得たものではない。それをわかっているだけに、雪乃としては社長に誉められたことを嬉しく思う反面、どこか納得のいかない部分もあった。

自分はいったい、このユニットにどれだけ貢献できているのか。夏樹や咲花に、チームメイトとして認められる程の働きができているだろうか。もしくは、高槻の仕事に対して期待以上の成果を上げることができているだろうか。今までの自分の仕事を考えると、とてもそうは思えない。

（はあ……。やっぱり私は、誰かが側にいないと駄目なのかなあ……）

今までの自分を振り返ったことで、雪乃の後ろ向きな一面が顔を出し始めてしまった。本番前に良くないとは思いつつも、一度考え出してしまうと止まらない。

そんな雪乃の様子をいち早く察してか、夏樹が彼女の手を引いて人の群れから離れた。もつとも、その行動は雪乃を心配しているというよりも、むしろ他に意図があったことだったが。

「ねえ、ちょっと……」

候補生達に囲まれている鴨上と高槻を指さして、夏樹はそつと雪乃に耳打ちした。咲花もそれに加わり、三人は顔を寄せ合うような形で話し始めた。

「あの、社長の隣にいる子……。あれ、星梨香じゃない？」

「星梨香って……もしかして、麻宮さん！？」

「ええ、そうよ。昔は髪を染めていたけど、今は真つ黒に戻しているみたいね。私も最初は気づかなかったけど……間違いないわ」

夏樹が小さく、しかし確信めいた口調で雪乃に言った。その言葉に、雪乃も改めて社長の隣にいる少女のことを見る。髪型と髪の色こそ違ったが、そこにいたのは、確かに夏樹の言っている少女、麻宮星梨香に違いなかった。

麻宮星梨香。以前、雪乃や夏樹がソロで活動していた際、一足先に二人組のユニットを組んでデビューしていたアイドルである。年齢は雪乃達よりも一つ上で、事務所にやって来た時期も含め、彼女たちの先輩に当たる。

アイドルとしては、星梨香は十分な素養を持った少女だった。モデルのような体型でありながら、時に激しいダンスを交えた曲を平然とした顔で歌って見せる。性格も至ってクールであり、同年代の少女にはない大人の女性の魅力を持ち合わせていた。

しかし、そんな星梨香であったものの、当時の鴨上プロダクションのお約束に漏れず、まったくと言っていいほど売れなかった。ユニットを組んではいたものの、それでも売り上げは夏樹や雪乃のそれに毛が生えた程度。ヒットチャートの百番以内に辛うじてランク

インすれば良い方であり、決して人気があつたわけではない。

結局、星梨香の組んでいたユニットは、彼女の相方が心身衰弱に陥ったことで解散となった。努力しても一向に報われない自分に嫌気を感じ、心のバランスを崩してしまったと雪乃達は聞いている。

そして、今後の活動の目処が立たなくなった星梨香も候補生にまで逆戻りしてしまい、代わりにデビューを果たしたのが、雪乃達のT Driveというわけだった。

正直なところ、雪乃は星梨香のことが苦手だった。先輩風を吹かせるようなところはなかったが、それでも常に、どこか周りを見下したような態度を取ることが多いような気がしていた。だが、そう感じていたのは雪乃だけではないらしく、夏樹も咲花も星梨香に対して、あまり良い印象を抱いていないようだった。

「それにしても……なんであの人、社長と一緒に私達のコンサートを来に来るんですか……。私、あの人だけは苦手なんですよねえ……」

いつもは明るい咲花でさえ、嫌悪感を露わにして雪乃と夏樹に囁いた。二人はそれに無言で頷くと、再び顔を寄せ合って内緒話を続けてゆく。

「まあ、咲花がそう言うのも無理はないわよね。私もあの子のやり方には、正直言って気に入らないところがあるし……」

「やり方って……。夏樹ちゃん、麻宮さんのことで、何か知っていることがあるの？」

「ええ、少しね。あの子……私達の前に、一時期ユニットを組んで



デビューしていたことがあるじゃない。その時のプロデューサーな  
んだけど……どうやら、未だに彼女と関係を持っているらしいのよ  
ね」

「か、関係って……。それって、もしかして……私達の世界ではタ  
ブーな、アイドルと担当プロデューサーとの……」

「さあ、そこまでは私も知らないわ。ただ、彼女が今も昔のプロデ  
ューサーに指示を貰っているのは本当よ。日々のレッスンをから自主  
トレーニングのメニューまで、ほとんどお世話になりっぱなしって  
話だもの」

言葉の随所に棘を含ませながら、夏樹がちらちらと星梨香の方を  
見て言った。影で人の悪口を言うのは雪乃の趣味ではなかったが、  
今回ばかりは、雪乃も夏樹の言いたいことがわかるような気がして  
いた。

そもそも、アイドルの候補生というものは、個人的にトレーナー  
やインストラクターがつくものではない。各自が事務所側から与え  
られたレッスンを集団でこなし、その上で自主トレーニングを積ん  
で自分を磨いてゆく。そうやって自己研鑽を続けた結果、その実力  
が認められることがあれば、そこで初めてデビューが決定する。

そんな候補生達において、星梨香のやり方は明らかにルール  
違反であった。かつては本物のアイドルとして活動をしていた経験  
があるとはいえ、今はあくまで一候補生のはずである。

それにも関わらず、星梨香は自分の以前の担当プロデューサーと  
関係を持ち続け、果ては様々な特別指導までしてもらっているとい  
う始末だ。はつきり言って、これは完全なルール違反。他の候補生

達と比べても、明らかにフェアな戦いをしているとは言いがたい。

候補生時代の辛い経験は、雪乃とて知らないわけではない。自分もまた無名の存在として、初めはそこからスタートした。運よく自身の歌唱力が認められ、今ではT Driveの一員としてトップアイドルの仲間入りを果たしているが、そこまでの道のりは決して楽なものではなかった。

「それにしても……もし、その話が本当だとしたら、麻宮さんは少しずるいかもしれないね。あの人ほどの実力があれば、すぐに候補生から本物のアイドルに返り咲くことだって出来るのに……」

「その辺は、私にもわからないわよ。たぶん、ゼロからの再スタートじゃなくて、一気にトップまで躍り出る一発逆転のチャンスでも狙っているんじゃない？」

雪乃の素朴な疑問に、夏樹が肩をすくめながら答えた。プライドの高い星梨香のことだ。単なる想像にしか過ぎないが、夏樹の言うことは遠からずも当たっていると雪乃は思う。

「あつ……。ほら、噂をすれば影ってやつよ。星梨香の元プロデューサーのお出ましだわ」

舞台裏にある非常口の扉が開かれたのを見て、夏樹はそこを指差した。

扉の向こうから現れたのは、小奇麗なスーツに身を包んだ細身の男だった。高槻とは違い髪も今風に茶色く染め、お洒落な柄物のネクタイをしている。顔立ちも良く、知らない人が見たらホストクラブの店員と勘違いするかもしれない。

「やあ、高槻。君のプロデュースしているT Drive、ますます絶対調みただね？」

前髪をわざとらしくかき上げながら、男が嫌味な笑いを浮かべて高槻に言った。

「黒部くろべじゃないか！ お前……どうしてこんなところに……」

「こいつは御挨拶だな。俺だって、かつてはそこにいる星梨香と、今は引退してしまった愛梨えりか香君をプロデュースしていたんだからね。後学のために、君がプロデュースしているT Driveのステージを生で見学させてもらいたいと思っても、何ら不思議はないだろう？」

「そうか……。それだったら、別に問題はないんだがな……」

「おやおや……。なんだか、俺がここに来たらいけないって聞いたそうなのぶりだね。でも、生憎だけど、今日は社長に同行するよう命じられてここまで来たんだ。君がどうこう言ったところで、俺は帰るつもりはないよ」

「好きにしてくれ。こっちだって、別にお前を追い出そうなんて思っっちゃいないさ……」

互いに視線を合わせたまま、微動だにしない高槻と黒部。険しい表情を崩さずに相手を睨みつける高槻に対し、あくまで不敵な笑みを浮かべたまま余裕の態度を取り続ける黒部。正に一触即発といった感じであり、舞台裏に何とも嫌な空気が流れ始めた。

「うわあ……。なんだか、とっても険悪ムードみたいですよ……」

自分の口元を大袈裟に押さえ、咲花がおずおすと下がりながら言った。今まで高槻の優しい顔しか見たことがなかったため、目の前にいる高槻の顔に浮かんだ表情に少々驚いている。

「まあ、咲花がそう言うのも無理ないわね。高槻さんと、あの黒部っていう人……。昔から、どこか折り合いが悪かったらしいから」

「折り合いが悪い？ それって……。超仲が悪いってことですかあ、夏樹さん」

「そういうこと。現に今だって、高槻さんは黒部プロデューサーのやり方に疑問を持っているみたいだもの。さつき、雪乃が指摘した、反則じみた星梨香への関わり方なんかを含めてね」

「へえ……。でも、だったら、どうして社長は黒部プロデューサーに注意をしないんですかあ？」

「それも仕方ないことじゃないかしら。私達が頑張ってはいるけど、それでもうちの事務所、まだまだ小さいですよ。社員も少ないし、黒部プロデューサーも過去にそれなりの実績を持っている。そうそう簡単に解雇もできないでしょうし、多少のことは黙認しているんじゃない？」

「うぐぐ……。なんだか、とっても納得行かないですよ……」

咲花が顔の前で拳を握り締めて唸った。まだ中学生の咲花にとっては、大人の事情というものは少々理解し難い部分もある。

「こうなったら……高槻プロデューサーのためにも、私がああ黒部プロデューサーと麻宮さんのスキヤンダルを暴いてやりますう！」

「スキヤンダルを暴くって……。それはちょっと、やり過ぎだと思  
うよ、咲花ちゃん……」

「そんなことありませんよ、雪乃さん！ 星梨香さんが黒部プロデ  
ューサーを独り占めして、他の候補生達に対してズルをしているん  
だったら……その不正を暴くのが正義ってやつですう！！」

「でも……そんなことして、私達のプロデューサーが喜ぶとは思え  
ないわよ。咲花ちゃんの言いたいこともわかるけど、私達は私達で、  
プロデューサーの気持ちに応える方法があるんじゃないかな……」

顔を膨らませて憤慨している咲花のことを、雪乃は優しい口調で  
制した。これにはリーダーの夏樹も頷き、咲花の頭を軽く小突いて  
忠告する。

「雪乃の言う通りよ、咲花。星梨香が何をしようとして、ああ黒部  
って人がどんな人であろうと、私達には私達のやり方があるでしょ  
う？ 変な小細工なんかしないで、正々堂々と自分の実力で勝負す  
る。それが、T Driveのやり方よ」

「そ、そうでした……。ううう……。私、つい頭に血が昇って、と  
んでもないことを……」

「わかればいいのよ、わかれば。それじゃあ、そろそろステージが  
始まるわ。向こうでスタッフの人達が呼んでるみたいだし、私達も  
早く行った方が良さそうね」

「はい！ 夏樹さんも、雪乃さんも……今日は今年の中でも最高のステージにしましょうね！！」

「そうね。ここまで私達を応援してくれた人達のためにも、自分の実力を出し切らないといけないわね」

咲花の言葉に、雪乃も気を取り直して舞台へ上がる時のそれへと表情を切り替える。

あの、麻宮星梨香や黒部というプロデューサーのことは、今は関係ない。夏樹の言う通り、自分達は自分達のやり方で、高槻や応援してくれるファンの声援に応えるべきだ。例え今の自分に自信が持てないことがあっても、その気持ちだけは変わらない。

スタッフの者から指示を受け、ついに地方公演最後の舞台が幕を開けようとしていた。程良い緊張感に包まれながら、雪乃は深く息を吸い込んで精神を統一する。

自分はやれる。夏樹や咲花には及ばないかもしれないが、それでも今の自分に出来る精一杯の力を出し切れば、きっとファンの人にも喜んでもらえるはずだ。

先ほど、舞台裏にいた際に抱いていた後ろ向きな気持ちは、既に雪乃の中から消え去っていた。

今日は無心で精一杯歌おう。今までの自分の全てをぶつけるつもりで、何としてもこの地方公演を優秀の美で飾ろう。

そう思って舞台上に立った雪乃であったが、彼女は自分の影の中で不気味な何かが蠢いていることに、この時はまだ気がついていなか

った。

雪乃達が舞台上になると、そこは既に歓声の渦に包まれていた。会場は隅々まで人で埋め尽くされ、観客の熱気で溢れ返っている。

リーダーの夏樹が簡単な挨拶を済ませ、いよいよコンサートが始まった。バックバンドの音楽に合わせ、三人はそれぞれが自分の持ち場について歌い始める。夏樹を中心に、右を雪乃、左を咲花が固める形で一曲目の歌に入った。

熱いスポットライトの下、少女たちの身体が華麗に舞う。一曲目からアップテンポの曲ではあったが、彼女達は何ら苦にせず歌い、踊っていた。

曲のサビの部分を読み終えると、その後は雪乃と咲花がそれぞれソロで歌うパートに差し掛かった。センターの夏樹と場所を入れ替えて、それぞれが十分に自分の存在を観客にアピールする仕草を見せる。普段は控え目な雪乃も、この時ばかりは笑顔で観客に目配せることを忘れない。

「いいぞおおおおっ！ 雪乃おおおおっ！！！」

熱狂的なファンの一人だろうか。観客席から一際大きな声で、雪乃の名前を叫ぶ者がいた。夏樹や咲花にも声援はあったが、今日の雪乃は自分に対する声援が最も大きいような気がしていた。

(うわあ、随分と元気な人がいるんだなあ……。私も頑張らないと……)

自分のパートを歌い終え、雪乃は再び夏樹と場所を入れ替える。その際に、彼女は舞台裏で社長から言われた、ある一言を思い出した。

最近、君の人気はファンたちの間でも評判だそうじゃないか。

あの時は、社長が自分を持ち上げているだけだと思っていた。しかし、舞台の上で観客から寄せられる歓声に包まれていると、社長の言っていたことも満更ではないと思えて来る。

自分には、他のメンバーと比べても特別な何かがあるわけではない。だが、そんな自分のことを一生懸命応援してくれる人がいるならば、やはりそれに応えたいというのが人間である。

夏樹や咲花と一緒に歌いながら、雪乃は自分の中に今まで以上の力が湧いてくるのを感じていた。この調子なら、今日のステージは今までの中でも最高のものにできるのではないか。そう考えると、今まで抱いていた不安が嘘のように消し飛んで行った。

大歓声の中、夏樹が最後に中央でポーズを決めて一曲目が終了した。最初から激しいテンポの曲だったので、早くも息が上がっている。が、それでも直ぐに呼吸を落ち着けると、三人は次の曲を歌うための配置に着いた。



コンサートはまだまだ始まったばかり。自分達に休むことなど許されない。今までやってきたことの全てを出し切るような気持ちで、雪乃は手にしたマイクを力強く握り締める。

それから先は、彼女たちのステージは実に激しい盛り上がりを見せた。曲が進むに連れて会場の雰囲気もますます盛り上がり、最後は観客全員が会場の入口で配布されていたペンライトを振って応援した。

歌手と観客が一体になるこの瞬間。それは何物にも代え難い高揚感を雪乃達に与えてくれる。辛く、厳しいこともある業界だが、この一瞬があるから頑張れるのだと改めて実感させられる瞬間である。

いくつかの曲を歌い終えた後、雪乃達のいるステージは一時的に暗闇に包まれた。曲目は既に最後の一つを残すのみとなっていたが、それを歌うためにはステージのセットを入れ替える必要がある。

今まで舞台の上にあった装置が後ろに下げられて、代わりに別の装置が雪乃達の後ろに現れた。時間としては数分とかからない程度のものであったが、異変はその時に訪れた。

ガサ……。

突然、暗闇の中で何かの動く音がした。それは小さく、ともすれば聞き逃してしまいそうな音だったが、雪乃の耳にはしっかりと聞こえていた。

ガサ……。

また、音がした。今度は先ほどよりも大きく、さらにはっきりと聞こえていた。

自分の耳に響いた奇妙な音。不思議に思って辺りを見回してみるのが、特に何かがあるわけでもない。薄暗がりの中で良く見えないが、夏樹も咲花も普通に持ち場に着いている。どうやら彼女達に、先ほどの音は聞こえていないようだった。

（気のせいだったのかな……？ それにしては、随分とはっきり聞こえたけど……）

そう、雪乃が思ったときだった。

ガサガサガサガサ……！！

突然、先ほどの音が洪水のように雪乃の耳に溢れて来た。それと同時に、彼女の着ている舞台衣装の隙間から、無数の異形なる者達が這い出して来た。

「ひっ……！！」

あまりの出来事に、思わず持っていたマイクを取り落として叫ぶ雪乃。ゴトツ、という鈍い音がして、それに気づいた夏樹と咲花も雪乃の方を見た。

待機中とはいえ、それでも舞台の上でマイクを落としたら直ぐにでも拾わねばならない。いつもであれば当たり前のようにそう思えたが、今の雪乃には無理だった。

服の袖、首元、そしてスカートの中からも、異形は次々と湧いて来る。赤黒い身体に緑色の斑点を持ち、醜く膨らんだ腹と毒々しい針のある尻尾を持っている。この地方公演の途中でも夢に見た、あの薄気味の悪い毒虫達だった。

「あ……あ……」

マイクを落としたことなど完全に忘れ、雪乃は恐怖に歪んだ顔で後ずさった。その間にも、毒虫は雪乃の身体を這い回り、最後は全身を覆うようにして身体一面に広がった。

「い、いやあああつー!!」

目の前で起きている異変に耐えきれず、とうとう雪乃は悲鳴を上げてその場に座り込んだ。明らかに様子がおかしいことに気がついたのか、夏樹と咲花の二人が慌てて雪乃に駆け寄った。

「ゆ、雪乃さん！ いったい、どうしたんですか!？」

「い、いや……。やめて……」

「どうしたのよ、雪乃！ 今はコンサートの途中でしょ!？」

咲花と夏樹がそれぞれに声をかけて雪乃の肩をゆすったが、無駄だった。

雪乃は頭を抱えたまま、身体を丸めて小刻みに震えているだけだ。その目は完全に正気を失い、恐怖に怯えてひきつった顔をしている。他のスタッフもやってきて声をかけたが、やはり反応はない。ただ、「虫が……虫が……」と呟くだけで、他のことなどまるで頭になくようだった。

舞台の上での騒ぎが起きたことで、観客達の間にも動揺が走った。客席のざわつきは次第に大きくなり、やがてそれはブーイングの混ざったものに代わってゆく。

結局、その日のコンサートは、雪乃が途中で退場する形で幕を終えてしまった。観客には突然の体調不良と説明し、フィナーレの曲は夏樹と咲花の二人だけで歌った。最後には観客席からのブーイングも収まっていたが、それでもどこか納得が行かないのか、実に盛り上がり欠ける終わり方となってしまった。

T Driveのコンサートが終わった時、既に太陽は西の空へと姿を消していた。

駅前の通りでは、行き先々で華やかなイルミネーションが輝いているのが見受けられる。今日がクリスマスであることも相俟って、通りを行き交う人々の表情もどこか楽しげだ。

コンサート会場からの帰り道、九条照瑠はそれらの光景を横目に、今日の会場であったことを思い出していた。

亜衣に誘われて半ば強引に行くことになったT Driveの地方公演コンサート。アイドルなどにそこまで興味はなかったが、いざ来てみれば、それなりに楽しめたのではないかと思う。自分と同年代の少女でありながら、あのような大舞台で歌い、踊ることができることに対し、少しだけ憧れのようなものも抱いてしまった。

だが、その一方で、照瑠はコンサートの終わりに起こったハプニングも気になった。

終盤、舞台が暗転したと同時に、T Driveのメンバーの一人が突然正気を失った。今までは何事もなく歌っていたにも関わらず、まるで何かに怯えるようにして、そのまま舞台を去ってしまった。

いったい、あれは何だったのか。会場側からは突然の体調不良という説明があったものの、どうにも納得できていない自分がいる。本番中、それこそ、今までもっと大きな舞台でのライブでさえ成功

させてきたアイドルが、いきなりマイクを放り出して泣き叫ぶなどということがあるのだろうか。

「ねえ、刑事さん。今日のコンサートなんですけど……最後のあれ、どう思います?」

駅までの道を歩きながら、照瑠は隣にいた工藤に聞いた。

「えっ……!? ああ、あれか……。正直、僕にもわからないな。ただ、最後にいなくなった彼女……雪乃ちゃんだっけ? あの子に、何かあったことは間違いないと思うけど……」

「そうですね。舞台の上で、いきなりあんな悲鳴を上げるなんて……普通じゃ考えられないです」

「まあね。でも、それが何なのかは、さすがに何とも言えないよ。アイドルにだって、マネージャーとかプロデューサーなんてのがついてるんだろう? 彼女たちのことは業界の担当者しかわからないんだし、僕達みたいな一般人があれこれと考えても無意味だと思うよ」

「そうですね……。まあ、私もちょっと気になっただけです。刑事さんも自分のお仕事があるでしょうし、あまり無理しないでくださいね」

「ああ、そうだね。実際、年末は警察も色々と忙しいから。僕なんて、定時に帰れるからまだマシだけど……交番勤務の人は、年末年始のパトロールで夜も眠れないなんてことがあるみたいだから、正直同情するよ」

「夜も眠れないって……それ、夜勤ってことですか？」

照瑠は何気なく聞いたつもりだったが、工藤はどこか遠くを見るような顔をしてその問いに答えた。過去、交番勤務の経験もあるノンキャリアの刑事だけに、彼もまた巡査時代の辛い経験がそれなりにあるのだ。

「そうだよ。僕も交番勤務時代に経験はあるけど、この時期は正に地獄だったね。忘年会が多いから性質の悪い酔っ払いの数も増え、それに伴って事件や事故も増える。大晦日や正月には交通整理も重要な仕事になるし、冬場は放火犯が増えるから、そっちにも気を配らなきゃならない。今年は運よくクリスマスに休みを貰えたけど……普通だったなら『メリー苦しみます』ってのが、この時期の警察官の状況さ」

「うわぁ……。交番にいるお巡りさんって、そんなに大変だったんですね……」

工藤が言ったのはベタな親父ギャグとも取れる寒い冗談だったが、照瑠は茶化すこともせず感心していた。

警察の仕事など、今まで照瑠は意識したことさえもなかった。が、街の安全と平和を守っているのは、やはり末端で働いている交番勤務のお巡りさん達である。警察の不祥事がニュースで報道される度に彼らまで白い目で見られることもあるようだが、それでも彼らの力で庶民の平穏な暮らしが守られていることもまた事実なのだ。

自分と同じ年でありながら、大舞台上で自分の歌を披露するトップアイドル達。そして、庶民の生活を守るため、日夜働き続けている警察官。それらの仕事に従事している人に比べたら、自分は何と甘

い生活を送ってきたのだろうと思う。

照瑠自身、今は自分の中に秘められた力を解放するために、真冬の泉で楔を行う修業に励んでいる。傍から見ればそれとてかなりの苦行に思われるかもしれないが、照瑠自身、まだまだ自分の考えに甘さが残っていたことを反省させられた。

大変なのは、自分だけではない。とりあえずはそれがわかっただけでも少し前進したような気がする。

(さて、と……。クリスマスも終わったし、後は大晦日にお正月だけよね。年末年始はうちも忙しくなるから、それまでに少しでも修業の成果を出せるようにしておかないと……)

明日からは、またいつもの日常がやって来る。学校は既に終わっていたが、自分の修業はまだまだ続く。大晦日や正月には参拝客の相手をするために動けなくなることを考えると、ここで少しでも次に繋がる結果を出しておきたい。

今後のことを色々と考えながら、照瑠はふと隣にいる亜衣のことを見た。先ほどから、彼女は何やら自分の携帯電話と格闘し続けている。その目は完全に携帯の画面に釘付けになっているため、ともしれば行き交う人にぶつかりそうになる。亜衣は未だに小学生くらいの身長しかないため、人にぶつかって弾き飛ばされないかと、見ている方が心配になってくる。

「ちょっと、亜衣。あなた、さつきから携帯電話に夢中みたいだけど……。いったい、何やってるの?」

「そんなの決まってるじゃん。今日のコンサートで、ゆつきーが調



子悪かったみたいだからさ。ちょっと心配になったんで、電話してるところだよ」

「ゆっきーって……確か、あなたが幼馴染って言っていた、長谷川雪乃って子よね？」

「そっだよ。でも、さっきから何度も電話してるのに、全然出てくれないんだよね」

「何度も電話って……現役のトップアイドルが、そうそう簡単に一般人の電話に出るわけじゃないでしょう？それに、あの子は途中で体調不良になって舞台を去ったじゃない。今頃は、きっと楽屋の裏か控室で休んでいるんじゃないかしら」

「そっかあ……。まあ、そう言われてみれば、確かに照瑠の言う通りかもね。しょうがないから、メールだけ送って返事を待つことにするよ」

電話で連絡することを諦めたのか、亜衣は手慣れた様子でメールを打ち始めた。

都市伝説マニアで有名な変人女子高生が現役アイドルと知り合いなど、照瑠は未だに信じられない。が、どうやら亜衣の行動を見る限りでは、まったくの嘘でもなさそうである。

もっとも、組合せとしては、ある意味でスキャンダル同然の交友関係であると言えなくもない。T Driveについては照瑠もそこまで詳しくないが、少なくとも舞台上で歌っていた際の雪乃と照瑠の知っている亜衣では完全に異なった人種としか思えないからだ。

「いったい、この一風変わった友人の人脈とは、どの辺りまで伸びているものなのだろうか。今までは少し変わった人間を紹介されるくらいだったが、ここまで来ると、次は宇宙人を紹介されても驚くに値しないのではないかとさえ思えてくる。」

（まあ、本当に宇宙人を紹介されたら、私だって少しは驚くけどねでも……亜衣だったら、宇宙人でも簡単に友達になれそうだから、その辺がどうも不思議なのよね……）

グレイタイプの宇宙人と、互いに仲良く食卓を囲んでいる嶋本亜衣。そんな光景を頭の中に思い浮かべながら、照瑠は最後に亜衣の隣を歩く紅の方へと目をやった。

そう言えば、コンサートが終わってから、紅は一言も口を開いていない。普段から無愛想な人間だとは思っていたが、今の紅はそれに輪をかけて険しい表情をしている。街に溢れるクリスマスモードなどお構いなしに、それこそ何か邪悪な敵を睨みつけるようにして、ずっと黙りこくったまま淡々と歩いている。

「ねえ、犬崎君……」

「いったい、紅に何があったのか。あまりに場違いな空気に少しだけ引け目を感じながらも、照瑠は恐る恐る尋ねてみた。」

「なんだ、九条。俺に何か用か？」

「いや……別に、用って程のことじゃないんだけど……。さっきから黙りっぱなしだから、どうしたのかなって思っ……」

「そんなことか。なら、気にするな。少し、考え事をしていただけ」

だ  
」

「考え事？ それって、今日のコンサートについての話？」

「まあ、そんなところだな。それでも、少し気になったただけの話だ。お前まで気にすることじゃない……」

そう言って、紅は再び口を閉ざし、照瑠の方から目をそらした。照瑠はその後も食い下がろうとしたものの、紅はまったく相手にせず、完全に黙り込んでしまった。

いったい、紅は何を考えているのだろう。彼が何かを考えているということは、やはり向こう側の世界に関係する話なのだろうか。だとすれば、それはいったいどんな話で、彼に何の関係があるのだろうか。

いつもであれば、照瑠も紅の言葉を適当に聞き流していたことだろう。だが、今回はかりはコンサート会場で妙な物を見せられただけに、彼の言葉が気になった。加えて、今まで彼女の周りで起きていた様々な心霊事件に関する記憶が蘇り、照瑠に妙な警戒心のようなものを抱かせてもいた。

できることならば、紅の考えを聞いてみたい。その上で、自分に協力できることがあれば、力を貸したい。未だ修業中の身ではあるものの、それでもまったく役に立たないということはないはずだ。

コンサート会場で起きた、長谷川雪乃の突然の退場事件。果たしてあれは、心霊現象の絡んだ事件なのだろうか。

気になることは山ほどあったが、照瑠はそれ以上、何も紅に聞く

ことはできなかった。彼の全身から放たれている殺気にも似た空気に気圧されたこともあったし、何を言っても答えてはくれないだろうという諦めのような気持ちもあった。ああ見えて、紅は意外と頑固な一面も持っていることを照瑠は知っている。

結局、その日はそのまま全員で電車に乗って、火乃澤町に帰ることとなった。帰り道、紅は相変わらず無言のまま、それは照瑠や亜衣と火乃澤駅で別れるまで続いていた。

「ちょっと！ 今日のステージの最後、あれはいつたい、どういうつもりなの！？」

地方公演を終えたT・Driveの控室に響いたのは、怒りのもった激しい叱責の声だった。

声の主は、チームのリーダーである夏樹だ。その日の公演が終わって控室に戻るなり、彼女は開口一番に雪乃を叱り飛ばした。

「まったく……。今日が地方公演最後のステージだつて言うのに、ここ一番って時に退場だなんて……。舞台上上がる前、皆で頑張ろうって言ったのは嘘だったわけ！？」

「い、ごめんなさい……。私……。なんだか、急に変なものが見えて……」

「言い訳は聞きたくないわよ！ 私と咲花でなんとかファイナーレマ

で持たせたからいいもの……これが、もつと大きな会場で開かれているライブだったらどうするつもりなの！？ それこそ、全国ネットで中継されるような番組の本番だったら……」

コンサートの途中で雪乃が退場してしまったこと。それに対し、夏樹の怒りは鎮まるところを見せなかった。その、あまりの剣幕に、雪乃はただひたすら頭を下げて謝るしかない。いつもは持ち前の明るさで場を和ませることのできる咲花も、完全に言葉を失ってしまった。

「だいたいねえ……」

目の前で頂垂れる雪乃に近づいて、夏樹は彼女を見降ろすようにして言った。

「あなた、本当にプロとしての意識があるの！？ 高槻プロデューサーは、あなたのことを考えて、地方公演の最後をあなたの地元でやるようにしたみたいだけど……それに甘えて、気が抜けてたんじゃないの!？」

「そんな……。私は別に、気を抜いてなんか……」

「だったら、今日のあれはどう説明するつもりなのよ！ 武道館だろうと、ドームだろうと……今までにも、もつと凄い場所で歌って来たじゃない！ それなのに、こんな小さな地方のステージで取り乱して退場だなんて……自分の仕事に対するプロ意識が欠けている以外の、何だっけ言うのよ!！」

プロ意識。ことさらその部分を強調し、夏樹は雪乃を責め立てた。

元より役者として芸能界に従事していた母親を持ち、自身も幼い頃からその世界を垣間見て来た夏樹である。彼女からすれば今日の雪乃の行動は、まさにスタツフや多くのファン、そして仲間達に対する裏切り行為に他ならない。

一通り言いたいことを言い終えたのか、夏樹は大きな溜息をついて雪乃から目を逸らした。軽蔑とまではいかないが、それでもどこか残念そうな瞳をしていることは確かだ。

「あの……。臯月さんも、その辺で止めにしましょうよ……。私達、これからも一緒に歌う仲間なんですし……。」

夏樹がその感情を全て吐き出したと思っただけか、咲花がようやく口を開いた。彼女としては、仲間同士でこれ以上争うような場面を見たくない。そんな思いからの行動だったのだろうが、それは返って夏樹の機嫌を損ねることにしかならなかった。

「咲花……。あなたも雪乃と同じで、この仕事を遊び半分と考えてるってわけ？」

「あ、遊び半分だなんて……。夏樹さん、酷いですう……。」

「それじゃあ、あなたは私の言っていることが間違っているとも言うの？ 雪乃が舞台から退場して、ファンからのブライイングに晒されながら二人だけで歌って……。それで、本当に満足なわけ？」

「そ、それは……。」

「この際、あなたにも言っておくけどね、咲花。ここは、あなたの通っている中学校の仲良しクラブとは違うのよ。大人に混ざって敵

しい社会の目に晒されて……そんな中でやって行くには、慣れ合いなんて厳禁なんだから!!」

「ううう……慣れ合いだなんてえ……。私はただ、二人に仲良くしてもらいたいだけで……」

「その考えが、甘っちょろいって言ってるのよ! 仲間だからこそ、時に厳しく接しなくちゃいけないときだってあるでしょ!? 自身自身を高めることを忘れたら、そこで全てはお終いよ!!」

苛立ちをまったく隠すことなく、夏樹は言葉を終えると同時に扉を乱暴に開けた。そして、そのまま自分の荷物を持つと、何も言わずに控室の外へと出て行った。

気まずい沈黙が、部屋の中を支配する。共に夏樹から叱責を受けた者でありながら、雪乃も咲花も互いに何を言っただよいかかわからず押し黙ったままだ。

「あの……雪乃さん……?」

その場を包む重苦しい空気に耐えられなくなったのだろう。早々に咲花が立ち上がり、遠慮がちな様子で雪乃に声をかける。

「今日のこと、あんまり気にしちゃ駄目ですよ。夏樹さんだって、悪気があって言ったわけじゃないと思いますし……」

「うん……。ありがとう、咲花ちゃん」

「それじゃあ、私もそろそろ行きます。雪乃さんも、バスの時間に

は遅れないようにしてくださいね」

そう言うと、頭を軽く下げて一礼し、咲花も雪乃の前から姿を消した。後に残された雪乃はしばし呆然としながらも、自分以外には誰もいなくなった部屋の天井を眺めて考えた。

今日の舞台で現れた、あの毒虫達。あれは、いったい何だったのだろう。今までも、あの毒虫に夢の中で襲われることはあったものの、現実にあれが自分の前に現れたのは初めてだ。

夢であれば、目を覚ましてしまえば恐怖から逃げる事ができた。しかし、それが現実となった場合、雪乃に逃げ場は存在しない。いつ、またあの毒虫達が目の前に現れるかと思うと、それだけで恐ろしくて仕方がない。

自分はもう、舞台上に立つことなどできないかもしれない。次にあんな失態を踏んで仲間迷惑をかけてしまえば、今度こそ夏樹も許してはくれないだろう。そればかりか、下手をすれば T D r i v e そのものが解散に追い込まれる可能性もある。

自分が今まで仲間と共に築きあげてきたもの。それを一瞬で失いそうな気がして、雪乃はひたすらに怯えていた。

これから先、自分は本当に芸能界で仕事をやって行けるのか。今までのように、誰かに自分の歌を聞いてもらうことができるのか。

ただでさえ大きくはなかった自信が、ますます音を立てて萎んでゆくような気がしてならなかった。夏樹の言っていたことも事実なだけに、反論するだけの言葉も見つからない。



ふと、手元を見ると、自分の携帯電話のランプが光っていた。マナーモードにしていたために音は出ていないが、どうやらメールか何かの着信があったようだ。

面倒臭いと思いつつも、雪乃はそつと携帯電話を開いて画面を見る。そこには数件の不在着信の通知に加え、一件のメールが届いているという知らせもあった。

こんな時に、いったい誰からメールだろう。そう思って相手を確認めると、それは雪乃も良く知る友人の一人からだった。

(これ……亜衣ちゃんからだ……)

嶋本亜衣。中学校時代、雪乃がまだ地方でご当地アイドルをしていた頃の友人である。妙な話に詳しく変わり者のレッテルを張られていたが、根は決して悪い人間ではない。

そう言えば、亜衣は雪乃に今回のコンサートのチケットを送ってくれるように頼んでいた。ということは、今日のコンサートは亜衣も見えていたということだ。友人の前で大失態を演じてしまったことを考えると、それだけですます気が滅入ってきてしまう。

だが、そうそう落ち込んでもらえないということは、雪乃自身にもわかっていた。恐らく亜衣は、今日の雪乃の様子を見て、心配して連絡を取ろうとしてくれたのだろう。ならば、メールに返信くらいしておかねば、さすがに失礼というものだ。

メールの中身を確認すると、そこにはやはり、雪乃のことを心配するような内容があった。その文面に目を通して行く内に、雪乃の中に亜衣との思い出が蘇って来る。

雪乃が小学校の頃から、亜衣は彼女と友達だった。変わった性格は既にその頃から片鱗を見せており、女子であるにも関わらず、亜衣は大人も震え上がるような怖い話が大好きだった。

雪乃は怪談話の類は苦手だったものの、それでも怖い物見たさという気持ちから、気がつけば彼女の話に耳を傾けていたことを覚えていた。

（中学を卒業してから、亜衣ちゃんとはずっと会ってない……。私と違って、いつも元気で悩みなんかなさそう……。それから、お化けの話に妙に詳しくて……）

そこまで思い出したとき、携帯電話をいじる雪乃の手がぴたりと止まった。

そうだ。今日、自分の身に起きた件について、嶋本亜衣ならば何かわかるのではないだろうか。何しろ、古今東西の奇妙な怪談話の類について、大人顔負けの知識を持っている亜衣のことである。あの毒虫達の正体も、亜衣だったら知っているかもしれない。

馬鹿馬鹿しい考えであるということは、雪乃も十分に承知していた。どれほど怪談話を聞かされようと、雪乃自身はお化けや幽霊といった類の話を中心に信じているわけではない。

だが、今日の一件については、雪乃は亜衣の他に相談できる相手が思いつかなかった。夏樹はそういった類の話は信じない方だし、プロデューサーの高槻もそれは同様だろう。咲花に至っては、話をしてしても無意味に怖がらせるだけで終わってしまう。

今の自分の身に起きていることが、果たして怪奇現象の類なのか。それは雪乃にもわからなかったが、他に頼れる者がいないという現実が、彼女に選択肢を与えていなかった。

亜衣からもらったメールに、雪乃は「明日、会って欲しい」という内容だけを打ち込んで返信した。

地方公演は今日で終わり、雪乃は今夜、久方ぶりに実家に戻れることになっている。その間、夏樹や咲花は県内にあるホテルに高槻と共に引き続き泊まってもらい、東京に帰る際に合流する手はずになっている。

プロデューサーの計らいで得ることができた、貴重な帰省の時間。僅かな時間ではあったものの、そこで久しぶりに旧友と顔を合わせられることに、雪乃は全てを委ねることに決めていた。

その日は珍しく、朝から粉のような雪が街に舞い降りていた。

市内のホテルに泊まっていた高槻護は、足元を襲う冷気に思わず目を覚ました。ベッドから飛び起きて足を出すと、鋭く刺すような冷たい空気が彼の指先を襲う。

骨の芯を伝わって響いてくる寒さに、高槻は胸元を両腕で覆うようにして震え上がった。東北は豪雪地帯で有名だと聞いていたが、実際に訪れるのは高槻も初めてである。身体を冷やさないとしようにして寝たものの、就寝の際の防寒対策が少し甘かったらしい。

ホテルの窓が二重窓になっているとはいえ、寒さを完全に防げるわけではない。こんなことなら、一晚中暖房をつけて寝ればよかったか。そんなことを考えながら窓の外に目をやると、小さな粉雪の粒が、パラパラと窓ガラスにぶつかっては水滴になっていた。

N県に降る雪は、湿って重いばたん雪であることが一般的である。日本海の湿気を大量に含んだ寒気が越後山脈にぶつかることで、人の背丈など軽く越える程にまで雪を積もらせるのだ。

東北と言えば大雪。そんなイメージを抱いていた高槻にとって、今日の粉雪は少し珍しく感じられた。だが、寒さの原因が雪であることは変わらないため、あまり嬉しいものではなかったが。

枕元に置いてあった時計に目をやると、時刻はまだ朝の五時であった。夏樹や雪乃達の起床時間に合わせ、ここ最近はずっとこのくらしいの時間に起きることが当たり前となっていた。今日はそこまで仕事もないのに、完全に生活リズムが固定化されてしまっていたらしい。

二十代も後半とはいえ、それでもまだまだ働き盛りの若者が朝の五時に目を覚ます。なんだか早くも生活習慣が老人のようになっていくことに、高槻は少しだけ哀愁のようなものを感じてしまった。

「やれやれ……。コンサートは終わったって言うのに、どうも僕だけ緊張が抜けないみたいだな……。」

昨日のことを思い出し、高槻の顔に憂鬱な色が浮かんだ。今までは何の問題もなく事が運んでいたにも関わらず、最後の最後で雪乃がまさかの退場である。それも、社長や事務所から直々に連れて来

られたアイドル候補生達の前で、痛恨の失態をしてしまったのだ。

社長から御咎めがなかったのは、高槻にとっては幸いだった。過酷なスケジュールで雪乃も限界だったのだろうと言われ、それ以上は特に注意をされることもなかった。

もともと、高槻自身、既にやってしまった失敗を取り消すことができないのは知っている。あそこまで無様な結果にってしまったからには、どこかで雪乃に汚名返上の機会を与えてやらねばならない。このまま放っておけば、それこそ身内からの信頼　即ち、彼の所属する事務所のアイドル候補生達からの信頼　さえも失ってしまうかもしれない。

悶々とした気持ちのまま、高槻は服を着替えて部屋の外に出た。ホテルの廊下はまだ薄暗く、人の影も見当たらない。

一階に通じるエレベーターを使って、高槻はホテルのロビーへと出た。当然のことながら、ここにも誰もいない。

自動販売機に硬貨を入れ、高槻はブラックの缶コーヒーを選んでボタンを押した。取り出し口の中に落ちてきた黒い缶の中身を口にすると、苦味と酸味のせいで少しだけ頭がはつきりとした気がした。

ロビーのソファに腰掛けたまま、高槻は東京に戻ってからのことを考えた。

今年の仕事は、この地方公演だけで終わりではない。雪乃には束の間の家族との時間を与えたものの、新年は東京で迎えてもらうことになるだろう。年越しのカウントダウンイベントで生放送に出演する予定もあり、あまり休んでいる暇もないのだ。

高槻から見ても、雪乃は決して芸能界に向いているような性格ではない。表と裏の顔を使い分け、厳しい社会の荒波を乗り越えて行く、海千山千のタレント達とは訳が違う。トップアイドルの仲間入りを果たしているとはいえ、それでも彼女は未だ十六歳の少女なのだ。

昨日の失敗は、自分にも原因があるのではないか。そんな考えが高槻の頭をよぎった。

T・Driveが結成されたときから、自分は雪乃達のプロデューサー兼マネージャーとして多忙な日々を過ごしてきた。特にここ最近、彼女たちと顔を合わせれば打ち合わせしかしていなかったような気がする。

心のケアが欠けていた。目の前の仕事に夢中になり過ぎて、人として大切な物を忘れていた。そう、高槻が考えたときだった。

「やあ、高槻じゃないか。君も起きていたのかい？」

突然、後ろから名前を呼ばれ、高槻はソファから立ち上がって振り向いた。

「黒部……。何の用だ、こんな時間に……」

そこにいたのは黒部だった。社長の鴨上と共に、アイドル候補生と一緒にあって昨日のコンサートを見に来た男だ。

正直なところ、高槻は黒部のことが好きではなかった。根拠のない自信に溢れ、常に周囲を見下したような態度を取る。自分とはま

るで正反対の性格だけに、どうにも仲良くできそうな相手ではない。

ところが、そんな高槻の気持ちなどお構いなしに、黒部は例の慥  
懃な笑みを浮かべながら近づいてきた。その手には一台のノートパ  
ソコンが抱えられており、黒部はソファアに腰掛けてそれを開く。

「調度いいところで会ったな。ちょっと、君に見せたいものがある  
てさ」

「見せたいもの？　こんな朝早くから、いつたいなんでまた……」

「まあ、そう慌てるなよ。それより……昨日、社長と一緒に来てい  
た星梨香なんだが、来年に再デビューが決まったんだ」

「星梨香君が？　それはまた、随分と急な話だな……」

パソコンの画面が立ち上がるのを待ちながら、二人は互いに顔を  
突き合わせて話をする。高槻としては黒部の話などに興味はなかつ  
たが、ここまで聞いてしまっただけは、最後まで聞かないわけにも行か  
なくなっていた。

「星梨香はもともと、君のT・Driveよりも早く芸能活動をし  
ていたからね。その時は売れなかったみたいだが、それでも彼女に  
は才能があつたのさ。今度のデビューは、なんとソロで話が出る」

「そいつは願ってもない幸運だな、黒部。当然、そのプロデュース  
はお前がやるんだろう？」

「さすがに勘がいいな。無名のアイドル三人を、一年と経たずにト  
ップの座へ昇らせただけのことはあるよ」

「お世辞はよせ。そっちだって、そんなことを言うために、わざわざ目の前に現れたわけじゃないだろう？」

口では相手を誉める素振りを見せながら、心の底ではあざ笑っている。そんな黒部の態度に、高槻もだんだんと苛立ちが増してきた。

いったい、黒部は何のために、わざわざパソコンまで開いて高槻にそれを見せようとするのだろう。黒部の言いたいことは、いったい何なのだろう。

大方、下らないことだというのは予想がついている。もし、根拠のない嫌味の一つでも言ってきたら、適当にあしらってこの場を去ろう。そう思いながら、高槻は目の前で広げられているノートパソコンのディスプレイに目を移した。

「なんだ、これ……。ネットのニュースじゃないか？」

「ああ、そうさ。下らない三流記事しか書かないネットニュース専門紙みたいだが……。そこで、面白い記事を見つけたんだよ」

「面白い記事だと？」

「まあ、見ればわかるさ。ほら、これだ」

底意地の悪そうな笑みを浮かべ、黒部が記事の一つをクリックした。画面が変わり、ニュースの見出しが少し大きめの文字で映し出される。そこに書かれていたことに、高槻の目は釘付けとなった。

「じ、これは……」



「ふふふ……。 T Drive 長谷川雪乃、麻薬使用疑惑 だつてさ。 なっ、面白い記事だつただろう？」

「お、面白いって……。 お前……！！」

「おいおい、そう怒るなよ。この記事を書いたのは俺じゃない。怒りの矛先を向けるなら、それは相手が違うってものじゃないのかい？」

「うっ……」

思わず握り締めた拳を、高槻はなんとか堪えて引つ込めた。ここで黒部を殴ったところで、何かが変わるわけでもない。それは、高槻も十分にわかっている。

しかし、それにしてもである。今まではスキャンダルの欠片もなかった雪乃が、ここに来てどうして麻薬使用疑惑などと書き立てられなければならないのだろうか。

芸能界は暴力団との繋がりが噂される業界でもあるが、少なくとも雪乃に限ってそれはない。スケジュールに関しては高槻が綿密に管理していたし、同じ業界関係者でも、危険な噂が立っている人間には極力近づけないようにしていた。例え国民的に人気のあるトップスターであっても、遊び人としての噂も持っている人間には気を許させたことはなかった。

「いったい、なぜ雪乃に麻薬使用疑惑が出なければならぬのか。彼女がそんなものを使っていないということは、高槻自身が最も良く知っているはずだ。」

「不満そうな顔だな、高槻。だけど、君だって昨日のコンサートのことは知っているだろう？ 長谷川雪乃は演目の途中で取り乱し、そのまま舞台を去って戻っては来なかった」

「そ、それは……」

「彼女、舞台の上で、虫が出たって騒いでいたそうじゃないか。でも、実際の舞台には虫なんていない。この寒い東北で、仮に室内とはいえ……今は八工の一匹さえ飛んじやないってのにね」

「それじゃあ、あれか？ お前は雪乃が麻薬をやって、そのせいで幻でも見たって言いたいってのか！？」

「だから、そう怒るなって。俺はただ、記事に書いてあるままのことをお前に伝えたただだよ。それが本当かどうかを調べるのは……まあ、警察のお仕事なんだろうけどさ」

疑念と不安。そんな感情の入り混じった高槻に、黒部は皮肉を込めた笑いを浮かべて言い放った。その言葉に、高槻は何も言い返せないまま押し黙る。

麻薬の使用は、確かに人間の気分を高揚させる。現に、この三流ネットニュースの記事にも、普段は大人しく控え目な雪乃が、コンサートの緊張を払拭するために麻薬を使用していたのではないかと書かれている。

所詮は三流ネットニュースの記事。信憑性など皆無であり、普段であれば鼻で笑い飛ばしたところだろう。

だが、それでも高槻は、万が一のことを考えると気が気ではなかった。昨日のコンサートで雪乃が見せた様子から考えて、麻薬でないにしろ、何か良くないことが彼女の身に起きているのは事実だ。

雪乃が麻薬を使っている。そんなことはないと思いたいが、それを証明するだけのものが今はない。仮に記事の内容が事実だとすれば、自分の知らないところで雪乃もまた、業界の闇で牙を研ぐ悪魔達に、いつの間にか毒されていたということだろうか。

こうしてはいられない。そう思ったが早いか、高槻はソファーから立ち上がってロビーを飛び出した。後ろから黒部が何か言っていたような気がするが、今の高槻には聞こえない。携帯電話を片手に、素早く人気のない場所を探して滑り込んだ。

雪乃の身に何があったのか。それを調べ、彼女を守ることこそが、プロデューサーとしての自分の使命である。早朝、まだ殆どの人間が目覚めていない時間だったが、高槻は雪乃に電話をかけずにはいられない衝動に駆られていた。

枕元で鳴る携帯電話の音に、雪乃は重たい頭を起こしながら目を覚ました。

この音は、目覚ましに設定していたアラームの音ではない。かといって、メールではなく電話のため、放っておいても鳴り続けてしまっ。

(うつ……。眠いなあ……)

枕の脇にある目覚まし時計を見ると、時計の針は六時半を指していた。仕事のある日であれば、こんな時間に起きることも珍しくない。が、今は実家に戻っているだけに、もう少し寝ていたいと思うのもまた事実。

今日は、このまま電話を無視して、留守電になるのを待つてしまおうか。そんなことも考えたが、結局雪乃はベッドから起き上がり、未だ鳴り響く携帯電話を捕まえて中身を開けた。

「これ……。高槻さんから……」

電話の相手を確認すると、それはプロデューサーの高槻からだっ

た。

早朝、まだ家の者さえも起きていないであろう時間帯に、直々に電話をかけてくる。普通に考えれば非常識と思われるも仕方ないが、雪乃は迷わず電話に出た。あの、真面目な高槻のことだ。きっと、何か特別な用事が出来たに違いない。

「はい、長谷川です」

「雪乃かい？ 僕だけど……。今、少しだけ話せるかな？」

電話の向こうから、聞き慣れた高槻の声が聞こえて来る。だが、その声はいつもの高槻のものとは違い、どこか不安を帯びたものだった。

「えっと……。私なら、大丈夫ですけど……」

「そうかい。朝早くから、済まないね。でも……どうしても、雪乃に聞きたいことがあってね」

「私に聞きたいこと？ なんですか？」

「回りくどいのは僕も嫌いだから、単刀直入に聞くよ。雪乃……君、昨日のコンサートで、いったい何があったんだ？」

「えっ……！？ そ、それは……」

予想もしなかったことを高槻から尋ねられ、雪乃はしばし口籠った。

昨日、コンサートで雪乃が退場した後も、高槻は彼女のことを心配して声をかけてくれた。それこそ、夏樹や咲花に裏で指示を出す傍ら、雪乃のことを落ち着かせようと懸命に話しかけてくれた。そして、全てが終わった後、彼は雪乃に「何も気にすることはないとだけ言ってくれたのだ。

そんな高槻が、雪乃に昨日のことを再び聞いてくる。しかも、こんな朝早く、直々に雪乃の携帯に電話をかけてまで。

ただ事ではないということは、雪乃にもわかっていた。だが、ここで本当のことを話したところで、高槻には信じてもらえないだろうとも思っていた。

夢の中に出てきた毒虫が、現実世界に溢れ出して身体を這い回る。そんな、ホラー映画みたいなことが、実際にあると信じるような人間などいないだろう。嶋本亜衣のような奇人を除いては、「何、馬

鹿なことを言っているんだ」と言われてしまるのがオチである。

「ごめんなさい、プロデューサー……。私にも、実はよくわからないんですけど……」

心配して電話をかけてくれたのは嬉しかったが、今の雪乃には適当にごまかして場を取り繕うことしかできなかった。

「そうか……。ところで、雪乃。つかぬことを聞くけど……。まさか、ここ最近で、変な人と関わりを持つたりはしていないよね？」

「変な人？ それ、どんな人ですか？」

「いや……。実は、昨日のコンサートで君が取り乱したことについて、君が変な薬を使っているんじゃないかと書き立てた連中がいてね。下らない、三流のネットニュースだし、まさかとは思うけど……。本当に、何もないのかい？」

「何もないって……。プロデューサー！ 私のこと、疑っているんですか！？」

「そ、そんなつもりじゃないよ。ただ、僕は君のことが心配で……」

「すみませんけど……。少し、放っておいてください。私、プロデューサーが思っているような人とは、別に何の関係もありませんから……。……」

最後の方は、喉の奥で声を震わせるようにして言った。電話の向こうで高槻が何かを言っていたが、雪乃は一方的に通話を終えると、携帯の電源を落として枕に叩きつけた。

あの毒虫のことは、自分でもよくわからないのだ。それなのに、周りは好き勝手に言いたい放題言って、雪乃のことなどお構いなしである。

これまでも週刊誌に悪い噂を書かれたことはあったが、それはあくまで芸能界における負の部分だと思って我慢することもできた。しかし、今回ばかりは雪乃自身、自分を覆う重圧に耐えられる自信がなかった。

プロデューサーの高槻とは、T Driveが結成された当初からのつき合いである。だからこそ、雪乃は高槻に信じて欲しかった。根も葉もない噂をネットニュースに書かれたところで、そんなことは気にしないとばかりに、身体を張って守って欲しかった。

甘えた考えであるということは、自分でも理解しているつもりだ。しかし、そうでもしなければ、今のこの状況を乗り越える術が雪乃には見つからない。

仲間からも、担当者からも疑惑の目を向けられて、自分の周りから徐々に頼れる者が消えて行く。時に冬の東北よりも冷たい風の吹く芸能界において、孤立は即ち死を意味した。別に、本当に命が断たれるわけではないのだろうが、アイドルとしての生命から、果ては社会的な人としての尊厳までも完全に奪われてしまうということとは、想像に難くない。

いったい、これから自分はどうなってしまうのだろうか。地方のご当地アイドルから抜け出して、気がつけば一年も経たない内に、トップアイドルの仲間入りを果たした自分。だが、それだけに、壊れる時はこうも呆気ないものなのかと思うと、なんだか今までやっ

てきたことの全てが虚しく思えてきてしまっ。

自分はこんなところで終わりたくない。もっと、大勢の人の前で、大好きな歌を精一杯歌いたい。

そう、頭では夢を描こうと努めていたが、今の雪乃の心を支配しているのは言い様のない不安と孤独だった。

窓の外で舞い散る雪が、いつの間にか曇に変わっていた。窓ガラスに張り付く半分溶けた雪の粒を見て、雪乃は自分の心が今の空のように泣いているのだと感じていた。

朝方から降り続いた雪は、既に昼には止んでいた。

曇に濡れた道を歩きながら、照溜は天気予報で今年が暖冬になりそうだと言われていたのを思い出した。

東北に位置するN県は豪雪地帯で有名であり、それはここ、火乃澤町とて変わりはない。毎年、雪は照溜の腰が埋まる程にまで積もり、場合によっては積雪が人の背丈を越えることもある。

そんな火乃澤町において、今日のような天気は珍しかった。十二月も終わりに近づいているというのに、今年は雪の降らない日の方が多かったような気がする。世界規模で深刻化している地球温暖化は、自分たちの暮らしにも少しずつ影響を与え始めているのかもしれない。



駅前のロータリーを迂回するようにして周り、照瑠は行きつけの甘味屋の扉を開いた。店の奥に目をやると、そこには既に先客の姿がある。

「あつ、ようやく来た!!」

照瑠が店に入るなり、先にテーブルについていた一人が席を立った。その低い身長とハスキーボイスから、それが誰であるかは明白だ。

「遅れてごめんね、亜衣。でも、こんな冬休みの昼日中に呼び出すなんて、何があつたの？」

「まあ、ちょっと訳ありだね。とりあえず、こっちに座って何か頼んでよ」

照瑠を呼び出した張本人、嶋本亜衣が手招きをしながら言った。自分から呼び出しておいて勿体をつけるのは、亜衣のいつもの癖だ。こついう場合、大抵は何かろくでもない話を聞かされることが多い。思わず照瑠は身構えたが、すぐに亜衣の隣にいる人物に気づいてそちらに目を移した。

白金色の髪と赤い瞳。男でありながら雪のように白い肌を持ち、それとは対照的な黒を基調とした衣服に身を包んだ少年。亜衣の隣にいたのは、あの犬崎紅だった。

「えっ……? な、なんで、犬崎君がここにいるの!？」

思わぬ相手がいたことに、照瑠は少々面食らいながらも席についた。亜衣とは向い合せになる形で、紅の隣の椅子に座る。本当は亜衣の隣の方がよかったのだが、そこには彼女の鞆が置いてあって邪魔だった。

「ようやく来たか、九条。嶋本曰く、今日もまた仕事の話だそうだ」

「仕事って……また、何か心靈現象の類なの？」

「さあな。俺もついさつき店に来たばかりだし、肝心の依頼人がまだ来ていない。詳しい話は、そいつが来てからでないとわからないな」

相変わらずの無愛想な口調で、紅は淡々と語っていた。こちらと目も合わせようとしないことに照瑠は少しばかり腹が立ったが、あえて何も言わず黙っておいた。ここで何か言ったところで、紅が態度を変えとは思えない。

テーブルに備え付けられていたベルで店員を呼び、照瑠達はそれぞれが食べたい物を注文した。

女子にとって甘い物は別腹と言われているが、今日はそこまでたくさん食べたいとは思わない。そう思っ、照瑠も亜衣も適当に羊羹と抹茶だけを頼んでおいた。もっとも、その横で紅だけは、しっかりと店の名物であるクリーム餡蜜を頼んでいたが。

（そう言えば、犬崎君って甘党なんだっけ……。確か、亜衣がそんなこと言ってたな……）

亜衣から聞いた話を思い出し、照瑠はちらりと紅のことを横目で

見た。その表情は依然として不機嫌そうな感じだが、そんな彼が大皿に盛られた餡蜜を食べているところを想像すると、何故か微笑ましく思えて来るのは気のせいか。

照瑠がそんなことを考えていると、再び店のドアが開く音がした。ドアについていた鈴が鳴り、その向こうから帽子とサングラスを身につけた少女が姿を現す。彼女は辺りを気にしながら店の中に入ると、そのまま照瑠達の座っている席の前で立ち止まった。

「ごめんね、亜衣ちゃん。遅くなっちゃった」

少女の口から出た言葉に、照瑠は彼女が亜衣の言っていた依頼人だということを悟った。が、それにしても、なんという格好なのだろうか。

冬場の、しかも曇りの日だというのに、目元は大きなサングラスで隠されている。頭には、これまた地味な帽子が乗り、髪型さえも良くわからない。服装も同じく地味で、どう考えても今風の女子高生とは思えない。

いったい、この少女は何者なのだろう。まさか、また亜衣の妙な人脈で繋がっている、変人の一人ということなのだろうか。

先日、次に亜衣から宇宙人を紹介されても驚くまいと思った照瑠だったが、これには少し引いてしまった。いや、もしかすると、目の前にいるこの少女こそが、宇宙人が人間に変身した姿なのかもしれない。

相手の正体もわからないまま、照瑠はそんな彼女と正面に向かい合うことになった。亜衣が鞆を退かしたので、代わりに相手がそこ

に座って来たのだ。

「えっと……。それじゃあ、そろそろ変装を外した方がいいんじゃない？ そんな格好だと、皆も誰だかわからないと思うしね」

隣に座った少女の格好など何一つ気にすることなしに、亜衣はさりりと言つてのけた。少女はそれに無言で頷くと、帽子とサングラスをそつと外す。

「あつ……。！」

それ以上は、言葉が出なかった。

帽子とサングラスの向こうから現れた少女の顔に、照瑠は驚きを隠せないまま固まった。彼女の前に座っている者。その人物こそ、先日のコンサート会場で見たアイドルの一人、T Driveの長谷川雪乃に他ならなかったのである。

「こ、こんにちは……。長谷川雪乃です……」

肩を小さく丸めながら、雪乃は遠慮がちにそう言った。舞台の上にいた時とは違い、妙に内気な印象が目立つ。これが、あの大舞台であれだけの大衆を前に歌っていた人間と、果たして本当に同一人物なのだろうか。

「緊張しなくてもいいよ、ゆっきー。この人達なら、ゆっきーの話もちゃんと信じてくれるはずだからね」

雪乃の背中を、亜衣が軽く叩いて言う。その態度からして、どうやら亜衣が雪乃と知り合いということとは本当らしい。もっとも、ま

さかこんなところで、昨日の舞台上で歌っていたアイドルと同じ席を  
囲むことになるとは思わなかったが。

「それで……私達をここへ呼んだ理由は何なの、亜衣？」

「よくぞ聞いてくれました、照瑠殿。実は、昨日ゆつきーからメー  
ルの返信があつてね。急に合つて欲しいなんて返されたもんだから、  
気になって尋ねてみたら……なんでも、昨日のコンサートで歌つて  
いる時に、妙な物が見えたらしいんだ」

「妙な物？」

「そうだよ。まあ、詳しくは、ゆつきーから直接聞いた方がいいと  
思うけどね。私もそこまで細かくは聞いてないし……いいよね、ゆ  
つきー？」

雪乃の顔を覗き込みながら、亜衣が目配せをする。雪乃は無言で  
頷くと、照瑠達に事の詳細を話し始めた。

く 四ノ刻 蠱毒 く

長谷川雪乃が毒虫の夢にうなされ始めたのは、T Driveが結成されてから間もなくのことだった。

夢を見た当初、雪乃はそれを下らない悪夢の類だと思って気にはしなかった。確かに気持ちの悪い夢ではあったものの、多忙な日々を追われ、そんなことを気にかけている暇もなくなった。

だが、そんな雪乃の日常は、先日のコンサート会場で起きた一件によって、脆くも崩れ去ってしまった。

会場で歌っていた自分を襲った、謎の毒虫の群れ。他の人間には見えていないようだったが、あれは確かに夢で見た毒虫達だった。

夢で見た物が、現実の世界に現れて自分を襲う。にわかには信じ難いことだったが、雪乃自身、この目で見た物を疑おうとは思えない。あの、虫に全身を這われたときの感触を思い出すと、それだけで体が震えてくる。

全てを話し終えたとき、雪乃は小さく俯いていた。昨日のコンサートのは、できればあまり思い出さたくない。そんな感情が見て取れた。

「なるほどね。それで、ゆっきーは私に相談を持ちかけたってわけだ」

「うん……。こんな話を信じてくれる人、亜衣ちゃんしか思いつかなくって……」

「まあ、そうだろうね。夢の中の虫が現実世界に飛び出して来るなんて、それこそホラー映画の世界だし。でも、ここにいる二人に任せれば、もう安心だよ」

雪乃の様子を気遣ってか、亜衣は少し軽い口調でそう言った。しかし、その一方で、紅も照瑠も難しい顔をしたまま表情を変えようとしないう。こと、照瑠に至っては、いつになく真剣な態度で雪乃の話聞いていた。

心霊現象と悪夢。以前、その二つが絡んだ事件に関わってしまったことは、照瑠も記憶に新しい。

今から一月ほど前、照瑠が巻き込まれることになった『魄繋ぎ事件』。その事件で知り合った少女、天倉癒月もまた、悪夢にうなされる日々を送っていた。

癒月から悪夢のことについて相談を持ちかけられたとき、照瑠は彼女の話を親身になって聞いてやった。が、所詮はその程度のことしかできず、癒月のことを真の意味で救うことはできなかった。

既に死んでしまった己の魂を現世に繋ぎ止めるため、他人の身体を移植することしか生きることのできなかつた癒月。その真実を知った時、彼女は自ら炎の中に消えるという道を選んだ。他人の命を奪ってまで生きるくらいであれば、帰るべき場所に帰ることを選んだのだ。

あまりにも救いようのない、悲劇的な結末。その一件が、照瑠に巫女としての修業を行うことを決意させた。向こう側の世界に関わることで不幸な末路を辿ってしまうような者を減らしたいと思うよ

うになったのも、癒月の一件があつてのことだ。

長谷川雪乃のしている悪夢の原因が、いったい何なのかは照瑠にもわからない。だが、それでも雪乃を助けたいという気持ちは紛れもない真実であり、そのために自分の力が役立つのであれば、照瑠はそれを出し惜しみするつもりはなかった。

「夢で見た虫が、本当に現実の世界に現れるなんて……。犬崎君は、どう思う？」

先ほどからずっと黙りこくつたままの紅に向かい、照瑠は何の気なしに聞いてみた。

修業をして力をつけてはいるものの、心霊現象全般の知識において、照瑠はまだまだ疎い。雪乃を助けるためには、紅の意見を聞くことも必要になるだろう。そう思つてのことである。

「毒虫に全身を食われる夢か……。一応、心当たりはあるんだがな……。」

照瑠の問いに、紅は正面を向いたまま返事をした。相も変わらずぶっきらぼうな口調だが、今のそれには、どこか悶々とした気持ちが込められているようにも思える。答えは既にわかっているが、同時に何かに引っかかっている。そんな感じなのだ。

「心当たりって……。やっぱり、何かの心霊現象なの？」

「ああ。俺達、向こう側の世界に通じる人間にとっては、かなり有名な呪詛の一つがある。」



険しい表情を変えないまま、紅はずばりと言つてのける。普通にあれば呪いや祟りの話など一笑に付す者が多いのだから、紅の全身から放たれている空気には、それをさせない何かがある。

「今回の件に絡んでいる呪術……。それは恐らく、トク 蠱毒 と呼ばれているものだろう」

「ごどく？ 何なの、それは？」

「人間の歴史の中でも最も古い呪いの術……。否、正確には、妖怪の類を生みだすための術と言つた方がいいかもしれない」

「よ、妖怪つて……。そんなもの、人の手で生み出すことができないて初耳よ!？」

「話は最後まで聞け。妖怪と言っても、今回の相手は河童や一つ目小僧なんかの仲間じゃない。少しばかり、特殊な性質を持ったやつなんぞな」

照溜の言葉を制し、紅は話を続ける。こういつた類の話になるといつもは無口な紅が途端に饒舌になる。いつもは何を考えているかわからない態度を取っているが、自分の土俵では、意外と博識な面をさらけ出すのかもしれない。

「そもそも、蠱毒は古代の中国で生み出されたとされる一種の呪術だ。その原点は、恐らく殷の時代にまで遡る」

「殷の時代……。って、いつ頃のこと？」

「少なくとも、紀元前17世紀頃には存在していたらしい。歴史上、

考古学的に実在が確認されている最古の王朝だ。世界史の教科書で、名前くらいは見たことがあるだろう？」

「まあ……確かに、それはそうだけど……。そんな古くから、呪いつてあつたんだ……」

今から数千年も前の時代から、既に呪いの儀式は存在した。そんな驚愕の事実をあつさりと言つてのける紅に、照瑠は思わず言葉を失った。それは亜衣や雪乃も同様で、特に亜衣などは、完全に目を丸くして紅の話に聞き入っている。いつもであればメモの一つでも取り始めそうなところだが、今日に限ってはそれもない。

「蠱毒は、その殷の時代に確立された呪詛の一つだ。ムカデやサソリ、それに毒グモなんかを始め、ヒキガエルや毒ヘビなどの体内に毒素を持った生き物を一つの壺の中に集め、それを地面の下に埋めておくことで完成する」

「地面の下に？ でも、それでどうやって人を呪うの？」

「地面の下に埋められた壺の中では、毒を持った生き物たちが飢えと渴きに苦しんで、最終的には互いに共食いを始める。その中で、最後まで食われずに生き残つたやつを取り出して、乾燥させてミイラにする。そうやって作られたのが、蠱毒と呼ばれる呪いの道具さ」

「うわぁ……。なんか、物凄く残酷で気持ち悪い方法ね……」

「確かにそうだな。だが、蠱毒の本当の恐ろしさは、こんなもんじやない」

紅の赤い瞳が、亜衣の隣にいる雪乃に向けられた。血のような色

をした二つの目に睨まれて、雪乃は思わず身体を逸らして身構えた。

「そもそも蠱毒は、最初から他人を呪うために作られた術ではなかったんだ。互いに共食いをして最後まで生き残った毒虫の力を借りて、現世で利益を得ようとするためのものだった。それも、一生分の運を使っても得られないほどの富を、自分の側に舞い込ませるような強い利益だ」

「現世利益って……。そんなもので、本当に何か御利益があるの？」

「それは、蠱毒を作った者の力次第だ。素人が作っても大した効果はないが、プロの作った蠱毒はとんでもない力を持つ。だが……。その代償として、蠱毒で富を得た者は、その魂を蠱毒に生贄として食われることになるんだ。その性質を応用して蠱毒を気に入らない相手に送りつければ……。後は、お前達でもどうなるか想像がつくだろう」

照瑠から亜衣、そして雪乃の順に目配せをしながら、紅はゆつくりと首を動かしてそう言った。

彼の言わんとしていることは、照瑠達にも良くわかる。蠱毒を送られた相手は知らずの内に富を得ることができ代わりに、徐々にその命を削られてゆく。そして、最後は幸せの絶頂にありながら、最も悲惨で非業な死を遂げることになるのだらう。

呪いたい相手を持ち上げるだけ持ち上げておいて、最後に地獄のどん底へ叩き落とす。人の心を弄ぶようなやり方に、照瑠は憤りを隠せない。仮に紅の言っていることが本当であれば、雪乃の命は今も削られ続けているということになるからだ。

目の前の少女は、果たして本当に呪われているのか。今の照瑠には、見ただけでそれを判断するほどの力はない。

だが、それでも照瑠は、雪乃を救うために自分の力が役立つのであれば、それを出し惜しみするつもりはなかった。救えるはずの者を救えないまま後悔する。そんな想いは、もうたくさんだ。

「ねえ、犬崎君。もし、長谷川さんが本当に呪われているって言うのなら……私達で、何とかしなくちゃいけないよね？」

「まあ、そういうことになるだろうな。もつとも、蠱毒を抜く場合は、そこにいる女にもそれなりの覚悟を決めてもらわなくてはならないがな」

紅の血のように赤い瞳が、更に赤さを増したような気がした。人間離れたした瞳で見据えられ、雪乃は思わず身体を仰け反らせるようにして反応する。紅のように愛想のない人間と話をすることは、正直なところ、雪乃は苦手だった。

「あの……。覚悟って、いったい何をすればいいんですか？」

雪乃が恐る恐る紅に尋ねた。これから自分が何を言われるのか、それだけが不安で仕方がない。

「簡単な話だ。お前に、今のアイドルとしての名声を捨てる覚悟があるかどうか……。俺は、それを確認したい」

「名声を捨てるって……それ、どういう意味ですか!？」

「どういう意味もなにも、そのままの意味だ。蠱毒を抜く最も簡単

な方法は、蠱毒の力によって得られた富や名声……その全てを、蠱毒と共に捨てればいい。お前がアイドルになつてから貰ったもの……それこそ、ファンレターから事務所の支給品まで、怪しいものは一切合切破棄すればいい」

「そ、そんな……。ファンの人からの手紙や事務所の人から貰ったものまで捨てるなんて……。私にはできません！！」

「だが、そうしなければ、お前は今に魂をあの虫に喰らい尽くされて死ぬぞ？ 人間、一度手に入れた富や名声を捨てたくないと思つるのが普通だが……。そこに付け込んで破滅に導くのが蠱毒のやり口だ」

「だったら、お被いか何かで消したりできないんですか？ 妖怪の一種と言つても、呪いには違いないんでしょう？」

「まあ、できないことはない。ただし、それで蠱毒を祓つてしまえば、当然のことながら全ての呪力が消える。お前に今まで舞い込んできたアイドルとしての成功は、金輪際ばつたりと途絶えるかもしれない。どちらにせよ、下積みからやり直すくらいの覚悟はしてもらわないとな」

ばつさりと切り捨てるようにして、紅は何の容赦もせずにそう言った。

アイドルにとって、今の栄光を捨てて下積み時代に戻ることに。それは即ち、業界内での死を意味する。雪乃でなくとも、すぐに返事ができないのは当然だ。

それ以上に、雪乃は紅から告げられた事実の方がショックだった。紅の話が本当ならば、今までの成功は全て呪いの副産物だったとい

うことになる。T Driveの成功も、雪乃の人気も、全ては実力に見合った物ではなかった。そう言われたに等しいのだ。

自分に実力がないことくらい、雪乃もわかっていた。だが、それでも現実を認めたくないという自分がいるのも事実であり、それが彼女に決断することを躊躇させた。

呪いなど、この世にあるわけがない。そう思わねば、やっていられなかった。

オカルト話に詳しい亜衣に頼っていながら、今さらになって信じたくないと言うことは、さすがに都合が良過ぎると思えてしまう。それでも、ここで現実を認めてしまえば、それは雪乃が今の生活を失うことを意味するのだ。

自分はもつと歌いたい。自分は歌うことでしか、その存在を認められることなどない。その想いが、雪乃の心を頑なに縛りつけていた。

「私は……アイドルを辞めるつもりはありません。折角相談に乗っていただいて申し訳ないですけど……歌えなくなるくらいなら、死んだ方がマシです」

力なく、憂いを込めたような表情で、雪乃は紅に向かって言った。こう言えば、紅もこれ以上は何も言わないだろう。そう思っていたのだが、それが返って紅を怒らせることに繋がった。

「死んだ方がマシ、だと？ お前……本気でそう思っているのか？」

先ほどまでとは、明らかに纏っている空気が違った。いつもは感

情を露わにすることのない紅が、珍しく怒っている。激しく怒鳴りつけるようなことはないにしろ、彼が雪乃の言葉に憤りを感じているのは紛れもない事実だ。

「死ぬ覚悟があるなら、お前はどつして生きる覚悟を決めないんだ？ 偽りの地位にしがみついて、得体の知れない虫に苦しめられて……そんな状態でアイドルを続けて、お前は本当に満足なのか？」

「それは……確かに、あの夢を見なくなるなら、それに越したことはないですけど……」

「だったら話は早い。お前の中に巣食っている蠱毒……そいつを俺が被えば全ては終わる」

雪乃の返事を待たず、紅は一方的に言い放った。仕事に対して報酬の有無を気にする紅にしては、いつになくやる気になっているのが珍しい。

「長谷川と言ったな？ 死ぬなんて言葉は、そう簡単に口にしていほど軽いものじゃない。お前がどう思っているかは知らないが……死という言葉の口にするならば、それに見合った覚悟を見せてみる。それもできないなら、無暗に死ぬなんて言葉を使うべきではないな」

最後の方は、紅は普段の口調に戻っていた。そんな紅の横で、照瑠は珍しく昂奮している彼の様子に自分の中で抱いていた印象が変わってゆくのを感じていた。

ぶつきらばうで口が悪く、おまけに無愛想で金に意地汚い。今までの紅の態度からして、彼にはそんな印象しか持つてはいなかった。

だが、今日の件ではつきりとわかった。紅は、単に不器用なだけだ。死者を相手にするような仕事を生業にしているからこそ、人の死に対してことさら敏感になる。そんな彼の言葉から、照瑠は紅の中に少しだけ優しい部分があるのではないかと思ひ始めていた。

「それじゃあ、とにかくその蠱毒ってやつをさっさと退治しましょう。長谷川さんには悪いけど……やっぱり私も、死ぬとわかっている人を放っておくのは気が引けるもの」

「私も賛成だよ！ 呪われている可能性のある友達を放っておくなんて、やっぱりなんか気分が悪いしね。ゆっきーだって、本気で死にたいなんて思ったわけじゃないよね？」

「亜衣ちゃん……」

「そう、心配しなくても大丈夫だって。なにしろこっちには、神の右手を持つ照瑠様と、悪霊退治の専門家までいるんだからね！！」

そう言いながら、亜衣はにやりと笑って紅と照瑠に大きなVサインを送った。いつもであれば調子に乗るなど言わんばかりに紅が頭を叩いているところだが、今日に限っては彼も軽く苦笑するだけに留まっていた。

雪乃の家は、火乃澤駅からバスで三十分ほど走ったところにあっ  
た。



停留所まではものの五分程度であり、交通の便はそれなりによい。閑静な田舎町の一軒家にしては、モダンな作りになっている部分も多かった。

「ここがゆつきーの家か……。なんか、昔とあまり変わらないね」

「うん。私が東京に出ても、お父さんとお母さんはこっちで暮らしていたからね。亜衣ちゃんと一緒に中学に通っていた時から、何も変わっていないはずだよ」

玄関の鍵を開けながら雪乃が言った。こうして見ると、雪乃がT Driveの一員であることなど忘れてしまいそうになる。普通に話している分には、どこにでもいそうな年相応の一人の少女だ。

「ねえ、亜衣。ところで……。さつきから気になってたんだけど……」

玄関の扉が開くと同時に、照瑠が亜衣に尋ねた。

「この家、本当に長谷川さんの実家なの？」

「えっ！？ そんなの決まってるじゃん。ここはゆつきーの家で間違いないよ」

「でも、表札には 蓮薙 って書いてあるわよ」

「ああ、それね。ゆつきーの長谷川雪乃って名前だけど、あれは芸名なんだよね。本名は蓮薙有希はなゆきって言うんだけど、東北生まれだから、有希と雪をかけて雪乃って名前にしてみたみたい。ついでに名字も変えて、名前からはすぐに本人と分らないようにしたんだよ」

「なるほど。まあ、芸能人にはよくあることね」

表札の謎が解けたことで、照瑠は特に気にせずそう言った。

芸能界で活動するために、芸能人が芸名を使う。そんなことは、別に珍しいことではない。

だが、こうなってくると、雪乃のことを何と呼べば良いのかが問題だ。昔からのあだ名で呼んでいる亜衣は別として、照瑠は彼女と初対面。芸名で呼ぶべきが、それとも本名で呼ぶべきか。雪乃が望むのは、果たしてどちらなのだろう。

「えっと……。家に上がらせてもらう前に、ちょっと聞いていいかしら？」

「はい。なんででしょう？」

「あなたの名前、どっちで呼べばいいの？ 普段は芸名で呼ばれているだろうけれど……。やっぱり、本当の名前で呼んだ方がいい？」

「別に、気にしなくて構いませんよ。雪乃の方が、周りからは呼ばれ慣れてますし」

「それじゃあ、私もそっちで呼ばせてもらうわ。後、その他人儀な敬語は止めましょう。あなたが亜衣の友達なら、私もあなたの友達よ。友達に敬語使うなんて、おかしいじゃない」

「そうね……。だったら、私も照瑠ちゃんって呼ばせてもらうけど……いいかな？」

「ええ。改めて、よろしくね」

雪乃の言葉に、照瑠は笑顔で返事をした。それを聞いて、雪乃の身体からも幾分か緊張が解けたようだった。

アイドルと言っても、やはり同じ人間だ。そんなことを実感しつつ、照瑠は雪乃に促されて彼女の家の玄関をくぐる。

家の中はこれまた普通の一般家庭な空気が漂っており、特に芸能人の家を意識したようなものは何もない。もつとも、ここはあくまで雪乃の実家であり、彼女が普段暮らしている東京のマンションは話が別なのかもしれない。

案内されるままに二階へ続く階段を上がると、そこには扉が二つあった。片方は雪乃の部屋で、もう片方が父親の書斎とのことである。

扉の向こう側にあった雪乃の部屋は、これまた普通の女の子の部屋だった。ベッドと洋服箆笥がある以外は、これといって珍しいものがあるわけでもない。使われなくなつて久しいのか、家具の類は最小限のものしか置かれていなかった。

「なんだか、何もない部屋でごめんね。とりあえず、その辺に適当に座つて」

カーペットの上に転がるクッションを照瑠達に渡し、雪乃は自分のベッドに腰掛けて言った。照瑠も亜衣も渡されたクッションを下に置いて座つたが、紅だけは愛想の無い表情のままタンスに寄りかかっていた。

「で、犬崎君。ゆつきーの家に来たはいいけど、これからどうするの？」

「そうだな……。とりあえず、お前達は家の中に妙なものがないかどうか探してくれ。夢に出て来た毒虫がサソリのような姿をしていたことを考えると、恐らくは蠱毒の本体も同じ姿をしているはずだ」

「うええ……。あんまり気持ちのいい探しものじゃないすなあ……」

「文句を言うな。だが、ここはあくまで実家だからな。本体が送られて来た場所が東京のマンションだった場合、徒労に終わる可能性もある」

「だったらどうするのか？ まさか、これからゆつきーと一緒に東京まで行くななんてことにならないよね？」

「それは心配ない。どうしても見つからない場合は、夜になったら強硬手段に出るつもりだ」

箆笥に寄りかかって腕組みをしたまま、紅はそれだけ言って口を閉じた。その目は既に亜衣を見ておらず、部屋の隅の方を睨みつけるようにしている。

こうなってしまうと、もう紅に何を聞いても無駄である。仕方なく、照瑠も亜衣も雪乃と一緒に家の中を搜索することにした。蠱毒が誰かから雪乃に送られてきたものであれば、贈答品の類を中心に探しまわれればよい話だ。

かくして、照瑠達による長谷川家もとい蓮薙家の家宅搜索が始まった。何も見つからない可能性もあるにしろ、それでもできればここで蠱毒の本体を見つけてしまいたい。そんな焦りからか、三人の少女達は忙しなく家の中を探しまわった。

雪乃の実家に送られてきた、地元のファンからの贈り物。父親や母親がもらったお歳暮の中身なども、念のため調べてみる。また、家のどこかに隠されている可能性も考えて、亜衣などはいいに軒下に頭を突っ込んでまでサソリのミイラを探そうとした。

一時間、二時間と、時間だけが過ぎて行く。それに比例して家の中が汚く散らかって行くが、お目当てのものは見つからない。両親が仕事で出かけているのが救いだが、それでも時間は無尽蔵にあるわけではない。

とうとう目ぼしい場所は全て探しつくしたのか、照瑠は衣類や箱の散らばったりリビングで膝をついた。

「ふう……。見つからないわね、虫の本体……」

「そうだね。照瑠ちゃんには悪いけど……やっぱり、東京で私が暮らしているマンションの方にあるのかも。あそこには、まだ人から貰ったものがたくさんあるし……」

「それじゃあ、後は犬崎君の言っていた強硬手段に頼るしかないってことか……。これだけ散らかして収穫なしって言うのも、なんだかなあ……」

部屋の中を改めて見直し、照瑠が大きな溜息をつく。散らかしたからには片付けねばならず、これからの作業のことを考えると頭が

痛い。

「仕方ない。こうなったら、少し早目の大掃除をするつもりで片づけましょう。雪乃の家には、ちょっと悪いことしちゃったけどね」

「そ、そんなことないよ。照瑠ちゃんこそ、今日会ったばかりの私にこんなに付き合ってくれて……。私は、話を信じてくれただけでも十分だったのに……」

「はいはい、そこまで。変な気づかいは無しって、さっきも言ったばかりでしょう?」

手を叩きながら立ち上がり、照瑠は雪乃に向かって言った。服の袖をまくって気合を入れ直すと、部屋中に散らばった衣類を拾い集めて腕にかけて行く。

「ねえ、そう言えば……犬崎君と亜衣のこと見なかった?」

「えっ、亜衣ちゃん? そうだなあ……。さっきまで、その辺で一緒に探していたんだけど……」

「まったくもう! こういう肝心な時に限って、二人とも役に立たないのよね」

嶋本亜衣がどんな性格をしているのか、照瑠とて知らないわけではない。亜衣は散らかすのは得意だが、片付けるのは大の苦手だ。他人の家を散らかすだけ散らかして、いざ片付ける際に雲隠れしてしまうのが亜衣らしい。

こうなれば、雪乃と二人で片づけるしかないか。そう、照瑠が諦

めかけたときだった。

「ねえねえ、照瑠！ 虫のミイラ、見つかった？」

「あつ、亜衣！ あなた、今までどこ行ってたのよ！！」

「どこって……私は私で、ちゃんと虫を探してたよ。縁側の下に潜ったり、雨どいが入ってる戸袋の中覗いたり……後は、ゆっきーの部屋の天袋から天井裏に上がって調べたりね」

「縁側の下って……あなた、よくそんなところに潜れるわね。それに、天井裏なんかに入って、ねずみと鉢合せでもしたらどうするつもり！？」

「別に平気だよ。私、小さい頃から、家の中でよくかくれんぼしてたから」

そういう問題ではないだろう。そんな言葉が喉から出かかったが、照瑠はあえて突っ込まずに亜衣に片付けを手伝うよう言った。ここで彼女に説教したところで、亜衣の常識が一般人のそれと違うのは今に始まったことではない。

その後、部屋中に散らばった服と箱を、照瑠達は頑張つて元の場所に戻した。気づけば時刻は夕方になっていたが、その間、犬崎紅はまったく姿を見せなかった。

その日は結局、雪乃の家の片づけをするような形で夜を迎えてしまった。

全てのものが元通りの場所に収まった雪乃の部屋で、照瑠達は改めて悪夢の元凶に立ち向かう術を考えていた。

紅の言うことには、あの毒虫達を祓うには、雪乃が眠りについていなければならないらしい。敵の現れる場所が夢の中だけに、雪乃が眠っていないければ、こちら側からも手が出せないとのことだ。

正直な話、照瑠は雪乃の家に泊まることまでは考えていなかった。彼女の頼みを聞く形で相談に乗ったとはいえ、やはりいきなり人の家に宿泊したいと願い出るのは申し訳ない。そういった類のことを気にしないのは、紅くらいのものだろうか。

その紅だが、今は照瑠達の前から席を外していた。なんでも、女の寝る部屋と一緒に泊まるようなことはしたくないとのこと、今は空っぽになっている雪乃の家の物置小屋に潜んでいる。

冬場の寝床として暖房の効いた図書室を選ぶ程に自己中心的な態度を取るかと思えば、人として最低限の礼儀を弁えているかのような行動にも出る。まったくもって、あの犬崎紅とは不思議な人間だと照瑠は思った。

もっとも、女三人に遠慮して逃げ込んだ先が物置小屋の中というのは、どうにも発想がいただけない。

年頃の少女の家に男が泊まることで、両親にあらぬ誤解を抱かせたくないとも思ったのだろう。が、物置小屋の戸を開けたときに紅と誰かが鉢合せたらどうするつもりなのか。暗闇の中、あの赤い



瞳で睨まれたら、何も知らない者は腰を抜かして逃げ出すかもしれない。それこそ、新手の妖怪と間違われても不思議ではない。

「なんか……本当に色々とし訳ないわね。相談に乗るはずだったのが、家中ひっくり返したあげくに一泊させてもらうことになっちゃって……」

「別に構わないわよ。私、あのクリスマスコンサートの失敗してから、T Driveの仲間ともすれ違っちゃったし……。それに、たまには普通の女の子に戻って、こうやってお話するのもいいかなって思ったりして」

「それならいいけど……。でも、残念だけど、今日は早めに寝ないと駄目そうね。犬崎君の話では、夢の中で虫を退治するとかいうことらしいし」

紅に言われた話を思い出し、照瑠は天井から吊り下がっている蛍光灯に視線を移した。

紅の話では、そもそも夢というものは、古代中国においては蠱毒の見せる幻として考えられていたらしい。夢という漢字も、蠱毒を使う巫女の姿を模ったものだとか。

この話が真実なのであれば、雪乃が夢の中で襲われたという話も納得できる。蠱毒は夢の中で相手に恐ろしい幻を見せ、そうやって精神の均衡を欠いた人間の魂を喰らうのだ。

初めは小さな恐怖から与え、徐々にその恐怖を強くし、最後は現実世界でも幻を見せて人の精神を蝕んで行く。その作り方からしておぞましさを感じた蠱毒という呪法だったが、新しい話を聞く度に

胸が悪くなる。それほどまでに、蠱毒を使った呪詛は陰険で悪質なものだ。照瑠は感じていた。

向こう側の世界に関わってから、照瑠も様々な怪奇現象に遭遇して来た。その際、多くの人間が闇に吞まれ、中には命を落としてしまった者もいる。禁忌に触れたが故に自ら破滅の道を歩んだ者もいたが、呪詛によって運命を狂わされた者も多かった。

自ら神の怒りに触れ、その結果身の破滅を招いた者は仕方がない。可哀想だが、それは自業自得というものだ。

しかし、呪いは違う。呪いは人が人に仕掛ける、いわば霊的な罠である。自分勝手な理由から他人の人生を狂わせるようなやり方は、決して許されることではない。それは刃物を持って人を殺傷することと、根本的な部分で何ら変わりはないからだ。

長谷川雪乃に蠱毒を仕掛けた人物。それが誰なのかはわからないが、照瑠は雪乃にこれ以上怖い思いをさせたいとは思わなかった。呪いなどという陰険で卑怯なやり口で、何の罪もない人間が闇に墜ちる。それを救ってやりたかった。

「それじゃあ、ちょっと早いけど、そろそろ寝ましようか？ あまり遅くまで起きていると、逆に昂奮して眠れなくなるからね」

「そうね……。本当は、もう少しだけお話していたかったけど、仕方ないかな」

照瑠の言葉を聞いた雪乃が、名残惜しそうにして布団を被った。照瑠も電灯を消し、部屋に敷いてもらった布団に潜りこむ。

灯りを消してからもしばらくは、照瑠は目を覚ましたまま雪乃の様子を見張っていた。元より、雪乃が寝たら紅を呼んで来ることになってる。こちらが先に寝てしまつては、何のために家にまで泊めてもらつたのかわからない。

もしかすると、他人が一緒の部屋では雪乃が眠り難いのではないか。そんな心配もしてみたが、程なくして、ベッドの方から雪乃の軽い寝息が聞こえて来た。虫の悪夢を見ることを怖がっていた雪乃だったが、理解を示してくれた人間が一緒の部屋で寝てくれたことで、安心して眠ることができたのかもしれない。

(さてと……。雪乃も寝たみたいだし、犬崎君を呼ばないとね……)

寝ている雪乃を起こさないように気をつけつつ、照瑠は枕元に置いてある携帯電話に手を伸ばした。雪乃が寝たら、これで紅を呼ぶことになっているのだ。

電話をかけながら横を見ると、そこでは亜衣が豪快に口を開け広げて眠っていた。厚顔無恥というか何というか、ここ一番のところでは亜衣は役に立たない。

(まあ、それでも亜衣には霊的な存在と通じる力なんてないからね。大人しく寝ててくれた方が、騒ぎにならなくて返つて好都合かも……)

電話の呼び出し音を聞きながら、照瑠は友人の寝顔を横目にそんなことを考えた。

暗い部屋の中、携帯電話の呼び出し音だけが照瑠の耳に響く。先ほどからずっと電話を鳴らしているはずなのに、紅はまったく出て

くれない。携帯で呼べと言ったのは紅の方だというのに、これでは連絡の取りようがない。

だが、しばらくすると、何やらガラスを叩くような音が部屋に響いた。

音に導かれるようにして、照瑠はガラス窓の方を見る。ベランダに通じるその窓を見た瞬間、照瑠は思わず肩を震わせて後ろに下がった。

暗闇の中、窓の向こうから照瑠を捕える赤い瞳。それが紅のものだとわかったのは、目が合ってから数秒後のことだった。

「ちよつと、犬崎君。あんまり脅かさないでよ……」

「仕方ないだろう。こっちはさっきまで物置小屋に隠れていたんだ。こんな時間に正面玄関から入ったら、そっちの方が怪しまれる」

ベランダから部屋に通じる窓を開けながら、紅は平然とした顔でそう言った。泥棒のような入り方をしている時点で、傍から見ればどちらの方法で家に入ろうとも不審者である。

それにしても、もう少しマシな登場の仕方はなかったものか。

紅の行動に半ば呆れながらも、照瑠はそつと雪乃の横に立った。途中、亜衣の頭を蹴り飛ばしそうになったが、結果として蹴らなかつたのだから問題ない。

「で、これからどうするわけ？ まさか、犬崎君が直接この娘の夢の中に入って戦う、とか言うんじゃないでしょうね？」

「心配するな。さすがに、そんな芸当は俺にもできない。だが、それに近いことはするつもりだ」

そう言うが早いか、月明かりに照らしだされた紅の影が細長く伸びた。初めは人の形をしていたそれは、徐々に四足の獣の形を取り始める。床から剥がれるようにして起き上がったその影は、照溜の前で一匹の巨大な犬の姿に形を変えた。

「行け、黒影……」

自らの使役する犬神の名を呼び、紅は雪乃を指差した。その動きに呼応するかのようにして、黒影は流動的な影のような塊へと姿を変えて行く。

粘性の高そうなどろどろとした塊になったところで、黒影は一気に部屋の天井まで伸び上がった。金色の目玉だけを残し、後は元の形さえもわからないほどに細長く伸びきった姿。それはさながら、意思を持った黒い水のようにだ。

その体を不定形なものに変化させたまま、黒影は眠っている雪乃の鼻と口から彼女の中へと入り込んで行った。

「これでいい。後はこれで、蠱毒が誘いに乗ってくれば全ては終わる」

雪乃の中に黒影が完全に入り込んだことを確認し、紅はそう呟いた。一方の雪乃は、体の中に入られたというのに何事もなかったかのようにして眠っている。そのまま五分、十分と経っても、眠っている雪乃に変化は見られなかった。

「ねえ、犬崎君。こんなことで、本当に蠱毒ってやつを追い払えるの？」

「問題はない。蠱毒は一度獲物を定めたら、その獲物が他の相手に奪われるのを極度に嫌うからな。自分が生贄として狙った相手の中に別の霊体が入り込んだならば、必ず攻撃しに現れる」

訝しげな表情の照瑠に向かい、紅は淡々とした口調で語っていた。これから雪乃に憑いている相手を被うにすれば、やけに落ち着き払った態度だった。

それから更に、十分ほど経ったときだっただろうか。

今まで静かに眠っていたはずの雪乃に、突如として変化が現れた。眉間にしわを寄せて顔をしかめ、その額には無数の脂汗が湧き出ている。口元を歪め、歯を食いしばるような表情になって、布団の端を握り締めたまま苦しみだした。

「け、犬崎君！ 雪乃が……！！！」

「慌てるな、九条。ここまでのことは想定内だ。黒影が蠱毒を中から引きずり出すまで、俺達には直接戦うための術がない」

「で、でも……。こんなに苦しそうにしているのに、放っておくなんて……」

「それは仕方ないだろう。多少の荒療治だということは、俺だっただけだ」

「だったら、どうしてそんな平然とした顔をしていられるのよ！  
雪乃が苦しむことをわかって、こんな方法を選んだなんて……いくらなんでも信じられない！！」

深夜、既に家の者が寝静まっている自分でもあるだろうに、照瑠はお構いなしに紅に怒鳴った。

蠱毒をおびき出し、夢の中から現実の世界に引きずり出す。その方法を提案したのは、他でもない犬崎紅だ。それならば、紅はその際に雪乃が苦しむことになることも、当然のことながら知っていたことになる。

それにも関わらず、紅は雪乃の苦痛を和らげるための策を何も考えていなかった。治療に痛みは付き物と言わんばかりに、ただ雪乃の苦しむ姿を眺めているだけである。

もう、これ以上は見えていられない。そう思ったが早いか、照瑠は布団をまくりあげて雪乃の手を取った。

「おい、何をする気だ、九条！！」

後ろで紅が叫んだが、照瑠はそれを無視した。紅の言葉など、今の照瑠には耳に入らない。目の前で雪乃が苦しんでいるというのに、何もしていないことなどできはしない。

雪乃の左手を包み込むようにして握り、照瑠はそこに意識を集中させた。

九条神社の巫女は、古くからこの火乃澤の土地に伝わる癒し手でもある。修業はまだ途中だったものの、今の自分であれば、雪乃の

痛みや苦しみを和らげることぐらいはできるはずだ。

息を深く吸い込み、それを吐き出すと同時に、照瑠は自分の中にある癒しの力を雪乃に注ぎ込む。父の話では一方的に力を送り込むことしかできないとのことだったが、今の状況ではそれで十分だ。

神木の枝に触れていたときのことを思い出しながら、照瑠は懸命に雪乃の手を握って意識を集中した。自分はこんなときのために、父に修業を申し出たのだ。ならば、今この場で雪乃を助けなければ、何のために修業をしてきたのかわからなくなる。

自分の身体の中を流れる何かが、両手を通して雪乃に流れ込んで行くのが感じられた。未だ力の加減を制御することはできないが、照瑠にもその程度は感じる事ができる。

このまま行けば、雪乃も落ち着いてくるのではないか。そう思った照瑠だったが、果たして雪乃はベッドの上で苦しむことを止めなかった。あれだけ強く念じて力を送り込んだというのに、照瑠が手を握る前と後で、何の変化もない。

「ど、どうして……！？ 私はちゃんと、力を送ったはずなのに……。お父さんに言われた通り……修業した通りにやったはずなのに……」

自分の力が及ばない。そんな現実を目の当たりにして、照瑠の顔に焦りの色が浮かび始める。目の前では雪乃が一層苦しみながら息を荒げ、既に全身が汗で濡れていた。

力の制御を完全にできるようになったわけではない。そうわかっ  
ていても、こんなことは初めてだった。今までも、亜衣の腹痛や頭



痛を治す程度のことは普通にできていたし、初めて紅に会った際、負傷した彼のことを無意識のうちに癒してもいた。

ところが、そんな照瑠の癒しの力を、雪乃はまったく受け付けなかった。助けを求めながらも、まるで照瑠の力を拒絶するかのようにして、彼女の送り込んだ陽の気の力ががまるで効いていないのだ。

やはり、自分では駄目なのか。修業も途中な身では、目の前で苦しむ少女一人さえ救うことができないのか。そんな諦めにも似た感情が、照瑠の中に浮かんだときだった。

「少しいいか、九条？」

後ろから、紅が照瑠の名を呼んだ。いつもの冷たい感じとは違い、どこか柔らかい口調だった。

未だ雪乃の手を握ったままの照瑠の頭を、紅は後ろから片腕で目隠しをするように覆った。調度、左手で頭を抱えるようにして、紅は照瑠を自分の胸に引き寄せる。

「ちょ、ちよっと！ 犬崎君!？」

「いいから大人しくしている。お前は長谷川雪乃を、この苦しみから解放したいんだろう？」

いきなり後ろから頭を抱かれ、動揺する照瑠。だが、紅はそんな照瑠に構うことなく、空いている方の右手を照瑠の手に重ねる。

「良く聞け、九条。今から俺が、この女の中にある霊脈れいみゃくをお前に伝える。お前はそこに、自分の力を送るイメージだけを考える」

「靈脈を伝えるって……なんなのよ、それ？」

「詳しい話は後だ。今は余計なことを考えず、余計な物も見ないで、とにかく意識だけを集中しろ」

「わ、わかったわよ……」

後ろから頭を抱かれ、その上で手まで重ねられる。相手を意識するなという方が無理な格好だったが、それでも照瑠はなんとか雪乃の身体に力を送ることに集中した。

再び息を吸い込んで、それを吐きながら自分の中にある力を雪乃に注ぐ。今度は先ほどとは違い、照瑠の頭にも奇妙なイメージが浮かび上がってきた。

それは、言うなれば霧の中を漂っているような感じだった。重力さえまったく感じない不思議な空間の中に、ミルク色の霧が立ち込めている。霧は奥から次々と湧き出しており、その流れは実に様々なものがあつた。

前後左右、実に自由気ままに流れる霧の中から、照瑠は一際強い流れを持った霧を見つけた。そのまま何かに導かれるようにして、照瑠は霧の流れてくる方へと向かって行く。

不思議な霧と共に、なんとも言えぬ奇妙な空間を浮遊する。そんな時間がしばらく続くと、やがて照瑠の目の前に光の球のようなものが姿を現した。

全ての音が静止した空間の中で、その球体はまるで心臓が脈打つ

かのようにして膨らんだり縮んだりを繰り返している。霧はその球から出ていたようで、球が縮むたびに、その全身からガスのように溢れ出していた。

目の前で鼓動を刻む不思議な球に、照瑠はそつと手を触れた。思った通り、その球は微かに温かく、手で触れると柔らかい感触がした。

両手を球に押し付けたまま、照瑠はそれに自分の力を注ぎ込む。今度は押し返されるような感じもなく、力は実に素直に球体へと吸収されてゆく。そして、照瑠の力を受け入れた球体は大きく膨張すると、先ほどよりも強く脈打ちながら輝き出した。

「な、なんなの、これ……」

球が放つあまりの眩さに、照瑠は思わず目を閉じた。すると、急に身体が重たくなり、一度に意識が現実へと引き戻された。

「あ、あれ……？」

気がつくと、そこは雪乃の部屋だった。

紅は既に照瑠から離れ、部屋の隅にある箆笥に寄りかかっていた。その横では亜衣が口を開けて爆睡しており、だらしなく涎を垂らしている。

「気が済んだか、九条？」

箆笥を背に腕組みをしたまま紅が言った。

「け、犬崎君……。今のは……」

「ああ、あれか。お前が力を無駄に浪費しているようだったんでな。少し、相手の中にある霊脈を見せてやっただけだ」

「れ、霊脈って……。なんなのよ、それ？」

「癒し手なのに、そんなことも知らないのか？ 霊脈ってやつは、言わば人の魂の中にある気の流れそのもので、これを断たれると生気が極端に減退する。場合によっては植物状態になることもあるからな。ここを攻撃されることは、極めて危険だ」

「しよ、植物状態！？」

「ああ、そうだ。悪霊の類が霊的な攻撃で人間を殺す場合は、大概は霊脈にある核の部分をつ。全身に気を送っている、魂の中核とも呼べる場所だ」

「そ、そうなんだ……。それじゃあ、私がさっき見た白い霧や光の球は……」

「恐らくは、それがお前の見た霊脈のイメージだ。霊脈がその目によって映るかは人によって異なるが……。少なくとも、お前にはそう見えたいだな」

淡々とした口調で説明する紅の言葉を聞いているうちに、照瑠も徐々に落ち着いてきた。

紅が照瑠の目を隠し、その手を重ねて来た理由。それは、照瑠に雪乃の霊脈を見せるためだったに違いない。雪乃の霊脈を感じ取ら

せ、その核に直接力を注ぎ込ませることで、雪乃を癒す手助けをしてくれたのだろう。

しかし、それにしても、雪乃はどうして照瑠の力を受け付けなかったのだろう。そんな疑問が新たに浮かんできたが、それを照瑠が尋ねる前に、紅の表情が再び険しいものに変化した。

「少し離れている、九条。どうやら黒影が、やつを本体を捕まえたぞ……」

雪乃の側に座っている照瑠を退かし、紅は胸の前で静かに印を組む。照瑠の力が効いたのか、雪乃は既に安らかな表情を浮かべて眠っている。

次の瞬間、心地よい寝息を立てて眠る雪乃の身体から、影のような物が現れて大きく伸び上がった。それは一気に天井まで届き、徐々に脇から触手のようなものを伸ばしだす。最後には雪乃の身体から完全に離れ、それは一匹の巨大なサソリを模した影へと変化した。

「な、なにあれ！ あれが……犬崎君の言っていた、蠱毒つてやつなの……？」

「そういうことだ。だが安心しろ。夢の中から引きずり出した以上、もう奴の好きにはさせん」

天井を這う影を見て、紅がにやりと笑った。影はそのまま窓から外へ逃げようとしたが、雪乃の身体から飛び出した黒い塊がそれを許さなかった。

「そいつを逃がすな、黒影！！」

紅の言葉と共に、黒い塊は瞬く間に黄金の瞳を持った犬の姿に変化する。戦うための姿へと変化した黒影は、逃げ出そうとする毒虫の影に容赦なく牙を突き立てた。

キィィィッ！！

ガラスを引つ掻いたような音が響き、虫の影が天井から剥がれるようにして仰け反った。剥がれた瞬間は薄っぺらい形をしていたそれは、床に落ちるなり風船のように膨らんで行く。六本の脚と二つのハサミを持ったそれは、最後はまだら模様の巨大なサソリとなって照瑠と紅の前に姿を現した。

「ちょっと！ なんなの、あの気持ち悪いの！！」

珍しく小さな悲鳴を上げながら、照瑠は紅の腕に飛び付いた。普段ならそんなことはしない照瑠だが、目の前に現れた相手のあまりの気味悪さに、思わず体の方が先に動いてしまっていた。

「あれが、長谷川雪乃の命を啜っていた蠱毒だ……。もつとも、見た目が薄気味悪いだけで、こちら側の世界では大した力も使えないがな」

照瑠に腕をつかまれたまま、紅は毒虫を睨みつけながら言った。だが、それでも照瑠は紅の腕をつかんだまま、ともすればその後ろに隠れるような姿勢になる。

紅の言葉を信じるならば、今の相手はさして危険な存在ではない

のだろう。しかし、それでも姿形が気味悪いのは明らかで、あんな物を暗闇の中で直視できるほど照瑠の神経はタフではない。

薄暗い部屋の中、赤い体に黄緑色の斑模様を持った巨大なサソリ。その両手にあるハサミをガチガチと鳴らして威嚇しながら、口からはどろりとした粘液のようなものを滴らせている。でっぷりと太った腹は途中から大きく反るようにして曲がり、その先端についた毒針からも、紫色の毒液のような物が滲みだしていた。

「さつさと片付けろ、黒影。こいつの放つ靈気は、正直なところ臭くて敵わん」

目の前で醜悪な姿を晒している毒虫を横目に、紅は黒影に指示を出した。黒影の口の中から青白い炎が噴き出し、それは怒涛のような奔流となって虫に降り注ぐ。

あらゆる魔を滅する破魔の炎。暗闇を青白い閃光が走り、それは一瞬にして毒虫を包み込む。炎に飲み込まれた毒虫は抵抗することさえもできず、そのまま全身を焼き尽くされて消滅した。

「さて……。どうやら仕事は終わったようだな」

炎が消え去ったとき、そこには何も存在していなかった。かなり激しい炎だったのだが、天井はおろか床も壁も焦がしてはいない。黒影の吐く炎は、靈的な存在以外には効果がないようだった。

「ねえ。犬崎君……」

全てが終わったことを悟り、照瑠が遠慮がちに紅に尋ねた。雪乃が苦しんでいたときに見せた強気な態度は、今は完全になりを潜め

ている。

「なんだ、九条。お前も見た通り、蠱毒は黒影が完全に滅したぞ」

「うん、それはわかってる。だけど……どうして私の力、雪乃に効かなかったのかな……」

「そんなことか。それならば簡単な話だ。この女……長谷川雪乃は、耐霊体質の持ち主だからな」

耐霊体質。照瑠が聞いたこともない言葉を、紅はさも当たり前のように口にした。もつとも、彼にとつての常識は、世間一般における常識でもある。紅の言葉の意味がわからず、照瑠は思わず首をかしげた。

「耐霊体質って……それ、どういうこと？」

「相変わらず、何も知らないんだな。耐霊体質というやつは、霊媒体質の反対みたいなものだ。霊を感じる力が極めて弱く、それ故に霊的な存在からの干渉を受け難い。よく、心霊スポットなんかに行っても、まったく霊を見ないやつなどがいるだろう？ そういった人間は、耐霊体質のことが多い」

「そ、それじゃあ、私の力が雪乃に効かなかったのも……」

「お前の考えている通りだ。耐霊体質の人間に霊的な干渉を与えるには、その人間の霊脈に直接触れなくてはならない。それを探りださずに力を送ったところで、蓋も開けずに瓶の中に水を注ぎ込もうとするようなものだからな」



「そっか……。結局、私、犬崎君に助けられちゃったんだね……」

自分の力が雪乃に及ばなかった理由。それを聞かされて、照瑠はしょんぼりと頂垂れた。

向こう側の世界の常識に、照瑠はまだまだ疎いと言える。そんな状態で力を振るったところで、結果は最初からわかりきっていた。

一方的に相手に力を送り込むだけでは、時に拒絶されることもある。相手の中にある気の流れを感じ取り、その中にある霊脈を見つけて出すことで、照瑠の能力は初めて真の力となる。

「犬崎君。雪乃が耐霊体質だって……いつから気づいていたの？」

「最初からだ。そもそも、蠱毒に狙われた人間は、数カ月でやせ細って衰弱死する。それ以前に、精神の均衡を崩してしまう者も多い。だが……思い出しても見る。長谷川雪乃の夢に蠱毒が現れてから、いったいどれほど時間が経っているんだ？」

「確か、夢を見たのは半年以上前からだって言っていたわよね。だつたら……!!」

「そう言うことだ。何の力も持たない一般人が……最終的には放っておけば死ぬ運命にあったとはいえ……蠱毒の力に半年も耐え続けた。そこから俺は、こいつが耐霊体質だと判断したんだが……どうやら、こちらの判断は間違っていないかつたらしいな」

ベッドの上で寝ている雪乃の顔を覗きこむようにして、紅は照瑠にそう言った。照瑠はそれに何も答えず、気落ちした様子で座りこんでいる。

紅は、最初から全て知っていた。その上で、雪乃の身体から蠱毒を抜く最善の方法を考えていた。

今思えば、苦しむ雪乃に紅が手を貸さなかったのも、その体質に気づいていたからなのかもしれない。霊的な存在の干渉に耐える体質だからこそ、黒影を体内に送り込んで蠱毒を引きずり出すなどという荒療治を使ったかもしれないのだ。

耐霊体質といえど、蠱毒を夢の中から現実世界に引きずり出す際には痛みや苦しみを伴う。それを和らげてやれたのは、照瑠としては本望である。

だが、その行為でさえも、紅の力無しでは成功しなかった。全てを知って行動していた紅に対し、自分はその場の勢いで行動していたに過ぎない。そんな自分の浅はかさが、照瑠は今になって恨めしく思えてきた。

「それじゃあ、俺はもう行くぞ。いつまでも部屋にいと、家の人間に不信に思われるからな」

「い、行くって……。犬崎君、泊まっていけないの!？」

「馬鹿を言うな。女が三人も寝ている部屋で、平然とした顔をして眠れるか。それに、俺はこの家の人間に挨拶さえしていない。朝起きたときに見知らぬ男が部屋に寝ていたら、それこそ騒ぎになるぞ」

「そ、それはそうだけど……。もう夜中だし、外だって寒いのに……」

「問題ない。お前は俺が出たら、窓の鍵を閉めるのだけ忘れないでおけばいい」

仕事が終わった以上、長居などするつもりはない。そう言わんばかりの口調で、紅は雪乃の部屋の窓から出て行った。ベランダから中庭に降りたらしく、外から何やら乾いた音が聞こえてきた。

結局、自分は今回も傍観者にしかなれなかった。紅のいなくなった部屋で、照瑠の頭をそんな思いがよぎった。

自分の力で向こう側の世界に関わってしまった者を救いたい。天倉癒月が亡くなってから、そう思って修業をする決意をした。が、世の中そうそう甘くないらしく、今回は紅と自分の差を見せつけられただけで終わってしまった。

想い願うだけでは何もできない。気持ちだけあっても、力を操る術が伴わねば宝の持ち腐れである。そう、頭では理解していても、今の照瑠は自分の無力さが悔しくて仕方がなかった。

その日、雪乃の実家を離れ、市内の再び市内のホテルに戻っていた。

束の間の帰省も今日で終わり、再び多忙な日々がやってくる。ホテルでは夏樹や咲花といった Drive のメンバーに加え、プロデューサーの高槻も雪乃を待っている。東京に戻る前に、年末番組の最終打ち合わせを済ませておく予定なのだ。

ホテルの廊下を進んで行くと、その先には会議室のような部屋があった。本来であれば、どこぞの会社が研修などに使う場所なのだろうが、今日は雪乃達の貸し切りである。

数人のメンバーだけで打ち合わせするには広すぎる気もしたが、部屋が広くて文句を言うなど贅沢な話だ。

「おはようございます……」

遠慮がちに朝の挨拶をしながら、雪乃はそつと部屋の扉を開けた。打ち合わせの始まる時間には少し早かったが、それでもどこか控え目な態度になってしまつ。

「あつ、雪乃さん!!」

部屋の中にいたのは咲花だった。雪乃の姿を見るなり、椅子から立ち上がって駆け寄って来る。

「雪乃さん、無事に戻って来てくれたんですね……。咲花は嬉し

いですう……」

「ちょ、ちよつと！ 大袈裟だって、咲花」

「そんなことないですう！ クリスマスのコンサートのこともあったから、このまま雪乃さんが戻って来ないんじゃないかと思って……そう考えたら、夜も眠れなかったんですよお！！」

涙と鼻水でくしゃくしゃになった顔で、咲花が雪乃に抱きついてきた。今の顔をファンの人間が見たならば、きつと卒倒することだろう。

「ごめんね、咲花。心配掛けちゃったみたいだね」

「ううう……。だ、だいじょうぶでひゅ……。わらひは、ゆひのさんがもろってきてくれれば、それだけで嬉しいいれすう……」

もはや、呂律さえ完全に回っていない。雪乃は単に実家に帰っただけだったのだが、咲花の頭の中では永遠の別れのように話が作られていたようだ。とはいえ、雪乃とてT Driveを辞めるつもりはなかったたので、これは明らかに咲花の思い込みによるものである。

先日のコンサートでの失敗があったとはいえ、何をどう間違えれば雪乃が引退するような流れになってしまふのだろう。どうも、咲花は想像力が豊かな分、一度妙なことを考え出すと勝手に妄想が膨らんでしまつらしい。

泣いている咲花の頭を撫でながら、雪乃は長机の前に座っている夏樹に顔を向けた。

相変わらず、夏樹は真面目そうな顔をして目の前の紙の束に目を通している。恐らくは、年末に放送される特番の台本と言ったところだろう。

こちらの様子を気にもかけずに台本を読み漁る夏樹に、雪乃は少しだけ声をかけづらい雰囲気を感じてしまった。あの、コンサートの後の出来事もあっただけに、下手に声をかけて夏樹の神経を逆なでするのが怖かった。

「あの……夏樹ちゃん……？」

腫れ物に触れるような声で、雪乃は夏樹の名前を呼んだ。その声に、夏樹は無言のまま顔を上げて雪乃の方を見る。相変わらず舞台の裏では険しい顔をしていたが、その瞳に怒りの色は浮かんではいなかった。

「なにやってるの、雪乃。いつまでもそんなところに突っ立ってないで、さっさと座りなさいよ」

「う、うん……」

「もしかして、この前のことを気にしているの？ だったら、心配いらないわよ。私もあの時は、ちょっときつく言い過ぎたって思ったしね」

顔はいつものままだったが、その声は幾分か落ち着いていた。そんな夏樹の態度に安心したのか、雪乃も咲花を連れて彼女の隣にある椅子に腰を下ろす。

先日コンサートの後、雪乃は夏樹から一方的に叱責を受けた。あの時は混乱とショックで何も言えなかったが、今ならば彼女とも普通に話すことができる。

夏樹が雪乃に怒りを覚えたのは、単に舞台を台無しにされたからだけではないだろう。アイドルとして芸能会で生きてゆくには、中途半端なことはしたくない。そんな一際高いプロ意識が、雪乃への叱責に繋がったに違いない。

一度は失ってしまうかもしれないと思った自分の居場所。そこがまだ健在であったことは、純粹に嬉しく思う。夏樹も咲花も、なんだかんだで雪乃の帰りを待っていてくれた。この業界に関わったきっかけこそ違うものの、今では二人とも雪乃にとってのかけがえのない仲間だった。

再び戻ってきた忙しない日常。それは、一般の女子高生にとっては非日常であるものの、同時に雪乃が輝かしいスポットライトを浴びることのできる唯一の場所。

T Driveの一員として、これからも三人で歌い続けることができる。あの、奇妙な毒虫もいなくなり、来年からは安心して仕事に打ち込める。それは雪乃にとって喜ばしいことだったが、反面、彼女は犬崎紅に言われた言葉に、一抹の不安を抱いてもいた。

お前に今まで舞い込んできたアイドルとしての成功は、金輪際ばつたりと途絶えるかもしれない。

紅が雪乃に初めて会った際に告げた言葉である。彼によれば、雪

乃の今までの成功は蠱毒の呪いによる副産物のようなもの。雪乃の魂を蠱毒が蝕むことによつて得られた、仮初の至福でしかないという。

昨晚、自分の家で何があつたのか、雪乃はよくわからなかつた。ただ、虫に襲われる悪夢の中で、自分は巨大な犬のような影に助けられた。その後、なにかとても暖かいものに触れたような感じがして、そのままぐっすりと眠り込んでしまった。

照溜の話では、紅は雪乃の中にいた蠱毒を完全に被つたとのことだつた。それは雪乃が二度と再び毒虫の悪夢や幻覚を見ないことを意味していたが、同時に彼女が蠱毒の力による成功を得られなくなつたことも意味していた。

自分にアイドルらしさがないことくらい、雪乃自身が一番よく知っている。蠱毒がいなくなった今、自分の存在が、夏樹や咲花の足手まといになるのではないか。雪乃はそれが怖かつた。

「ねえ、夏樹ちゃん……。私、T・Driveの一員として、ちゃんと役に立てているのかな……？」

「どうしたのよ、急に。まさか、この前の舞台の一件で、おじけづいたんじゃないでしょうね？」

「そうじゃないの。でも……私は夏樹ちゃんや咲花みたいに、目立つて優れたところなんてないし……」

「ああ、はいはい。また、雪乃のネガティブキャンペーンの始まりつてわけね……。残念だけど、今はあなたの愚痴を聞いているような時間じゃないの。そろそろプロデューサーだって来る頃だし、今



の内に一通り台本に目を通しておきなさいよ」

「う、うん……。ごめんね、変なこと言って……」

本当のことなど、言えるはずもなかった。雪乃が今までアイドルとして活動を続けられたのは、呪いにも似た不思議な力のせいであることなど。そんな自分が、本物のアイドルとしての素養を持った、夏樹や咲花と一緒に仕事をする資格がないことなど。

二人に真実を告げられないまま、雪乃は夏樹から渡された台本を読むことに集中した。

今は少しでも余計なことを考えず、仕事に没頭したい。T・Driveという自分の居場所を失いたくないという気持ちだが、雪乃にそうさせていた。

それから数分後のことだろうか。程なくして高槻も部屋に現れ、四人は年末の特番に向けての打ち合わせを開始した。

特番と言っても、T・Driveの仕事内容が大幅に変わるわけではない。多少、何かの実況をするような場面はあったとしても、後は普通に持ち歌を歌って終わりとなる。

唯一の違いは、これが今までの収録とは異なる生放送ということだ。先日のコンサートのような失態は許されないが、蠱毒から解放されたはずの雪乃に、その心配はない。むしろ、彼女が心配しているのは、今後の仕事で仲間の足を引っ張らないかどうかだ。

台本の読み合わせをしながら細かいスケジュールを確認することで、打ち合わせは思ったよりも簡単に終了した。内容を確認した感

じでは、特に難しいことをやらされそうな心配はない。

この分なら、今のところは大丈夫だろうか。そう思いながら雪乃が隣を見ると、早くも咲花が長机の上にくったりと伸びてスライム化していた。打ち合わせが終わった後は、大抵の場合咲花はこうして伸びていることが多い。

「ふわあ〜……。やっぱり会議って疲れますう……………」

「なに言ってるのよ、咲花。プロデューサーが来てから、まだ一時間と少ししか経ってないじゃない」

「それでも長すぎますよお、夏樹さん。学校の授業だって、50分で終わって休み時間になるんですよ……………」

「中学校の授業と仕事の打ち合わせを同じにしないでよね。舞台上ではどれだけ歌っていても平気な顔しているくせに、どうして会議になるとこうなのよ」

いつにも増してだれている咲花の態度に、夏樹はややご立腹の様子だった。もっとも、咲花としても、本気で仕事に対してやる気がないわけではない。ただ、まだ中学生の彼女には、ほんの少しだけ周囲に甘えたい気持ちも残っているというだけだ。

夏樹にとって、仕事はあくまで真剣勝負。そんな彼女からすれば、咲花の今の行動でさえも許し難い。だが、夏樹が更に続けて何かを言うよりも先に、高槻が咲花の気持ちを汲んでそれを制した。

「夏樹もその辺にしておけよ。僕もそろそろ休憩を取った方がいいと思っただけ……………何か、その自販機で飲み物でも買ってこよう

か？」

「まあ……プロデューサーが、そう言うのでしたら……」

さすがの夏樹も、年長者には意見をすることがないようだった。

会議室を出ようと、高槻はパイプ椅子から腰を上げた。が、調度その時、彼が部屋を出るよりも先に、会議室の扉が開く音がした。

「やあ、君達。打ち合わせは順調かね？」

扉の向こうから姿を現したのは、社長の鴨上だった。T - Driveの応援に駆けつけて以来、どうやら彼もこちらに滞在していたようだ。

「社長。事務所の方は、大丈夫なんですか？」

「心配はいらんよ、高槻君。前にも言ったが、事務所の方は残っている社員だけでも十分に回せる程度の仕事しかない。それに、私だって、何もしないでこのホテルに留まっていたわけではないぞ」

「と、言いますと？」

「うむ。今日は、来年の仕事について、君たちに直々に伝えたいことがあって来たのだ。申し訳ないが、少し時間をいただけかね？」

高槻の顔を覗き込むようにして、鴨上が言った。相手に拒否権を与えない、妙に自身に溢れた顔だった。

「さて……。打ち合わせの最中に悪いが、今日は君達T - Drive

eに良い知らせを持ってきた。今後の芸能活動に関係する、とても重要な話だぞ」

夏樹、雪乃、咲花の三人を前に、鴨上は椅子に腰かけながら言った。T・Driveの三人は、そんな鴨上の顔にしつかりと目線を合わせている。社長から直々に話があるなど、これは相当に凄いことに違いない。

「最近のT・Driveの活躍は、業界の中でもかなり広く認められるようになってきた。それは、君達も感じていることだとは思っがね……」

「はい。ですが、私はここで満足するつもりはありません。もっと高みを目指して……いつかは、母を超える人間になりたいと思っています」

「ははは。夏樹君は、相変わらず真面目だな。実は、そんな夏樹君に、今日はこんな話が持ち上がっているんだよ」

そう言いながら、鴨上は鞆から企画書のようなものを取り出した。どうやら新年度から放送されるドラマの企画書らしく、その表紙には見たこともないタイトルが大きな字で印字されていた。

「夏樹君は、以前から女優の仕事もやってみたいと言っていただろう？ そんな君に、なんと新年度から始まる月曜ドラマの出演依頼が来ていてね。これは、その企画書だよ」

「げ、月曜ドラマって……！！ それ、本当なんですか、社長！？」

「こんなことで、嘘をついても仕方ないだろう。実際に放送される

のは4月からだが、知つての通り、ドラマの撮影は先行して撮り溜めをしておくものだからね。先方からは、早めの返事を催促されているが……受けて見るかね、夏樹君？」

「で、でも……そういったものは、実際はたくさんオーディションなどを通して配役を決めるものではないのですか？」

「うむ、普通はそうだ。しかし、今回はドラマの撮影を指揮する監督が、君のことをえらく気に入っているようだね。さすがに主演というわけではないが、それに近い待遇の役を回してもらえることになっているよ」

未だ信じられないという顔をしている夏樹に、鴨上はさも当たり前のようにして告げた。夏樹にしてみれば寝耳に水の話だったが、それでも断る理由はない。

夏樹が本当に目指したいもの。それは、母を越えるタレントとして、この芸能界の頂点に立つことである。今は一人のアイドルかもしれないが、いずれは女優、司会、その他様々な仕事を万能にこなすことのできる、トップスターになるのが夢なのだ。

T Driveの活動を踏み台と思ったことはないが、夏樹は今の状況に満足するつもりもなかった。

自分はもっと上を目指したい。親の七光などといわれずに、自分の力でトップに立ちたい。その気持ちだが、夏樹に鴨上の提案を断るという選択を与えなかった。

「社長……。そのお話、謹んでお受けさせていただきます」

「おお、やってくれるかね、夏樹君！ いやあ……これで我が社からも、とうとう月曜ドラマにタレントを出演させることができたか！！ 私としても、感無量だよ」

「そんなに煽てないください。まだ撮影だつて始まっていませんし、これからどうなるかもわからないんですから……」

「でも、やっぱり夏樹さんは凄いですう！ オーディションも無しに月曜ドラマに出られるなんて、普通じゃありませんよお！！」

大袈裟に手を叩きながら、雪乃の隣に座っている咲花が声を上げた。自分が選ばれたわけでもないというのに、当事者そっこのけで、はしゃいでいる。

「はああ……月曜ドラマか……。私もいつか、カッコイイ俳優さんと、らぶらぶなシーンをやってみたいですう……」

ぼんやりと天井の方を眺めながら、そんなことを呟く咲花。とろんとした目の奥では、恐らくイケメンの男性俳優とキスシーンを演じている自分の姿があるのだろう。ファンが見たら幻滅確定なしまりのない顔をしながら、早くも妄想の世界に突入していた。

「ちよつと、咲花。あなた、涎が出てるわよ」

見かねた雪乃が、咲花を突きながら声をかけた。その瞬間、まるで夢から覚めたようにして、咲花は現実世界へと舞い戻った。

「はっ……！？ ご、ごめんなさい、雪乃さん。私、また妄想してましたあ……」

「おやおや。咲花君も、ドラマの仕事に興味があるのかな？ それだったら、私の方から監督に口利きをしておけばよかったかな？」

冗談なのだろうが、鴨上がそんなことを口にした。さすがに恥ずかしくなったのか、咲花も肩を縮めてその場で丸くなった。

「まあ、咲花君が羨ましいと思うのも無理はないがね。そこで……そんな咲花君にも、私はちゃんと仕事を持って来たぞ」

「ええっ！！ 本当ですか！？」

「ああ、勿論だとも。もつとも、こちらはドラマの出演依頼ではなく、児童番組の司会だがね。小さな子ども達にもわかりやすく、元氣よく解説できる子が欲しいと言われたので、君を紹介しておいた。近々、本格的な仕事の話が来るだろうから、心の準備をしておきたまえ」

「はあい、わかりましたあ！！」

夏樹だけでなく、自分にも仕事が回ってきた。先ほどまで小さくなっていたことなど直ぐに忘れ、咲花は力強く片手を上げて鴨上に答えた。

今までは歌を歌うだけだったが、来年からは違った形でのテレビ出演もある。まだ年が明けたわけでもなかったが、この調子で行けば、来年のT Driveの仕事も安泰だ。

プロデューサーの高槻としても、自分の担当している娘達が活躍の場所を広げてくれることは素直に嬉しく思える。ただ、彼女達の可能性を切り開くような仕事を、社長に持ってきてもらってしまっ

たことだけは少々気まずくもあった。

「なんだか、申し訳ないですね、社長。本当だったら、彼女達の営業は僕がしなければならぬ仕事だというのに……」

「いや、構わんよ。高槻君は、今まで本当によく頑張ってくれたからね。今後も三人の支えとして、T Driveに関わってくれたまえ」

「ありがとうございます。ところで……雪乃なんですが、彼女に仕事は来ていないんですか？」

「うむ……。しかし、彼女は元より歌手志望だ。それに、その歌唱力は私も買っている部分がある。雪乃君には、今後も歌手としてトップを目指してもらえればそれでいい」

「そうですか。では、彼女が歌手として成功をつかめるよう、僕も一層頑張らなくてはいいけませんね」

雪乃は歌手として頂点を目指せばよい。そう思って何気なく言った高槻だったが、当の雪乃は何も口にしなかった。

(私の成功は、私自身の力じゃない……)

犬崎紅に言われた言葉が再び雪乃の脳裏を掠め、雪乃は沈んだ気持ちになった。

蠱毒がいなくなったことで、アイドルとしての栄光も失う恐れがある。認めたくない、考えたくもないことだったが、やはり現実は



残酷だ。

蠱毒を被ったその翌日に、夏樹と咲花だけに仕事が来る。そして、当の自分には何の仕事もやって来ない。これは今までの自分が、蠱毒による呪いの副産物で成功をつかんでいたという証拠なのだろうか。

本当は、夏樹や咲花が新しい世界に踏み出すことを祝福してやりたかった。しかし、今の雪乃は、そんなことを考えてやれるだけの余裕さえ持ち合わせていない。ただ、自分がT Driveとして活動してきた今までの思い出を否定されたような気がしてしまい、それが何よりも辛かった。

「あの……。私、ちょっと気分が悪いんで……。申し訳ありませんけど、一度席を外させてもらっても構いませんか？」

鴨上と高槻、それに夏樹や咲花にも断って、雪乃はそのまま会議室から外に出た。あのまま部屋に居続ければ、今に泣き出してしまいうそで怖かった。

誰もいない廊下を歩き、雪乃はそのまま洗面所へと足を運んだ。別に何か用があるわけでもなかったが、とにかく今は一人になりたい。そう思ってたことだった。

今は昼時で、ホテルの宿泊客もどこかへ出かけている者が多い。自分たちの他には、誰かに会うようなこともないだろう。

力の入らない様子で、雪乃はとぼとぼと洗面所に足を踏み入れた。舞台上で見せている笑顔はなく、顔は下に俯いたままだ。目線まで完全に下に落ち、もはや自分の足元しか見えていない。そんな雪乃が

目の前から歩いて来る人間に気がつかないことは、至極当然のことと言えた。

「あつ……!?!?」

気がついたときには遅かった。雪乃は洗面所に入るなり、今まさにそこから出ようとしていた相手と出会いがしらにぶつかってしまった。

「す、すみません!! 私……よく前を見ていなくて……」

「ちよつと、気をつけてよね……って、なんだ。あなた、長谷川さんじゃない」

目の前で、雪乃に見降ろすような視線を向けて来る背の高い少女。美人だが、どこかきつそうな面持ちをしたその相手は、雪乃も良く知っている人間だった。

「えつ……? 麻宮……さん?」

思いがけない相手に出会ったことで、雪乃はしばし目を点にさせて固まった。

麻宮星梨香。雪乃と同じ鴨上プロダクションに所属する、元アイドルのアイドル候補生。かつて、雪乃達がT Driveとしてデビューするよりも前に、先輩として活動していたこともある少女だった。

「長谷川さん……。あなた、こんなところで何しているの? 今は、打ち合わせの途中じゃないのかしら?」

「えっ……ま、まあ……。でも、どうして麻宮さんがここにいるんですか？ それに、私達の予定まで……」

「別にいいでしょ、そんなこと。同じ事務所に所属する者同士、相手の予定を知っていたって不思議じゃないじゃない」

どこか冷たく、突き放すような口調で星梨香は雪乃に言った。夏樹も厳しい物言いをするにはあるが、星梨香のそれは夏樹のものとは少し違う。相手に対する期待や尊敬などない、ともすれば敵意をむき出しにしているような言い方だった。

「そんなことよりも、長谷川さん。あなた、ネットのニュースに妙なことを書かれたんですって？」

「妙なこと……。それって……」

「とぼけないですよ。それとも、本当に知らないのかしら？ この前のステージであなたが退場したのは、あなたが裏で変な薬を使っていたからじゃないかって……昨日の朝一番の記事で叩かれていたわよ」

「そ、それは……」

追及とも取れる星梨香の言い方に、雪乃は何も言い返すことができなかった。

ネットニュースに根も葉もない噂を書き立てられたことは、雪乃も高槻の電話から知っていた。だが、それを星梨香が知っていたようとは、誰が予想しただろうか。いや、それ以前に、こんな場所で星

梨香に会うことになるなどと、雪乃は考えてもいなかった。

いったい、星梨香は何の理由があつて自分と同じホテルにいるのか。他の候補生達が東京に帰つたにも関わらず、星梨香だけがなぜ。

疑問は次から次へと湧いて来る。しかし、星梨香の顔を見る限り、それを尋ねられるような雰囲気ではない。そして、そんな雪乃の気持ちなどお構いなしに、星梨香は更に雪乃を見下したような態度で話を続けた。

「私、来年の一月に再デビューが決まったのよね。それも、今度はソロでの活動が」

「そうですね……。それは、おめでとございます……」

「だから、あなたにも少しは自覚を持ってもらいたいのよ。同じ事務所に所属しているアイドルが変な薬を使っているなんて噂されたら、こっちのイメージダウンになるじゃない」

「は、はい……。どうも、すみません……」

謝る必要など何も無い。自分には、何も疾しいところなどないはずだ。

それにも関わらず、雪乃はなぜか星梨香に頭を下げて謝ることしかできなかった。自身に満ち溢れ、新たな仕事に期待を膨らませている星梨香を前に、今の雪乃には何も言い返す言葉が見当たらない。

「まあ、せいぜいあなたも頑張ることね。私もこれから黒部さんと来年のことで話があるから。こんなところで油を売ってないで、さ

つさと会議室に戻った方がいいんじゃないかしら？ もっとも、あなたに戻る場所があればの話だけだね」

雪乃のことを鼻で笑いながら、星梨香は去り際に痛烈な一言を残していった。だが、今度も雪乃は何も言えず、ただ拳を震わせて立ちつくすしかない。

洗面所を後にした星梨香の足音が、徐々に遠ざかって行く音が聞こえてくる。その音を耳にしながら、雪乃は自分の目頭が徐々に熱くなるのを感じていた。

自分には、星梨香にあそこまで言われなければならない覚えはない。それなのに、あそこまで強烈な嫌味を言われて、何一つ言い返すことができなかった。星梨香の全身から出る圧倒的な自身に、完全に気持ちが押し任されてしまった。

こんなことで、自分はこれからもアイドル活動を続けて行くことができるのだろうか。不安は雪乃の中でどんどん大きくなり、その心はまさに押し潰れる寸前だ。

雪乃とて、順風満帆なアイドル生活を送ってきたわけではない。どうしても自信が持てず、辛い気持ちになることも多くあった。

それでも活動を続けられたのは、なんだかんだでT Driveとして仕事を成功させてきた経験が大きかった。舞台上で歌う前は不安でも、いざ上がって歌い終えた後の大歓声。そして、自分の名前を呼んでくれるファンの熱い声。そういった諸々の事柄に勇気づけられ、なんとかここまでやってきた。

しかし、その成功が蠱毒の呪力による副産物だと知ったとき、雪

乃の自信は完全に打ち砕かれてしまっていた。今までの成功は、決して自分が自分の力で手に入れたものではない。そう示されることで、雪乃は星梨香の理不尽な言葉にさえも言い返す術を失っていた。

(私……これから、どうしたらいいんだろう……)

ふと鏡を見ると、その中にいる自分が泣いていた。それを見てしまった雪乃は、とうとう洗面台に突っ伏すようにして泣き出してしまった。

悪夢を見なくなる代わりに、自分が失ってしまったもの。その大きさを考えると、今の現実に雪乃は耐えられそうに思えなかった。

照瑠や亜衣、それに紅には感謝している。夢が現実になったなどという下らない話を信じ、さらには蠱毒を退治することまでしてくれたのだから。

こと、照瑠に関しては、除霊の際の苦しみを和らげるために力を使ってくれたという。本人から聞いただけの話なので実感はなかったが、それでも雪乃は照瑠の優しさを純粋に嬉しく感じていた。

だが、その一方で、このままでは雪乃自身、T Driveという居場所を失ってしまう。それは即ち、雪乃が大好きな歌を歌うための場所と、共に歌う仲間を奪われるに等しいのだ。これでは仮に生きていても、心は完全に死んでいるも同じである。

結局、自分はどつすることが正しかったのか。答えがまったく見えないまま、雪乃はそつと顔を上げた。

「はぁ……。酷い顔……」

泣き腫らして赤くなった自分の顔を見て、雪乃は大きな溜息をつきながらそう言った。こんな顔では、会議室に戻ることも憚られる。涙で濡れたその顔は、とても現役のトップアイドルのものとは思えない。

もう、いつそのこと、芸能界から足を洗ってしまおうか。所詮、引っ込み思案な性格の自分には、この業界で生きることが無理だったのだ。このまま火乃澤町に帰り、普通の高校生に戻ってしまう。それができれば、どんなに楽なことだろう。

(これ以上、みんなに迷惑はかけられない……。私がいなくても、夏樹ちゃん達は一人でやっていけるだろうし……)

今日のこと、夏樹も咲花も新しい道を見つげるためのきっかけを得た。歌手としての仕事を続けなくとも、それこそT-Driveとして活動しなくても、彼女たちならやってゆけるかもしれない。先の星梨香ではないが、ソロで活動することも夢ではないはずだ。

自分はもう、夏樹や咲花にとって不要な存在なのかもしれない。プロデューサーに高槻にとっても、これからは単なるお荷物にしかならないのかもしれない。

本当は、これからも歌を歌い続けたかった。T-Driveの一人として、夏樹や咲花と一緒に頑張りたかった。が、今の状況を跳ね返してまで、アイドルを続けて行けるだけの自信が雪乃にはなかった。

「もう……私には無理だよ……。ごめんね、みんな……」

思わず口から出た、仲間への謝罪の言葉。誰もいないはずの洗面所に、雪乃の声が響いたときだった。

ガサツ……。

すぐ近くで、何かの動く音がした。思わずハツとした顔になり、雪乃は泣くのを止めて顔を上げた。

ガサツ……。

また、音がした。今度はもっと近く、もっとはつきりとした大きさまで。

「う、嘘……。これって……」

先日のコンサートで起きた、忌まわしい出来事の記憶が蘇る。舞台の上で次の曲のスタンバイに入っている際に、雪乃の目の前に現れたもの。あの、夢で雪乃を喰らい尽くそうとしていた、醜悪な姿の毒虫たち。それが現れたときの音だ。

照瑠の話では、雪乃の中にいた蠱毒は紅が完全に退治したのとどこだった。雪乃はその一部始終を見ていたわけではないが、少なくとも照瑠が気休めから嘘を言っていたとは思えない。

では、この奇妙な音の正体は何で、自分には何が起きているのだろうか。両手を鏡の前にかざしてみるが、この前のように服の隙間



から虫が出て来るような様子はない。素早く辺りを見回してみたものの、床に壁にも毒虫の姿は見当たらない。

ポタツ！

突然、何かが目の前に落下して、雪乃は思わず手で顔を覆いながら後ろに下がった。そして、床の上で転がっているものが目に入った瞬間、雪乃の顔が見る間に恐怖でひきつってゆく。

洗面所の床で、その醜く太った腹を剥き出しにして脚を震わせているもの。どす黒く濁ったような赤い甲殻に、黄緑色の斑を持つ不気味な身体。わき腹から出ている六本の脚を動かして、それは床の上でしきりにもがいていた。

間違いない。これは、あの夢に出て来た毒虫だ。夢の中で、もう一人の雪乃自身から溢れ出し、雪乃の身体を喰らい尽くさんと迫ってきた恐るべき虫。犬崎紅の言っていた、蠱毒の化身だ。

「ど、どうして……。なんで、この虫が出てくるの……」

蠱毒の本体は、紅が完璧に消滅させたはずだった。では、今目の前で脚をバタつかせてもがいているものは何なのか。

恐る恐る、雪乃は洗面所の天井へと顔を向ける。そして、そこに張り付いていたものが視界に入った瞬間に、今度は大声で悲鳴を上げた。

「い、いやあああつー！」

そこは、一面が隙間なく毒虫で覆い尽くされていた。互いに体を重ね、虫たちは尻尾を振りながらガサガサと這い回っている。ギチギチと、何かの噛み合うような嫌な音がして、虫は一斉に雪乃の方へと頭を向けた。

次の瞬間、天井に張り付いていた虫が一斉に雪乃目掛けて降ってきた。逃げ出す暇さえなく、雪乃は瞬く間にその体を虫に覆われる。どれほどあがいても、どれだけ振り払おうとしても、虫たちは次々に雪乃の身体に飛び移ってはその肌の上を這いずり回った。

「あ……あ……あ……」

もはや、声を上げることさえもできなかつた。

虫は雪乃の服の袖から中へと入り、彼女の服の中で動き回った。そればかりか、彼女の髪の間、さらには口の中にまで、隙間さえあればそこに大挙して入り込もうと押し寄せる。

蠱毒の見せるものは、所詮は幻覚に過ぎない。しかし、今の雪乃には、これが幻覚だとは到底思えなかつた。肌の上を虫の脚が動き回る感触は、どう考えても本物なのだ。

全身のあらゆる場所を蹂躪されて、雪乃はとうとう涙を流しながら意識を失った。洗面所の床に乾いた音が響いたが、それでも虫たちは雪乃の身体から離れようとはしない。気を失って倒れてしまった雪乃の上で、まるで砂糖に群がる蟻のようにして、不気味な山を作っていた。

気がつく、そこには白い天井が広がっていた。

上にかけていた布団を跳ね飛ばし、雪乃は勢いよく起き上がる。思わず自分の体のあちこちを弄ってみたが、とくに何かがあるようなこともなかった。

蠱毒を被ったにも関わらず、あの虫たちは再び雪乃の前に現れた。夢に出てきたときとまったく変わらぬ姿で、雪乃の身体を隅々まで食いつくそうと襲いかかってきた。

犬崎紅の話では、蠱毒を被うことで雪乃のアイドルとしての成功は失われるとのことだった。初めは半信半疑だったが、今ではそれも本当のことではないかと思っている。今日の社長から言われた言葉が、それを何よりも物語っているからだ。

だが、それではなぜ今になって、蠱毒は再び雪乃の前に現れたのか。悪夢から解放されたと思っていたが、それは単なる気休めにしか過ぎなかったというのだろうか。

自分の身に何が起きているのか、もう雪乃にも理解できなかった。誰に話しても、何をやっても、あの毒虫の群れからは逃げられない。絶望に近い感情が、雪乃の中で徐々に大きくなっていった。

「もういや……。どうして私ばかり、こんな目に遭わなくちゃいけないの……」

両腕で胸元を覆うようにして、雪乃はひたすら周囲の様子に気を

配りながら震えていた。あの毒虫達が、いつまた目の前に現れるかわからない。そのことが、雪乃の精神を過剰なまでに過敏なものに変えてゆく。

突然、ドアの開く音がして、雪乃は思わず肩を震わせた。音のする方を見ると、そこにはプロデューサーである高槻の姿があった。

「雪乃。気がついたみたいだね」

「あつ……プロデューサー……」

高槻の姿を見て、雪乃の口から安堵の溜息が漏れる。見知った顔が目の前に現れたことで、緊張が急速に解けてゆくような感じがした。

「あの、プロデューサー。私……」

「洗面所で倒れていた君を夏樹と咲花が見つけて、僕がここへ運んで来たんだ。まだ、あまり無理をしない方がいいよ」

「えっ……。それじゃあ、ここは……」

「僕が泊まっているホテルの部屋さ。それよりも、雪乃。いったい、君に何があつたんだい？」

ベッドの前で中腰になり、高槻は雪乃に視線を合わせた。仕事をする上での形式的なものではなく、あくまで一人の人間として雪乃を心配している。そんな目だった。

このまま高槻に、本当のことを話すべきなのだろうか。雪乃の中

に、一抹の迷いが生まれていた。

確かに高槻は、プロデューサーとして今まで雪乃達を支えてきてくれた男だ。しかし、それでも彼は、あくまで普通の人間である。幽霊がどうした、呪いがどうしたなどという話をして、一笑に付されて終わってしまうかもしれない。

思い切りがつかないまま、時間だけが過ぎてゆく。そんな雪乃の変化を感じ取ったのか、高槻は再雪乃の肩にそつと手を置いて話しかけた。

「雪乃……。君は、昨日の朝に僕が電話をしたこと、覚えているかい？」

「えっ……」

「あの時は、確かに僕も気が動転していて失礼なことを言ったと思う。だけど、あえてもう一度聞くとよ。雪乃……。君、最近になって、変な人と関わりを持ったようなことはないかい？ その……。変な薬を勧められたり……。そういったことは、なかったのか？」

「プロデューサー……。それ、やっぱり私のことを疑っているんですか……。プロデューサーも、私が麻薬をやっているって……。本気でそう思っているんですか！？」

「いや、そうじゃないよ。ただ、僕は君のことが心配なだけだ。自分で言うのもあれだけど……。この業界は、外から見ている以上に汚いものが溢れているってことは、雪乃だって知っているだろう？」

雪乃の肩に置いた手をそつと離し、高槻は立ち上がった。雪乃は

何も答えなかったが、それでも高槻は雪乃に向かって話を続けた。それはどこか、自分の懺悔を聞いて欲しいともいえるような話し方だった。

「なあ、雪乃。僕がこの業界に入った理由、君は知っているかい？」

「プロデューサーが、芸能界で仕事をしようと思った理由……ですか？ いえ、私は知りません」

「まあ、そうだろうね。僕自身、こんなことを誰かに語ることは早くないんだ。だけど、今日はあえて話をさせてもらうよ。僕がどういう想いでT Driveに関わってきたのか……それを、雪乃にも知っておいてもらいたいからね」

雪乃に背を向けたまま歩き、高槻は窓の近くまで来て足を止めた。眼下にはホテルの中庭が広がっており、空からはちらちらと雪が降り始めていた。

「僕は、最初からこの業界で仕事をしようと思っていたわけじゃないんだ。ただ、僕の父さんは昔から芸能界で仕事をしていてね。今の僕と同じように、アイドルのマネージャーをやっていたんだよ」

「そうだったんですか。それじゃあプロデューサーは、お父様の後を継ぐ形でお仕事を？」

「まあ、そんなところだね。もっとも、僕だってそこまで真剣に後を継ごうなんて思っていたわけじゃない。大学を卒業してもまともに就職が決まらなくて、父さんのコネで業界に潜りこんだんだ。当時は鴨上プロも今以上に弱小な会社だったから、コネで入ったと言っても大したことはないんだけどね」

どこか自嘲気味な笑みを浮かべて、高槻は続けた。いつもの彼からは想像もつかない、どこか影を帯びて冷え切ったような表情だった。

「鴨上プロに就職が決まっても、僕自身は特に変わらなかつた。所詮はコネで入っただけの社員だから、当然のことながら使い物になんてならない。いきなりアイドルのマネージメントやプロデューサーなんてできるはずもなく、事務作業とトイレ掃除が日課だったよ」

「そんな……。プロデューサーが事務作業とトイレ掃除しかしないなんて……。そんなこと、信じられません」

「確かに、今の僕しか知らない雪乃達から見れば、そうなのかもしれないね。でも、当時の僕は本当にそんなものだったよ。もっとも、それから少しして起きたある事件がきっかけで、真剣に仕事に関わろうと思っただけだよ」

「ある事件……。？ それ、何なんですか？」

「雪乃もこの業界で仕事をしているなら、聞いたことくらいはあるだろう。日高実<sup>ひだかみのり</sup>……。君達がデビューするよりも前に、この業界でトップ街道をまっしぐらに進んでいた女の子さ。でも、彼女は最終的に覚醒剤の所持が発覚して、この業界を去ったんだ。そのときに彼女のマネージメントをしていたのが、他でもない僕の父さんなんだよ」

「えっ……。そ、それって……。！？」

それ以上は、雪乃は何も言えなかつた。

日高実の名前は、雪乃も聞いたことがある。数年前、雪乃がまだ地方のご当地アイドル活動を始めたばかりの頃に、流星のように現れた若き期待の新星。

彼女の歌を聞いたとき、雪乃は自分もあのような大舞台で歌ってみたいと夢に見たものだった。もっとも、その後に報道された覚醒剤所持のニュースを聞いてからは、彼女に対しては幻滅しか抱かなかったが。

そんな日高実のマネージメントを、他でもない高槻の父がやっていた。それは雪乃にとって、まさに衝撃の事実である。あの、いつも気さくな笑顔を絶やさないう高槻にも、人には知られたくないような裏があつたということだ。

「日高実が逮捕されたとき、父さんは彼女に対して何もしなかった。事務所も一緒になってシラを切り通して、責任の全てを彼女一人に押し付けてしまったんだ」

憂いを込めた表情のまま、高槻は雪乃の方を向いて言った。

「真実はどうだか知らないけど、本当はプロダクションの側だつて知っていたはずなんだ。日高実が、自分だけで覚醒剤なんて手に入られるはずがない。不良芸人や暴力団、それ以外にもきな臭い連中が彼女の周りにいたことに、誰も気がつかないなんて方がおかしいわ」

「そんな……。それじゃあ日高さんは、プロダクションに見捨てられて……」



「ああ、そつだよ。本来は、マネージャーである父さんが、日高実を守ってやらねばいけなかったにも関わらず……自分の監督不行届き棚に上げて、プロダクションと共に保身に走ったんだ。そんな父さんを、僕は許せない……」

最後の方は、高槻の言葉が少し震えていた。その顔は、じつと唇を噛んだまま、どこか苦痛に耐えているようにも思われた。

日高実が覚醒剤に手を出した理由。それは雪乃にもわからない。だが、それでも雪乃は今になって、かつては幻滅した彼女に僅かばかりの同情心を抱きつつあった。

T Driveとして活動を始めて以来、この世界が綺麗事だけで成り立っていないということは何度も思い知らされた。その際、周りに自分を支えてくれる人間がいたからこそ、その辛さにも耐えられた。

恐らく、日高実は、周りに頼る者が誰もいなかったのだろう。プロダクションもマネージャーも、自分のことを単なる金づるとしてしか考えてくれない。そういった孤独が彼女の心を徐々に蝕み、最終的には麻薬に走ることでしか、辛さを忘れられなくしてしまったのではないだろうか。

「結局、日高実はその事件がきっかけで、二度と再び芸能界で仕事をすることはできなくなった。それ以前に、麻薬でボロボロになった身体を治すだけでも一苦労なはずだけど……父さん達は、そんな彼女が社会復帰するための支援さえしてやらずに、ゴミのように日高実を捨てたんだ」

「可哀想ですね、それ……。確かに麻薬に手を出したのは悪いこと

ですけど……それでも、日高さんが全ての悪の元凶みたいに扱われるのは、やっぱり間違っている気がします」

「そうだろう。だから、その時から僕は決意したのさ。周りからどんなに馬鹿にされようとも、古臭い考えだと罵られようとも、最後まで自分の担当するアイドルを裏切るようなことだけはしないってね」

「プロデューサー……」

「もう一度聞くよ、雪乃。僕には君達を、最後まで守る義務がある。だからこそ、本当のことを教えて欲しい。君は本当に、変な薬には手を出していないんだね？ 妙な連中とつき合って、そういった類の物を貰ったこともないんだね？」

ゆっくりと念を押すようにして、高槻は雪乃のことを真っ直ぐに見て言った。その瞳は、一点の曇りもない真剣なものだ。雪乃を信じていないわけではなく、むしろ、どんな答えが返って来ても受け止める。そんな覚悟を決めた者の持つ瞳だった。

「あの……こんなこと言って、信じてもらえるとは思えないんですけど……」

あんな話まで聞かされて、これ以上は隠しておけるはずもない。そう思った雪乃は、震える声で自分の身に起きたおぞましい体験を語りだした。

先ほどまでは、高槻にも笑い飛ばされると思っていた蠱毒の話。だが、そんな話でさえも、今は恐れることなく話すことができる。

高槻は、最後まで雪乃の身を案じていた。だからこそ、昨日の朝早くから電話で彼女の安否を確認してきたのだ。それは決して保身から来る気持ちではなく、ただ純粹に自分の担当するアイドルを守りたいという考えからだ。

仮に、あそこで雪乃が麻薬を使ったことがあると言っても、高槻は決して彼女を裏切るようなことはしなかったはずだ。罪は罪として清算させながらも、同時に彼女の社会復帰を最後まで信じて応援してくれる。高槻とは、そういう人間である。

相手を信じていなかったのは、高槻ではなく雪乃自身。それがわかったとき、雪乃は恥ずかしいと思うと同時に、改めて目の前にいる男の大きさを感じていた。

高槻であれば、信じてくれる。例え雪乃の口から出た言葉が荒唐無稽なオカルト話であったとしても、最後まで何も言わずに聞いてくれる。

一度そう思ってしまったら、後は簡単だった。雪乃はベッドの上で体を起こしたまま、今までに自分の身に起きたことについて、少しずつ高槻に語り始めた。

誰もいないホテルの廊下を、麻宮星梨香は独り歩いていた。彼女のいるのは、先ほどT Driveの面々が会議をしていた部屋のある階ではない。普通の宿泊客が泊まる、多くの客室を抱えた階だった。

廊下に響く自分の足音を横耳に、星梨香は一番奥にある部屋の扉の前で足を止めた。手にしたカードキーでロックを解除して、重たい金属性の扉に力を込めて押す。

「ただいま。戻ったわよ、黒部さん」

扉の向こう側で待っていたのは、他でもない黒部だった。以前、彼女がアイドルとして活動していた頃に、プロデューサーとして関わったことのある男。そして、その関係は星梨香が候補生に落ちた今も続いている。

「やあ、星梨香。どうやら下で、何かゴタゴタがあったようだね」

「別に大したことじゃないわ。T Driveの一人がトイレで倒れたって話だったけど……まあ、興味はないわね」

「相変わらず、他のアイドルには手厳しいな。俺が言うのもなんだが、あいつらだって同じ事務所に所属している人間だぞ？」

「そんなの関係ないわよ。私は自分がトップに立てればそれでいいの。それ以外のことに、関心はないもの」

大袈裟に髪をかき上げる仕草をして、星梨香は部屋にあるソファに腰を下ろした。傍から見れば高慢そのものだったが、黒部は何ら気にしていない様子だった。

「それより星梨香。来年には君のソロデビューが決まったそうだが……担当の方は、どういう話になっているんだ？」

「そんなの決まっているじゃない。黒部さん以外の担当なんて、私はお断りよ。もしも社長が他の人を担当につけるようなら、直談判してやるつもりだし」

「なるほどな。でも、それを聞いて俺も嬉しいよ。今まで君に、色々注ぎ込んできた甲斐があるってもものさ」

「当然でしょ。私には黒部さんしかいない。それは昔から、今もずっと変わらないはずなもの」

そう言いながら、星梨香はそっと立ち上がって黒部の方に歩み寄った。そのまま体を斜めに倒し、覆い被さるようにして黒部に体重を預ける。黒部はそれを受け止めると、躊躇うことなく星梨香の腰に手を回して彼女を抱いた。

互に見つめ合ったまま、二人は徐々に互いの顔を近づけてゆく。そのまま流れるようにして唇を重ねると、本能のままに相手を求めて舌を絡ませた。

アイドルと担当プロデューサーが、互いに仕事の関係以上の関係となる。それが何を意味するのか、星梨香や黒部が知らないはずもない。

だが、それでも二人は業界のモラルよりも、互いに男と女の間になることを望んだ。特に星梨香に至っては、自分の隙間を埋めるようにして黒部を求めることが多かった。

長い長い口づけを交わした後、星梨香は甘くとろけるような瞳を黒部に向けた。普段の気丈な彼女からは想像もできない、妙に艶っぽい眼差しだった。

「ねえ、黒部さん……。今日は、黒部さんの部屋に泊まったら駄目かしら……?」

「残念だけど、それは難しいんじゃないか? 俺と君の関係は、社長だって知らないんだ。再デビューが決まった矢先にスキャンダルつてのは、さすがにマズイと思うけど?」

「うふふ……。口ではそんなこと言いながら、本当は私と一緒にいたいと思っっているくせに……」

「そうだな。ただ、やっぱり夜にこっさり会うのは何かと問題がある。だから……。今、ここで君を抱いてしまおうか。幸い、社長も高槻のやつも、今は長谷川雪乃の看病で忙しい頃だろうしね」

「もう、ムードないんだから……。でも、そういうところも嫌いじゃないわよ、黒部さん」

はあっ、という音と共に甘い息を吐き出しながら、星梨香は再び黒部の唇を求めた。口ではムードがないなどと言いながらも、一度相手を求めると、全てが終わるまで満足できなくなるのは星梨香も同じだ。

芸能会は、決して華やかな面だけを持つ世界ではない。むしろテレビの裏側では、様々な人間のどす黒い欲望が渦巻いている修羅場のような場所なのだ。

そんな業界の中において、たった一人で頑張り続けること。それができる者がいるのであれば、是非とも御目にかかりたいと星梨香は思った。

人は、その心のどこかで、自分を支えてくれる何かを欲しているものだ。時にそれは家族であり、仲間であり、恋人であり……そして、今の星梨香にとっては黒部だったというだけである。

自分もつと輝きたい。容姿も歌唱力も、それにアイドルとしての素養も、自分がT Driveの面々に劣っている部分は一つもないはずだ。麻宮星梨香はこんな場所で、いつまでも燦っているアイドルではない。

T Driveの三人がデビューしてからというものの、星梨香は反対に苦汁を舐めさせられることの方が多かった。その鬱憤を晴らすためにも、今まで辛い稽古に耐え続けてもきた。それは一重に、黒部の支えがあったからこそだ。

汚い大人の事情が渦巻く芸能界において、迂闊に他人を信じることは危険である。それは、同じ事務所の人間を相手にしたとて変わらない。所属している事務所が同じでも、下手に相手に気を許すわけにはいかないのである。それが、麻宮星梨香がこの業界で学んだ処世術だった。

周りの誰も信じられず、孤独な戦いを続けるしかない世界。その孤独を埋めるために、星梨香は黒部のことを求めた。一人になつてしまふ恐怖と戦うためには、公私を越えて自分の心の隙間を埋めてくれる人間が欲しかった。

横長のソファに倒れ込むようにして体を預け、黒部と星梨香は互いを求めて抱き合った。時刻はまだ夕方にもなっていないが、二人だけの空間において、そんなことは些細な問題にさえもならなかった。

く 六ノ刻 妖蟲 く

「ふん……。俺の仕事にケチをつけて来たのは、お前達が初めてだ」

九条神社の社務所にある一室で、犬崎紅はそう言った。

今、彼の目の前にいるのは、雪乃と高槻の二人である。なんでも、紅によって蠱毒を抜つたにも関わらず、雪乃の前に再び毒虫の群れが現れたとのことらしい。その知らせを嶋本亜衣から受けた九条照瑠によつて、紅はここまで呼び出されたのである。

「お前に憑いていた蠱毒は、確かに俺の黒影が滅したはずだ。それは、九条や嶋本からも聞いているだろう？」

「はい……。でも、あの虫たちは、また私の前に現れたんです。会議で夏樹ちゃんや咲花にだけ新しく仕事が来たことが伝えられて……。それで、ちよつと辛くなつて洗面所に行ったとき、その天井から私の上に降つて来たんです！」

ホテルの洗面所で起きたことを思い出し、雪乃は震えながらも声を荒げて言った。紅のことを信用していないわけではないが、あの毒虫達が再び雪乃の前に現れたのも事実。それがある以上、雪乃にはまだ悪夢が終わつたとは言い切れない部分がある。

一度は抜つたにも関わらず、連中は再び雪乃の前に姿を現した。この事実が意味するところはいつたい何か。当事者である雪乃は勿論、これには紅も首をかしげざるを得ない。誰に何と言われようと、雪乃に憑いていた蠱毒は確かに黒影の炎で滅したはずなのだ。



「仮に、お前の目の前に現れたものも蠱毒なのだとしたら……」

慎重に言葉を選びながら、紅は雪乃に向かって続けた。

「それは、お前を恨む誰かが再び呪詛を仕掛けたということになる。あの後、誰かから何かを貰ったり、家に何かを送られてきたりしたことはないか？」

「別に、何もありません。今日だって、手紙の一枚だって貰ってないくらいなんですよ」

「ならば、東京のアパートの方に送りつけたか……？ いや、しかし、蠱毒は本人が直接受け取らなければ……本人が持ち主として存在を認めなければ、その効果を真に発揮しないはずだ……」

珍しく難しい顔をしたまま、紅は胸の前で腕を組んで考え込んだ。相手の正体がわからない。こんなことは、紅にも初めてだった。

「ねえ、君。ちょっといいかな？」

先ほどから雪乃の横で聞いていた高槻が、たまりかねた様子で紅に尋ねた。

「君、さっきから呪いがどうのって話をしているけど……もしかして、霊能者か何かなのかい？」

「まあ、そういうところだな。もっとも、俺はテレビに出ている霊能者なんかとは違って、もっとスレた人間だが」

「でも、霊能者には違いないんだろう。だったら、一つだけ言わせ

てくれ」

普通の人間であれば、彼の持つ血のように赤い瞳に睨まれただけで、物怖じして何も言えなくなってしまうだろう。それにも関わらず、高槻は一步も引かない意思を込めた言い方で口にした。

「君が妙な話で雪乃を惑わそうとしているのなら、僕は君から雪乃を守らなければならない。新興宗教に霊感商法……。芸能界には、そういった類の話を持ちかけて、他人を食い物にするような連中もいるからね」

「なるほど。そう思うなら、とつとつその女を連れて帰ればいい。言っておくが、俺はあんな紛い物の力で人を惑わすような連中と一緒ににされるのは、この上なく不愉快に感じるんでな」

「僕からすれば、どれも同じようなものだよ。雪乃が苦しんでいる原因が君にあるなら、僕は君から雪乃を守る義務がある」

互いに一步も引かないまま、紅と高槻は睨み合った。相変わらず紅は肉食獣のように鋭い視線を送っていたが、高槻も負けてはいない。これ以上、紅が雪乃を不安がらせるようなことを口にすれば、即座に彼を殴り飛ばさん勢いである。

長谷川雪乃を毒虫の悪夢から救いたい。それは紅も高槻も同じだったが、二人の考えは極端なまでに違っていた。

確かに高槻は、雪乃の話を聞いて九条神社まで足を運んだ。が、それはなにも、高槻が心靈現象の類を信じていたからではない。

高槻が心配していたのは、むしろ雪乃が妙な霊能力者に引っつか

り、靈感商法紛いのやり方で高額な請求をされるのではないかということだった。雪乃の弱みに付け込んで、詐欺を働こうと近づいた者がいるのではないかと勘繰ったのだ。

もつとも、霊の存在を信じていない一般人にとって、これは実に自然な考えだった。事件の当事者である雪乃や、今までに多くの心霊事件に遭遇してきた照瑠とは違い、高槻はあくまで一般的な常識を持った大人の男である。

このまま雪乃を苦しめてなるものか。そう思っただけで紅と対峙する高槻と、あくまで退魔師として意見を述べる紅。お互いに平行線を辿る争いになると思われたが、それを制したのは意外にも、紅の横で話を聞いていた照瑠だった。

「ちょっと、犬崎君！ あなた……まさか、このまま雪乃を返すつもりじゃないでしょうね！？」

「当然だ。だが、この女のプロデューサーとやらは、端からこちらを疑っている。大方、長谷川雪乃の話聞いて、俺にあらぬ誤解を向けているんだろうが……とにかく、このままでは動こうにも動けないことは確かだ」

「そんなこと言ってる場合！？ 除霊に失敗したんだったら、素直にそれを認めなさいよ。その上で、呪いを仕掛けた人間を探し出して被害を食い止めるとか……そういう話をするべきなんじゃないの！？」

あくまで正論しか述べない紅に、照瑠は少し苛立った様子で叫んだ。

紅の言っていることは、確かに正しい。高槻にしても、普通の人間が靈的なものの存在を信じないことなどは当然だ。

だが、それで雪乃が抱えている問題を放置してよいかといえば、そういうことでもないだろう。現に今も、雪乃は蠱毒の影に怯え、最後の頼みの綱としてこちらを頼ってきたかもしれないのだから。

この事件には、向こう側の世界の存在が関わっている。照瑠も雪乃の部屋で紅が蠱毒を抜く瞬間を見ていたのだから、それは間違いない。

ならば、一度は紅によって退治された蠱毒が再び現れた原因はなんだろう。目下、解決すべき問題はそこだった。

「ねえ、雪乃。こんな質問をするのも変なことかもしれないけど……あなた、自分を呪うような人間に心当たりはない？ あなたのことを恨んでいたり、妬んでいたり……そんな人、身の回りにいないかな？」

「えっ……。でも、そんなのわからないよ。こんな仕事してるくらいだから、嫉妬されることだって普通にあるだろうし……」

「もつとよく考えて。人から恨まれるってことは、あまり考えたくないことかもしれないけど……逆恨みの線まで考えないと、犯人はわからないわよ」

「逆恨み、か……。そう言えば……」

雪乃の脳裏に、今日の洗面所であったことが思い起こされた。

あの時、偶然にも自分の目の前に現れた麻宮星梨香。一度はアイドルとしてデビューを果たしながら、再び候補生に落ちて苦汁を舐めさせ続けられた少女。彼女であれば、T Drive に対して逆恨みのような感情を抱いても不思議ではない。

「一応、心当たりはあるかな。候補生の中には、私達に敵対心剥き出しのライバル感情を持っている人もいるみたいだし……」

「候補生か……。それ、名前のわかっている人かしら？」

「うん。あまり仲良くはないけど、名前だけなら……。麻宮星梨香っていう人で、私達より前に一時的にデビューしていたこともあるの。でも、相方の人が心身衰弱になったとかで、今ではユニットも解散して候補生に戻っているわ」

「元アイドルで、候補生落ちした人間か……。確かに、怪しいわね」

犬崎紅の話によれば、蠱毒は呪いをかけたい対象に送りつけることで意味を成す呪具だ。長谷川雪乃を陥れるのであれば、必然的に彼女に近づける人物でなければ不可能ということになる。

狂信的なファンや一部の一般人からの嫉妬も考えたが、そもそも芸能人に対する贈答品など、事前にプロダクションのチェックが入るのが常だ。雪乃のプロデューサー兼マネージャーである高槻がよほどずぼらな仕事でもしていない限り、雪乃には剃刀入りレターの一枚だって届かないはずなのである。

やはり、雪乃に呪いをかけた本人は、雪乃の知っている人間の中にいる。あまり考えたくないことではあったが、可能性としてはこれが一番高かった。雪乃の話からすると、麻宮星梨香が雪乃に呪い

を仕掛けた可能性が一番高い。

呪いをかけた本人を見つけ出せば、これ以上、雪乃に悪夢を見せずに済むかもしれない。そう思い、さらに雪乃に話を聞こうとした照瑠だったが、それに割り込んだのは高槻だった。

「いいかげんにしてくれないか、君達。さっきから聞いていれば、呪いがどうの、除霊がどうのと……。雪乃に言われてここまで来てみたけど、僕にはやはり信じられない。それに、仮に君達の言っている話が本当だったとしても、君達みたいな高校生に、いったい何ができるっていうんだい？」

「そんな……。確かに、こんな話を直ぐに信じて欲しいって方が無理なのはわかりますけど……」

「だったら、悪いけど金輪際、雪乃に関わらないで貰えないかな。彼女はいま、原因不明の悪夢で苦しんでいるんだ。そこに霊だのなんだのと、余計な話をして怖がらせたくない」

「でも……。そんなこと言っていたら、悪夢の原因を突き止めることはできないんですよ!？」

「それなら問題ない。雪乃には、年末のカウントダウン特番まで、こっちで休んでいてもらえるように手配したからね。余計なストレスから解放されれば、雪乃も落ち着くだろうし」

「余計なストレスって……。あの虫は、そんな簡単に消えるものじゃ……!！」

雪乃の見る悪夢は、明らかに向こう側の世界の存在が原因である。

それがわかつていられるにも関わらず、照瑠には高槻にそれを証明するだけの術がない。

自分には、確かに向こう側の世界に通じる力がある。しかし、その力を持つているだけでは、目の前にいる一人の人間にさえも話を信じさせることができない。そんな自分の無力さが、照瑠にはなんと歯痒く、また悔しく思えた。

「もういい、九条。これ以上は、何を言っても無駄だ」

なおも高槻に食い下がろうとする照瑠を、紅が静かに止めた。照瑠は納得のいかない顔をして紅を睨んだが、やはり言い返す言葉が見当たらなかった。

形だけの挨拶を済ませ、雪乃と高槻は九条神社を後にした。最後に雪乃は照瑠に向かって申し訳なさそうにして頭を下げたが、照瑠の心は晴れなかった。

このままでは、雪乃がああ毒虫に食いつくされてしまう。それがわかっていながら、照瑠には雪乃を助ける術が見当たらない。呪いを仕掛けた犯人を探すことも、高槻に向こう側の世界の話信じさせることも、なにもできないまま終わってしまった。

なんともやりきれない気持ちで、照瑠は部屋に敷いてあった座布団の上に無造作に腰かけた。横では相変わらず、紅が険しい目つきをして正面を睨んでいる。威嚇するような顔つきではあったものの、紅は紅で何かを考えているのだということは照瑠にもわかった。

「ねえ、犬崎君。これから、どうするつもりなの？」

「さあな。だが、このまま放っておいたなら、長谷川雪乃の命が失われるのも時間の問題だ。いくら耐霊体質とはいえ、向こう側の世界の連中の攻撃が効かないわけじゃない。これ以上、今の状態で霊的な攻撃を受け続けることは、あの女の寿命をそれだけ縮めることになる」

「だったら、早く追いかけてなんとかしないと!!」

「まあ、そう焦るな。相手の正体が見えていない以上、下手に動いても無駄足になるだけだ」

逸る照瑠を他所に、紅はあくまで落ち着き払った様子だった。そのまま頭の上で腕を組むと、重ねた座布団の上に頭を乗せて横になる。一見して眠っているようにも思えたが、緊張した空気までは解き放っていなかった。

(もう一度、根本的な部分から考えてみるか……)

長谷川雪乃の前に再び現れた蠱毒。その正体を探るためには、一度先入観を捨てて考える必要がある。

そもそも、第一に問題となるのは、彼女の前に現れたのが本当に蠱毒だったのかということだ。だが、これは恐らく間違いはない。あの日、雪乃の家を訪れた際に被ったものは、紛れもなく蠱毒の特徴を兼ね備えたそれだった。

では、一度被った蠱毒が再び雪乃の前に現れた理由は何か。一番に思いつくのは除霊の失敗だが、それは考えられないことだった。

蠱毒を夢の世界から引きずり出し、黒影の吐いた炎で焼く瞬間。



それは紅も自身の目で確認している。蠱毒が逃げ去った様子もなく、あれは破魔の炎で完全に焼き尽くされ無に帰したはずだ。

（あの虫は、確かに黒影が倒したはずだ。ならば、新たに蠱毒が長谷川雪乃のところを送りつけられたのか？）

術を破られたことに気づいた術者が、再び雪乃に蠱毒を送る。それは考えられないことではなかったが、それでも紅はまだ納得がいかない様子だった。

そもそも、まずはこれだけの短期間で、新しい蠱毒を用意することが不可能なのだ。

紅の知る限り、蠱毒とは毒を持った生物を壺に詰め、それを土中に埋めて互いに共食いをさせることで完成させる。つまり、どうしても作るのに時間がかかり、失ったからといって直ぐに代わりを用意できるようなものではない。

術が破られた時に備えてスペアを用意するにしても、それはあまりにもリスクの高過ぎる方法だ。万が一のときに備えてスペアを所持している間、そのスペアは当然のことながら所持者の命を削ることになる。雪乃が耐霊体質であることを考えた場合、これでは術者の方が先に命を吸われて死んでいる可能性の方が高かった。

蠱毒の性質を考えた場合、どうしても行き詰まってしまふ。長谷川雪乃の前に、こつも早く蠱毒が復活したこと。その説明をするだけのものが、紅には思いつかない。

（まともに考えても駄目だな……。それならば、今一度情報を整理するか……）

思い立ったようにして体を起こし、紅は大きく伸びをして立ち上がった。そして、そのまま部屋の隅にあるメモ用紙の束を目敏く見つけると、それをつかんでひたすらに何かを書き始めた。

「ちよつと、犬崎君！？ いったいどうしたのよ！！」

「静かにしている、九条。今、少し情報を整理しているところだ」

横から声をかけてきた照瑠に顔を向けることもなく、紅はメモ用紙の上に様々な事柄を書き殴って行く。それは、紅が雪乃に関わつてから見たものや聞いたもの、更には事件に関して紅が知る向こう側の世界に係る知識だった。

クリスマスのライブで紅が感じた違和感から、雪乃の本名と芸名果ては彼女の関係者の名前や身の回りで起きた出来事など、可能な限り時系列順になるように、紅は並べていった。書かれている文字そのものは決して上手くはなかったが、今の紅にとってはどうでもよいことだった。

一枚、二枚と小さなメモ用紙がテーブルの上に並べられ、紅はそれを腕組みしたまま今一度眺めた。長谷川雪乃の身の回りに起きた出来事、その関係者、そして呪いの方法に関するまで、少しでも抜けはなかったか。自分の見落していたものは、果たして本当になかったのかを探るために。

一般的な蠱毒の性質から考えても、先ほどは直ぐに行き詰まってしまった。ならば、雪乃の話をもとにして、彼女の身に何が起きていたのかを考えた方がよいだらう。

長谷川雪乃の夢に初めて蠱毒が現れた時期。そして、夢が現実かを問わず、彼女の前に蠱毒が現れたタイミング。初めはただ流れを追っているように見えたただけだったが、ある一点に来て、紅の目に明らかな変化が現れた。

暗闇の中、一筋の光を見つけ出した時のように、紅の赤い瞳が大きく見開かれる。いつもは冷静沈着な紅が、珍しく驚いているようだった。

「そうか……。そういうことだったのか……」

手にしたペンを落とし、テーブルの上に広げられたメモ用紙を前に呟く紅。今までは矛盾だらけだった点と点の関係が、ここに来て一直線に繋がった。そんなことを言いたそうな感じだった。

「蠱毒の現れたタイミング……。芸名……。耐霊体質……。それに、蠱毒の持つ本来の意味……。まさか、こんな単純な関係に、今まで気がつかなかつたなんてな……」

「ねえ、勝手に一人で納得しないでよ。私にもわかるように、ちゃんと説明してくれない？」

「んっ……。ああ、そうだな。だが、時間は一刻を争うぞ。できれば余計な長話などしないで、直ぐにでも出発したいところなんだがな」

「直ぐにでも出発って……。どこへ行くつもりなのよ!？」

「決まっているだろう。長谷川雪乃と、その関係者が集まっているN市内のホテルだ。全てはそこに行ってから説明する」

「でも、ホテルって言ったって、雪乃がどこに泊まっているかなんて……」

「それなら心配ない。さつき、あの二人が飲み残していったお茶がある。その残りから、コイツに匂いを辿らせればいい」

紅の言葉と共に、彼の影がすうっと天井まで伸びた。そして、そのまま壁から剥がれるようにして影が盛り上がると、それは瞬く間に流動的な黒い塊から成る体を持った犬となる。

「頼んだぞ、黒影。あの二人がどこに行ったのか……その匂いを辿って、俺達を案内しろ」

金色の目を輝かせ、紅の言葉に犬が頷いたように見えた。犬はしばらく湯飲みの周りを漂っていたが、直ぐに紅の中に戻って元の影に戻る。紅はその場で足元の感覚を確かめるような仕草をすると、壁に立てかけてあった白い布の巻かれた棒を手に部屋を出た。

紅と照瑠の二人がN市に到着したとき、既に辺りは陽が落ちて暗くなっていた。

暮の忙しい最中、市内はさぞ込んでいるだろうと思っていた照瑠だったが、意外にも人の数はそこまで多くはなかった。その代わり、空からは昼刻より降りだした雪が未だ降りてきており、辺りの道路は白い絨毯に覆われつつある。

豪雪地帯として有名な東北地方。そこでの雪は、他の地域の雪とは比べ物にならない。重たく湿った雪が背丈を越えるまでに降り積もることを考えると、このような天気のとときにあまり遅くまで出歩きたくはなかった。

「ねえ、犬崎君。勢いで電車に乗ってここまで来たけど……本当に大丈夫なの？」

「問題ない。黒影はあの二人の匂いを覚えているし、長谷川雪乃への連絡先も、さつき嶋本から携帯で聞いておいた。いざとなれば、長谷川を介して関係者との面会に取り付けるまでだ」

「それでも、外はこの雪なのよ。さつさと雪乃のいるホテルを探さないと、このままじゃ帰れなくなるじゃない」

「だったら、今すぐにでもお前だけ引き返せ。危険の中にわざわざ飛び込む理由など、お前にはないはずだ」

横にいる照瑠に向かって、紅は素っ気ない態度で返した。相変わらず愛想のない男だと思っただが、照瑠は喉まで出かかった言葉をぐっと堪えて飲み込んだ。

紅の言っていることは正しいが、ここまで来て事件の全貌を知らずに終わるといふのは納得がいかない。長谷川雪乃を今度こそ助きたいという気持ちも相俟って、照瑠の中には自分だけ帰るといふ考えは湧いて来なかった。

駅を離れて数十分程歩いた頃だろうか。紅と照瑠の目の前に、巨大な建物が姿を現した。N市内でも有数の、観光客を迎えるためのホテルだ。

ホテルの入口で足を止め、紅はその建物をすつと見上げる。いつもであれば何の変哲もない高層ホテルにしか見えないのだろうが、今日に限って、妙にホテル全体が禍々しい気に覆われているような気がしてならない。どんよりと曇った空の下、まるでホテル全体が巨大な怪物のようにして、こちらが口に飛び込むのを待っているような気がするのだ。

「行くぞ、九条……」

余計なことは一切口にせず、紅はそれだけ言ってホテルの自動ドアをくぐった。目の前には直ぐに受付のカウンターがあり、そこには比較的若い受付嬢が座っている。

このまま受付に頼んで雪乃を呼ぶのだろうか。そう思った照瑠だったが、意外にも紅は自分の携帯電話で直接雪乃を呼び出した。紅にしては大胆な行動だとも思ったが、それ以上に、彼のような人間が携帯電話で話をしているところを見るのが珍しかった。

程なくして、紅達の前に雪乃が現れた。彼女の横には、あの高槻も一緒にいる。ロビーにいた紅と照瑠の姿を見つけると、高槻はうんざりしたような顔をして二人に詰め寄った。

「なんだ、また君達か。まさか、こんなところまで追いかけて来るとはね……」

「あそこまで言われて、黙って引き下がるのも癪なんぞな。それに、放っておけば、長谷川雪乃の命に関わる事態になる。それはあんただって、望んではいないだろう？」

「やれやれ、今度は脅迫かい？　こちらが教えてもいないのにホテルの場所を突き止めたことといい……あまりに悪質だと、次は警察を呼ばせてもらうぞ」

「警察か……。それだったら、火乃澤県警に電話して、工藤という男に繋いでもらえ。俺がその辺のイカサマ霊能者ではないということとは、そいつが証明してくれるはずだ」

高槻はあくまで紅達に疑いの目を向けていたが、それでも紅は引かなかった。あまつさえ、知り合いの警察官の名前を出して、不敵にも高槻を挑発するような態度を取る。そんな彼の様子に、さすがの高槻も折れたようだった。

「仕方ない……。それじゃあ、一応は君達の話も聞いてあげよう。だけど……雪乃に万が一のことがあったら、僕は今度こそ警察を呼ぶぞ」

「構わない。そうなる前に、俺がその女に悪夢を見せている元凶を叩いてやるぞ」

一度は除霊に失敗しているにも関わらず、紅はいつになく自信に満ちた顔でそう言った。

高槻に案内されて紅と照瑠来た場所は、このホテルに用意された会議室だった。今日の昼、T Driveの面々が打ち合わせを行っていた、あの部屋である。

会議室には高槻と雪乃だけでなく、夏樹や咲花といったT Driveのメンバー、果ては麻宮星梨香やプロデューサーの黒部に加え、社長の鴨上の姿まであった。この部屋に通された際、紅が無理を言つて高槻に呼ばせた者達だ。

「で……その坊やが、俺達を呼び付けた 自称霊能者 っわけか？」

ふてぶてしい態度で紅を睨みつけているのは黒部だ。元よりこういった類の話信じていないだけに、いきなり高槻に呼び出されたのが不服のようである。

「自称ではない。俺の力は本物だ。今からそれを、お前達の前で見せてやるぞ」

「へえ、そりゃ楽しみだ。それで、君はいったい何を見せてくれるんだ？ 手品か、それとも占いか？」

「そんな遊びのようなものじゃない。あまり舐めっていると、今度はお前が死ぬことになるぞ」

「おお、怖い怖い。それじゃあ、外野は外野らしく、あくまで観客として見物させてもらいましょうか」

あくまで挑発的な態度を崩さずに、黒部はおどけた顔をして星梨香の影に隠れた。紅も、それ以上は相手にするのも馬鹿らしいと思つたのか、黒部には構わずに雪乃達の方を向いた。

「どうやら役者は揃つたようだな。それじゃあ早速だが、今回の事



件についての説明をさせてもらおうか」

「今回の事件？ いったい何なのよ、それ」

説明を始めようとした紅の腰を折ったのは星梨香だった。彼女もまた黒部と同じように、急に呼び出されたのを不満に思っているらしかった。

「ちょっと、少しは黙ってなさいよ。まずは話を聞かないことには、何が何だかわからないじゃない」

「あら、鈴森さん。あなた、もしかして、この妙な男のことを信用するってわけ？」

「別にそんなんじゃないわよ。ただ、私達を呼び出したからには、その理由をしつかりと聞かせてもらいたいってだけね。もしも下らない理由だったら、高槻さんが言っているように、警察呼んで摘まみだしてもらうけど」

「随分とお人好しなものね。まあ、別にいいんだけど……」

夏樹に注意をされても、星梨香は一向に態度を改めることなく言った。そのまま近くのパイプ椅子に腰かけて、眠たそうに体を伸ばす。そんな彼女に紅も少しだけ視線を向けたが、直ぐに気を取り直して説明を続けた。

「では、仕切り直すぞ。今回の事件は、そもそも俺達がそこにいる女……長谷川雪乃から相談を受けたことがきっかけだった。夢の中に現れた毒虫が、現実世界にも現れて襲いかかってきた。その正体を、探つて欲しいということだな」

「夢の中の毒虫って……それ、本当なんですかぁ、雪乃さん!!」

紅の言葉に大袈裟に驚く咲花。雪乃は黙ってそれに頷いて答える。

「長谷川の話聞いて、俺はこいつを襲っているのが蠱毒ではないかと考えた。人に富や成功を与える代わりに、徐々にその精神を蝕んで死に至らしめる。そういった類の呪いを仕掛けられたんじゃないかと思っただのさ」

夏樹や咲花の前で、紅は蠱毒について簡潔にまとめて話した。照瑠や雪乃は既に紅の話聞いて知っていたが、他の人間にとってはまったく未知の世界の話だった。

「蠱毒を抜く方法は、大まかに分けて三つある。一つ目は、蠱毒の本体でもある虫のミイラを見つけて、しかるべき力を持った人間が叩き潰すこと。だが、長谷川の家をくまなく探しても、蠱毒の本体は見つからなかった」

紅の言葉に、照瑠は雪乃の家で亜衣と一緒に虫のミイラを探した際のことを思い出した。あの時は、家中の棚や押入れをひっくり返して探したものの、結局虫のミイラなど見つからなかった。

「二つ目は、蠱毒の本体でもある虫のミイラを、蠱毒によって得た富や成功と共に捨てること。もっとも、誰にでも簡単にできる半面、今まで手に入れた名声を捨てるだけの勇気が試される方法でもある。それに、虫のミイラが見つからなかった時点で、どの道この方法でも長谷川は救えなかった」

二つ目の方法は、紅が照瑠の行きつけの甘味屋で話していたもの

だ。あの時、紅が執拗なまでに雪乃の覚悟を決めさせようとしていたのは記憶に新しい。

「そして三つ目は、夢の中に現れる蠱毒を現実世界に引きずり出し、そこで滅してしまふこと。これは最も確実な方法だが、それ故にリスクも大きい。向こう側の世界に通じる強力な力を持った人間でなければできない上に、蠱毒に憑かれている人間にも相応の負担がかかる」

最後に紅が言ったのは、雪乃の家で紅が行った除霊のことだろう。霊的な存在の攻撃に対して耐性を持つている雪乃でさえ、蠱毒を夢から引きずり出す際には多いに苦しんでいた。それを救おうと、照瑠は紅の助けを得て、自分の持つ癒しの力を使い雪乃を苦しみから解放した。

「結局、蠱毒の本体が見つからなかった時点で、俺は三番目の方法を試すしかなかった。そこにいる長谷川が耐霊体質、つまりは霊の攻撃に対して抵抗力のある体だったから、運よく成功したようなものだがな。それに、九条が長谷川を助けるために、癒しの気を送ってくれたのも幸いした」

最後に付け加えるようにして、紅は照瑠が雪乃を助けようとしたことについて述べた。いきなり自分の名前を呼ばれ、照瑠は意外そうな顔をして紅を見る。他人を認めるような発言をすることの少ない紅の口から、そんな台詞が出ることは滅多にない。

「照瑠ちゃん……。私を助けようとしてくれたって、それ、本当なの……？」

「えっ……。ああ、まあね。でも、実際は犬崎君の力に助けられた

ようなものだし、私一人じゃ何もできなかったわよ」

「それでも、私のために何かしてくれたのは事実でしょ。あの時は、お礼も満足に言えなくてごめんね」

照瑠が雪乃を助けるために、自らの力を使ったという事実。それを紅の口から述べられて、雪乃は決まりが悪そうにして照瑠に言った。自分のために何かをしてくれたにも関わらず、それに対して何も気づいていないということが、雪乃には申し訳なく思えて仕方なかった。

「礼なら後にしろ。それよりも続きだ」

雪乃に何かを返そうとしていた照瑠を紅が遮った。話の途中で勝手に割り込まれ、少々立腹している様子だった。

「結局、俺は蠱毒の本体を見つけることなく、その存在を滅すことに成功した。しかし、俺が蠱毒を抜つたにも関わらず、やつらは再び長谷川の前に現れた。それも、除霊が済んでから半日と経たない間にな。そうだろう、長谷川？」

「は、はい……。今日、私がホテルの洗面所に行ったとき、その天井に虫がびっしりと張り付いていたんです……」

あまり思い出さたくない。そんな表情で、雪乃は恐る恐る口にした。夏樹や咲花といった Drive の面々は怯える雪乃に気遣うような視線を送っていたが、星梨香だけは呆れた顔をして大きく溜息をついた。

「はあ……。まったく、何を言い出すかと思つたら、そんな下らな

いことなの！？　あなたが洗面所に行ったとき、あそこで私と会ったでしょう。もし、あなたの言う通り、洗面所の天井に虫がいたのなら……私だって、それを見ていなくちゃおかしいじゃない！！」

「そ、それは……」

「もしかして、あの噂は本当なのかもしれないわね。あなたが妙な薬を使って、ライブの前に高揚感を高めていたって……」

パイプ椅子から立ち上がり、これ見よがしに意地悪そうな視線を送る星梨香。相手の弱みを突いて、自分のライバルを蹴落とした。そんな満足感からか、勝ち誇ったかのようにして笑みを浮かべている。

傍から見れば、確かに雪乃の話は荒唐無稽なものだろう。三流ネツトニュースに書かれた記事とはいえ、これでは彼女に麻薬の使用疑惑がかかるのも当然だと思われる。が、事件を起こしていたものの正体を知っている紅は、いつも以上に冷ややかな目をして星梨香を睨みつけた。

「おい、誰でもいいから、そこにいる女を黙らせる。さっきから、やかましくて仕方がない」

「なっ……失礼ね！！　そもそも、あなたみたいな得体の知れない人間が、アポも無しに会いに来るってだけでも非常識なのに……」

「いいかげんにしろ！　それ以上口を出すなら、今すぐここで眠ってもらうことになるぞ！！」

途中まで文句を言っていた星梨香の言葉を遮り、紅が低く重たい

声で怒鳴った。一瞬、その影が星梨香に襲い掛かるようにして伸びた気がして、周りにいた全員が呼吸を止める。それは星梨香も同様で、それ以上は何も言わずに席に戻った。

「まったく、とんだ横槍が入ったものだな。まあ、普通の人間からすれば、これが当たり前の反応なんだろうが……」

再び場を仕切り直し、紅が話を戻した。先ほどの凄みの効いた姿を見ているだけに、今度は誰も口を挟もうとはしなかった。

「それじゃあ、話を続けるぞ。長谷川の前に蠱毒が再び現れた時点で、俺は自分の除霊が失敗したと認めざるを得なかった。だが、俺が蠱毒を夢の中から引きずり出して退治したのは間違いない。それは、ここにいる九条も目の前で見ていることだ」

「うん……。私も犬崎君の使う犬神が、大きな虫を焼き殺すところは見たし……」

「だが、現に長谷川の前には、新たな蠱毒が出現した。これは、未だ長谷川が蠱毒の呪いから解放されていないことを意味している。このまま放っておけば、遠からず長谷川は衰弱して死ぬだろうな」

紅が雪乃に視線を戻す。相変わらず、雪乃はどこか怯えた様子で紅の話を聞いている。

「長谷川を救うには、蠱毒の本体を叩き潰すしかない。しかし、前と同じ方法で戦ったところで、失敗するのは目に見えている。そこで俺は、もう一度最初から今回の事件を考え直してみることにした」

「それ、私の家を出る前にも言っていたわよね。もしかして、雪乃

に憑いていたのは蠱毒じゃなかったとか言っんじゃないでしょうね？」

「いや、確かに長谷川は蠱毒に憑かれていた。だが、あれは蠱毒の本体じゃない。しいて言えば、本体に操られる端末……昆虫で例えるならば、女王蜂に使役される働き蜂ってところだな」

「働き蜂！？ それじゃあ、雪乃の前に新しく現れた虫は……」

「お前の考えている通りだ、九条。大方、長谷川に憑かせていた働き蜂がやられたことを知って、新しく尖兵を送り込んで来たんだろう。蠱毒のように作るのに時間がかかる呪具で、こうも簡単にスベアを用意するのは難しいからな。だが、働き蜂を送り込んで来ただけとなれば、話は見えてくるさ」

「そんな……。それじゃあ、雪乃に憑いている虫をいくら抜つても、何もならなかったっていうの……」

まったく、なんとということだろう。紅の説明を聞いた照瑠は、蠱毒というものの底知れぬ力に改めて恐怖した。

雪乃の部屋で、紅と黒影が倒した毒虫。あれを見た時も相当に気持ちの悪いものだと思っただが、それでさえ敵の末端に過ぎなかった。あの毒虫を束ね、貪欲に人の命を啜る本当の敵。その姿を想像しただけで、なんだか吐き気が込み上げて来る。

「そもそも今回は、俺も先入観から大きなミスを犯してしまった。蠱毒は誰かが呪いたい相手に送りつけるものという固定概念に加え、長谷川がアイドルとして成功していたのが、蠱毒の力によるものだという思い込み。それが俺の目を曇らせて、真実から遠ざけてしま

っていた」

会議室に集められた人間の顔を一通り眺め、紅は彼らの側からすつと離れた。そして、その後ろに長く伸びた影を携えて、再び一同の方へ顔を向ける。

「だが、長谷川に憑いていた蠱毒が単なる端末に過ぎないとわかった今、もう間違いは起こさない。蠱毒の本体を操り、長谷川雪乃に悪夢を見せ続けていた張本人。その化けの皮を、今から俺が剥いでやる……」

紅の赤い瞳が、更に赤く輝いたような気がした。その輝きに合わせるようにして、紅の影が一気に伸び上がる。それは瞬く間に紅の身体を離れると、どろどろとした黒い塊になって空中を浮遊し始めた。

「行け、黒影。お前が長谷川雪乃の家で戦った蠱毒……。それと同じ匂いを持ったやつを、この中から探し出せ」

紅の指示を受けて、黒い塊が姿を変える。内部から飛び出るようにして四本の脚が伸び、最後に巨大な犬の顔が姿を見せる。その中央に輝く金色の目で、紅の使役する犬神、黒影は、雪乃達を何も言わずに見つめていた。

ゆっくりと、まるで獲物を品定めするようにして、黒影はその場にいる全員の顔を舐めるようにして見る。一人、また一人と何かを確かめるように眺めてゆき、最後にある人物の前に来て動きを止めた。

「なるほどな……。俺の予想通り、やはりお前が今回の黒幕だった



か……」

自信に満ちた表情で、紅が黒影の睨みつけている者の前に立った。が、紅が指していたのがあまりに意外な人物だっただけに、雪乃を始めとした全員が言葉を失ったまま固まっている。

長谷川雪乃に蠱毒の端末を植え付けて、その精神を蝕んでいた張本人。金と赤、二つの瞳が見つめる先にいた者は、他でもない鴨上プロダクションの社長、鴨上裕司だったのだから。

永遠とも言える静寂が、夜の会議室を支配していた。

長谷川雪乃に呪いを仕掛けた犯人は、こともあろうか社長である鴨上。紅の告げたあまりに衝撃的な事実には、その場にいる全員が何も言えずに動けないでいた。

しんと静まり返った会議室に、部屋の空調の音だけが微かに響く。このまま息が詰まってしまつのではないかと思われる光景だったが、その均衡を破つたのは、他でもない鴨上だった。

「ふふふ……。いやあ、なかなか楽しませてもらったよ。さっきのはどんな手品か知らないが、君には物語を作る才能があるようだね」

「とぼけるな。黒影の鼻は、その辺の犬が百匹集まっても敵わないくらいに正確だ。おまけに現実世界のものだけじゃなく、霊的な存在の匂いまで嗅ぎわけることができるぞ」

「なるほど、確かにそれは物凄い嗅覚だね。だが……仮に百歩譲って、私に君の言う 人を呪う力 があつたとして、それでどうして私が雪乃君を呪わねばならん？ 雪乃君には感謝こそしているが、恨みなどこれっぽっちもないのだよ？」

「ああ、そうだろうな。長谷川雪乃を始めとしたT Driveの連中を使って、この世界で荒稼ぎをしているお前にはな……」

最早、全てを見通している。そう言わんばかりの口調で紅は続けた。鴨上はあくまで子どもの戯言として片づけようとしているようだったが、その程度で紅は引かなかった。

「そもそも、蠱毒は本来呪いのために編み出された術ではない。自分の命を生贄に、普通では考えられないような富を運び込ませる。その性質を利用して、殺したい相手に送りつけて破滅させるのが、呪具としての蠱毒の使い方だ」

「ほう、そうなのかい？ だが、それがいったい、私が雪乃君を呪うことと何の関係あるのかね？」

「残念だが、関係は大ありだ。確かに蠱毒は持ち主の命を削って富や成功を運び込むが、正しい手順を踏んで使えば、自分の身代わりとなる生贄を指定させることもできるのさ。そうやって、自分以外の人間を生贄にすることで、お前は鴨上プロダクションに成功を運び込んで来たんだ。長谷川雪乃達、T Driveの芸能界での成功をな……」

「はっはっはっ！ こいつはなんとも愉快的な推理だね。まさか最後の最後に、こんな都合主義な展開になるとは思っていなかったよ

「!!」

「あくまでシラを切るつもりか、この狸め。もっとも、ここで俺が黒影を使って、あんたの中から蠱毒を引っ張り出せば話は変わるがな。長谷川の時とは違い、何の耐性も持っていない人間から、半ば強引に憑依している霊体を引き剥がすんだ。あんただって、無事で済むっていう保証はないぜ……」

紅の顔が、ゆっくりと笑みの形に歪んだ。その表情に、鴨上だけでなく側にいた照瑠までもが恐怖を覚えた。いつも、教室や図書室で眠っているときに見せる顔ではない。獲物を追い詰め、正に止めの一撃を刺さんとする際の、肉食獣が見せるような顔だった。

「ねえ、犬崎君……」

たまりかねた様子で、照瑠が紅に尋ねた。これ以上、緊迫した空気には耐えきれない。そう思っただけの行動だった。

「そもそも、どうして社長さんが雪乃を呪ったなんて考えたの？ あなたの犬神の力を信じないわけじゃないけど……私には、まだ理由がわからないんだけど……」

「なんだ、そんなことか。少し考えれば、わかりそうなものだがな」

鴨上を追い詰めたはずの出鼻をくじかれ、紅が少し面倒臭そうな顔をして言った。

「思い出しても見る。長谷川雪乃の前に蠱毒が現れたタイミング。それは全て、T Driveに成功が訪れた際に限られていた」

「で、でも……それは、雪乃に蠱毒の本体が送られていても同じことじゃないの？」

「ああ、最初は俺もそう思った。しかし、今日になって長谷川雪乃から話を聞いた時、妙なことに気がついたんだ。あいつ自身が成功を収めていなくても……他のT Driveのメンバーが成功を収めても、蠱毒が姿を現した。それはつまり、蠱毒がもたらしていた名声や成功は、長谷川雪乃に対してだけのものではなかったということの意味している」

「そ、それじゃあ、蠱毒が運んできたものっていうのは……」

「当然、鴨上プロダクションに所属するアイドル達の成功。即ち、最終的には社長の懐に富が入るということだ。アイドルの名が売れて、その曲が売れて……それで最も得をする人間は、他でもないプロダクションの社長だからな」

紅の目が、再び鴨上を捕えて睨んだ。今度は鴨上も、紅を茶化すようなことはしない。普段の温和な様子は消え失せて、静かに押し黙ったままである。

「長谷川の前に再び現れた蠱毒が端末だとすれば、それを送り込んだ人間がいる。その際、重要になるのは相手の名前や生年月日、それと体の一部だ。それらの要素が正確に揃わなければ、誰でも手軽に身代わりなんて用意できるもんじゃない」

「ちよつと待つてよ、犬崎君！ それだったら、社長さんだけじゃなくて、ここにいる全員が怪しいってことにならない！？ 雪乃の体の一部だって……それこそ、髪の毛くらいなら、誰だって手に入られそうだし……」

「確かに。だが、名前の方はそうもいかならう。ここにいる人間の中で、長谷川雪乃の本名を知っている人間がどれだけいる？」

「あつ……！！」

そこまで言われて、照瑠もようやく合点がいったような顔をして言葉を飲み込んだ。

長谷川雪乃の本名は、蓮雑有希。雪乃はあくまで芸名であり、本当の名前ではない。

紅は、蠱毒の生贄として他人を指定する際に重要なのは、本人の名前と生年月日、それに体の一部だと言った。体の一部はともかくとしても、本名と生年月日に関しては、そうそう容易く手に入れるものではないだろう。芸名を使っている以上、増してや本人が公に本名を公開していない以上、同じ業界にいても本名を知る機会など多くはない。

芸能人の本当の名前や生年月日といった個人情報、それに体の一部までを容易く手に入れ、更にはT Driveの成功が直接己の富を増やすことに繋がる人物。それに該当する者は、社長の鴨上以外に存在しない。

もう、ここまで来れば間違いはないだろう。蠱毒を使って雪乃を陥れていたのは、他でもない鴨上だ。

本来であれば自分に降りかかる災厄を、事務所に所属しているアイドルを生贄に回避する。その上で、蠱毒の力によって得られる富を、アイドルの成功という形で手に入れる。あまりにも用意周到か

つ残酷な、人を消耗品としてしか考えないやり方だ。

「長谷川雪乃が九条の家に来た時に、そこいる女……麻宮星梨香の相方が心身衰弱になったと言っていたらどう？ それを思い出した時、俺の頭の中で疑念が確信に変わったんだよ。鴨上プロダクションの社長が、長谷川の件より以前から蠱毒を使い、プロダクションを大きくしてきたということになー！」

紅と黒影が、同時に鴨上を睨みつけた。鴨上は完全に観念してしまっただのか、最早何も言い返そうとはしない。

これで、事件は全て解決した。後は鴨上の持っている蠱毒の本体を見つけ出し、紅と黒影の力で滅すればよい。そう考え、照瑠が胸を撫で降ろそうとしたときだった。

「ぬわあああつー！」

突然、鴨上が奇声を上げて立ち上がり、近くにあったパイプ椅子を持って紅に投げつけた。済んでのところでかわすものの、今度は照瑠を狙って椅子を投げつけてきた。

「伏せろ、九条ー！」

照瑠の頭に椅子がぶつかる瞬間、紅がその身体を縦にして照瑠を守った。時間にしては一瞬のものだったが、それは鴨上に会議室から逃げ出すための機会を与えるのに十分なものだった。

「くそっ……！ ここまで来て、逃がしてたまるかー！」

足元に落ちたパイプ椅子を蹴り飛ばし、紅が慌てて鴨上の後を追

う。黒影を自分の影に戻し、白布の巻かれた日本刀を片手に持つと、脱兎の如く会議室を飛び出した。

鴨上を追って紅達が辿りついたのは、ホテルの地下にある駐車場だった。

会議室を飛び出した鴨上は、紅や照瑠が驚くほどの速さで逃げていった。あの突き出た腹とたるんだ脚で、どうしてあそこまで走れるのが不思議なくらいだった。

だが、それでもやはり、体力の差は埋められなかったのだろうか。駐車場に辿りついたところで、鴨上はとうとう紅達に追いつかれた。駐車場の中に入ったところで一度は見失ってしまったが、辺りを探すとすぐに鴨上は見つかった。

「さて……とうとう年貢の納め時だな。あの場で逃げ出すようじゃ、自分が犯人だって認めているようなものだぞ」

「はあ……はあ……まあ、確かにそうかもしれないね……」

息を切らし、肩を激しく動かしながらも、鴨上は不敵な笑みを浮かべて紅と対峙した。先ほど慌てて会議室を飛び出した時とは違う、妙に自身に満ちた笑みだった。

「君の言う通り、確かに雪乃君を蠱毒の生贄として選んだのは私だよ。それだけでなく、かつて星梨香君とユニットを組んでいた愛梨

香君……彼女もまた、蠱毒の生贄として使わせてもらった。もつとも、愛梨香君は雪乃君と違って早々に蠱毒の力に屈してしまい、大して使い物にもならないまま終わってしまったがね」

もつ、隠す必要もない。なんら悪びれたこともなく、鴨上は淡々と紅に語っていた。

「だが、その何が悪い。大した才能もない癖に、一端のアイドルとしてデビューしたいなどと豪語する。そんな理想と現実の区別もつかない人間に、私はほんの少しだけ夢を見せてやっただけだ」

「とうとう尻尾を出したか、この古狸が！ 貴様が何と言おうと、その行為は決して認められるようなものじゃない！ 他人を犠牲にして成功を得るなど、そんな方法は絶対に間違っている！！」

「ふん……。この業界のことを何も知らない若造が、偉そうな口を利くんじゃない！ アイドルなど、所詮は使い捨ての消耗品だ。我々事務所が抱えている、一つの商品に過ぎん！ 自分の会社の商品を社長がどうしようと、そんなことは社長の勝手だろう！！」

「それが貴様の本心か……。どうやら貴様は、救いようのない大馬鹿のようだな……」

駐車場中に響き渡らんような声で叫ぶ鴨上を他所に、紅はどこか冷めた口調だった。

己の欲望のためであれば、人を物と同じようにしか扱わない。あまつさえ、その行為を正当化するために、もつともらしい理論を振りかざして開き直る。そんな鴨上の態度に、紅は辟易していたのかもしれない。



「そんな……。社長が私を呪っていたなんて……。私達のことを、そんな風にしか考えていなかったなんて……」

いつの間にか紅に追いついていたのだろうか。彼の後ろに集まった者たちの中心で、雪乃が呟いた。今まで信じていたものに裏切られた。その驚きを隠しきれない様子だった。

「ふふふ……。残念だが、これが真実なのだよ、雪乃君。もつとも、ここまで聞かせて君達をただで返すほど、私もお人好しではないがね……」

鴨上の口元が、三日月のように細く曲がった。いつの間にか、その手には小さな桐の箱のようなものが握られている。鴨上はその蓋を乱暴に開けると、中から何やら乾いたものを取り出した。

それは、言うなれば小さなサソリの？製だった。赤褐色の体にはところどころ色の薄い部分が存在し、かつてはその体に斑の模様を持っていたことを窺わせる。でつぷりと太った腹と、獲物をとらえる大きな爪。そして、腹の先端についている毒針も含め、雪乃の夢に出て来た毒虫に似ていなくもない。

「もう諦める。貴様の手の中にあるもの……。そいつをさつさところちらへよこせ」

「そうはいかんよ、君。こんなこともあるつかと、私にこれをくれた者は、最後の手段まで教えてくれた。君のような存在が私の前に現れた時、振り返ちにしてやるための方法をね……」

「なんだと!？」

「残念だが、後悔するのは君達のようなのだ。余計なことに首を突っ込まねば、もう少し長生きできただろうに……」

そう言うのが早いか、鴨上は口を大きく開けて、手にしたサソリの製をその中に放り込んだ。慌てて紅が止めに入るが、もう遅い。鴨上は口の中でサソリの？製を咀嚼すると、躊躇うことなくそれを飲み込んだ。

蠱毒の本体をその身に取り込み、鴨上がゆっくりと紅達の方を見る。その瞳に、既に人間としての輝きはない。毒々しい赤紫色に染められた虹彩が、狩りの獲物を品定めするかのようにしてきらきらと光っている。

次の瞬間、雪乃の足元から伸びていた影が急に盛り上がった。慌てて飛び退く雪乃を他所に、影の中からは次々とサソリの形をした毒虫が溢れ出して来る。紅の言葉を借りるのであれば、これは蠱毒の端末のようなもの。言わば、一種の働き蜂だ。

雪乃の影から飛び出した無数の毒虫。それは鴨上の影に集まり、吸い込まれるようにしてその中に消えた。それと同時に、鴨上の身体から発せられる禍々しい気も徐々に強くなってゆく。

(端末を呼びもどして還元している……。まずいぞ、これは……)

虫が完全に鴨上の影に吸い込まれたことで、紅も手にした日本刀の柄に手をかけて身構えた。

蠱毒の本体ともいえる蟲のミイラを直接食す。それは即ち、術者が自ら蠱毒のヒエラルキーの頂点に立つことを意味している。今ま

では蠱毒が使っていた様々な呪力を、今度は術者自身が使えようにするための禁術だ。

もつとも、そんなことをした以上は、術者も普通の人間ではない。蠱毒と同じく人間の精気を吸うことでしか生きられない、一種の妖怪と化してしまう。蠱毒を食うということは、正に最後の手段といっても過言ではないことなのである。

これ以上は、見ていることも限界だろう。妖怪となってしまうた以上、鴨上を斬ることも已む無しか。そう思つて、紅が刀を鞘から抜こうとしたときだった。

突然、鴨上の身体に変化が現れた。今までは余裕の表情を浮かべていた顔が、瞬く間に苦悶のそれに変わつてゆく。脚は膝から崩れ落ち、全身が痙攣を始め、開いた口から醜く涎を垂らしていた。

「しまった！ 遅かったか……！！」

紅がそう言つのと、鴨上の口からサソリが溢れ出すのが同時だった。鴨上の口から溢れ出したサソリの群れは瞬く間にその身体を蹂躪し、赤黒い下地に黄緑色の斑が目立つ不気味な甲殻が全身を覆つてゆく。

蠱毒を食することは、確かに蠱毒のヒエラルキーの頂点に立つことを意味している。しかし、それはあくまで、蠱毒の持つ靈力をその身体に取り込めるだけの力を持った者が行った場合の話だ。

見たところ、鴨上はなんら修業などしていない一般人のようだった。先ほど、蠱毒を誰かから貰つたということをお口にしていた以上、それは間違いないだろう。

何の力も持たない者が、蠱毒をその身に取り込もうとする。それは即ち、自らが逆に蠱毒によって食いつくされてしまうことと同義だった。

夢の中でしか力を発揮できない蠱毒は鴨上の肉体も魂も喰らい尽くし、現実の世界へと溢れ出た。鴨上の軽率な行動によって、現世で活動するための新たな肉体を得てしまったのだ。

「下がっている、お前達。あれはもう、お前達の知っている社長じゃない……」

刀を鞘から抜き放ち、紅が後ろにいる照瑠や雪乃に言った。その間にも、鴨上の身体に張り付いた虫たちは醜く動き回り、やがて一つに繋がってゆく。赤黒い甲殻はそのままに、鴨上の身体を軸にして、人のような姿へと変貌していった。

「きゃっ！ な、なんなのよ、あれ……」

かつて、鴨上であったもの。そのあまりの変貌ぶりに、夏樹が思わず悲鳴を上げた。それほどまでに、鴨上を包むようにして毒虫が集結したものは、おぞましい姿をしていたのだ。

全身を覆う、斑模様の目立つ赤黒い甲殻。二本の脚でしっかりと大地を踏みしめているものの、その身体はどう見ても人間のそれではない。両手の指は失われて鋭利なハサミへと変化し、額には二つの目玉の代わりに、四つの単眼がついていた。

腹の脇からは左右にそれぞれ二本の脚が伸び、ゆらゆらと空中を漂うようにして揺れている。口は縦に裂けるようにして割れ、その

中からは透明の粘液のようなものが溢れ出している。更には背骨にそのまま繋がるようにして、一本の巨大な尾が伸びていた。その先端には巨大な鎌爪のような毒針が剥き出しになってついており、これまた獲物を狙って静かに宙を舞っていた。

「ひいひい……気持ち悪いですう！！ あの毒サソリ怪人みたいなのが、社長の正体だったんですかあ……」

半泣きになりながら、咲花が高槻の後ろに隠れた。

鴨上の変貌した怪物は、身体の特徴だけ見れば特撮番組に出てくる怪人と同じと言えなくもない。が、ラテックス性のスーツとして作られた偽物と違い、これは本物の毒虫をそのまま巨大化させたようなりアルでグロテスクなものだ。未だ中学生の咲花にとって、この姿はあまりにも刺激が強すぎた。

「お前達の社長の肉体を得て、あの毒虫は現実世界でも活動するための身体を手に入れた。術者もいなくなったあれは、もはや誰のコントロールも受け付けない。本能のままに人間の魂を喰らう、人間も怨霊も越えた怪物だ！！」

刀を構え、紅が叫ぶ。その言葉に合わせるようにして、彼の影から黒影が飛び出した。

「行くぞ、黒影！ 赫の一族の末裔として、あの怪物は俺が仕留める！！」

刀の柄を握る紅の手に力が入り、同時に刀身から無数の闇が溢れ出した。初めはミミズや蛇のように宙を舞っていたそれは、すぐに刀身を覆うようにして集まり一本の黒い気の塊となる。

闇薙ぎの太刀。かつて多くの罪人の首を刎ね続け、終いには生者も死者も問わず貪欲に魂を喰らい続けるようになった呪われし妖刀。うかつに使えば使用した者の命さえも削ってしまうが、同時に悪霊の魂をも喰らい尽くす最終兵器でもある。犬神の黒影と同様に、犬崎紅が使う闇の力の一端だ。

黒い気に覆われた刀身を自らの腰の後ろに隠すようにして、紅はそのまま妖怪と化した鴨上へと向かっていった。その後を追うように、黒影も駐車場の天井すれすれを飛んで襲い掛かる。が、それに気づいた妖怪も、大きく口を開いて不気味な咆哮を上げた。

次の瞬間、紅の足元を払うようにして、妖怪の尾がしなりながら伸びた。風を斬る激しい音がして、強靱な尾の一撃が地面を叩く。

ガツ、という激しい音がして、駐車場のコンクリートが砕け散った。霊的な存在が物理的な攻撃を仕掛けられないという常識に反し、妖怪の一撃は明らかに駐車場の床を抉っていた。

鴨上の肉体を得たことにより、現実世界も活動可能になった蠱毒。その力は、なにも夢の世界だけに留まらない。現実世界での肉体を得たことで、物理的な攻撃をも可能とする真の怪物となったのだ。それだけに、今までの相手と比べても厄介な敵には違いない。

尾の一撃を辛うじてかわし、紅はすかさず妖怪の懐に潜り込んだ。そのまま渾身の一撃を、妖怪の腹目掛けて叩き込む。

カキン、という音がして、怪物の甲殻が紅の一撃を弾き返した。闇薙ぎの太刀は、普通の刀として用いても恐ろしいまでの切れ味を誇る。それにも関わらず、無数の毒虫が集結して生まれた甲殻は、

易々と太刀の刃を跳ね返してしまった。

「くそっ……。なんて固い殻だ!!」

刀身を弾かれたときに襲った痺れが、未だ紅の手に残っていた。だが、それが収まるのを待つ暇もなく、今度は妖怪のハサミが紅の首を狙って振り下ろされる。

頭の上で、ジャキツという嫌な音がした。後少し遅ければ、首と胴が離れ離れになっていたところだ。

グオオオオツ!!

術者の危機を感じ取ってか、黒影が雄たけびと共に炎を吐いた。全ての闇を焼き尽くす青白い破魔の炎。それは駐車場の空気をも焦がし、妖怪の巨大な爪に直撃する。

腐った卵と焦げた砂糖を混ぜたような匂いが、駐車場の中に溢れ返った。現世で行動するための肉体を得たとはいえ、元は怨霊のよくなものだ。鴨上を取り込んだ今も、魔を滅する力を持った黒影の炎による攻撃は効果的のようだった。

両手の爪を燃やされ、炎を振り払うようにして暴れる妖怪。その隙を逃さず、紅は新たな一撃を叩き込まんと刀を構える。そのまま大きく刀身を振りかぶり、今度は相手の脳天目掛けて太刀を振り下ろした。

この攻撃で全てを決める。そう思って繰り出された必殺の一撃。

だが、黒影の攻撃で動きを止められていると思われた妖怪は、紅の予想に反して未だ健在だった。

炎に包まれた爪を大きく振り回し、妖怪は紅を身体ごと弾き飛ばした。打撃武器としても十分に機能する巨大な爪が、横殴りにする形で紅を襲う。

「がつ……!!」

まともに食らえば、それこそ骨の一本や二本は平気で砕いてしまうであろう一撃。その直撃を受けた紅は、そのまま宙を舞って駐車場の壁に叩きつけられた。なんとか刀だけは落とさなかったものの、さすがに今度ばかりは身体が言うことを利かない。全身を襲う激しい痛みにも、苦悶の表情を浮かべたまま倒れ込んだ。

術者を倒され、黒影が怒りに震えた雄叫びを上げる。今度は相手の喉笛を咬み千切らんと、怪物に向かって襲い掛かる。

普通の人間であれば、捉えることさえも難しい黒影の動き。しかし、そんな黒影の攻撃でさえも、妖怪を仕留めるには足らなかった。

黒影が飛びかかろうとしたその瞬間、妖怪の口から白い霧のようなものが放たれた。それは、霊的な存在にのみ通用する毒ガスのようなものだったのか。直撃を受けた黒影が、たまらず低い唸り声を上げて大地を転がった。

「くっ……。下がれ……。黒影……」

片手を伸ばし、紅は黒影を懸命に自身の影へ戻そうと試みる。だが、そんな彼の言葉も虚しく、黒影は犬の姿を捨てて、どろどろと



した黒い塊へと戻ってしまった。完全に消えてしまったわけではないのだろうが、黒影もまた、かなりの深手を負ってしまったようだ。った。

紅と黒影。二つの邪魔者を排除して、妖怪は満足そうにガチガチと歯を鳴らした。その口からは粘性の高そうな唾液が溢れ出し、不気味な糸を引いている。

ゆつくりと、まるで準備運動を終えたとでも言わんばかりに、妖怪は両手の爪で空を斬った。爪を覆っていた炎にまみれて、その周りにから無数の焼け焦げた虫が辺りに飛び散る。それは直ぐに燃え尽きて灰になってしまい、あとには青白い煙が上がっているだけだ。

黒影の吐いた炎と一緒に身体の一部を切り離す。そんなことをすれば、当然のことながら爪も欠けてしまうはず。が、しかし、妖怪が一瞬だけ身体を震わせると、その傷口から瞬く間に新たな毒虫が湧いて出た。それはすぐさま傷を塞ぎ、数秒と経たずに新たな甲殻を形成する。無数の毒虫が集合して生まれた妖怪にとって、この程度の傷などは怪我の内に入らないようだった。

壁に叩きつけられて動けない紅を他所に、妖怪がゆつくりと照瑠達に迫る。獲物として、まずは誰から狩ってやるうか。そんな品定めさえしているようにさえ思われる。

「逃げるんだ、雪乃……。ここにいたら、みんなあの化け物に食われてしまう……」

高槻が、雪乃達を庇うようにして前に出た。自分でも敵わないとはわかっていたが、それでも最後まで雪乃達を守りたい。それがT Driveのプロデューサーとして、自分の果たさねばならない

使命だ。

生物にしては妙に乾いた足音が駐車場に響く。高槻達は徐々に奥へと追いやられ、最後は壁にぶつかって動けなくなる。

もう、これ以上は後がない。そう思った矢先、妖怪が嬉しそうに口を開いて涎を垂らした。

巨大な爪を振り上げて、奇声を発しながら妖怪が走り出す。だが、額にある四つの単眼に映し出されたものは、果たして雪乃や照瑠ではなかった。

「ちよっ……なんでこっちに来るのよ!!」

妖怪が最初の獲物として狙った相手。それは他でもない、麻宮星梨香だった。

逃げようにも、足が震えて動けない。たまらず星梨香は、側にいた黒部にすがりつく。ところが、そんな星梨香の気持ちとは反対に、黒部もまた取り乱した様子で星梨香を突き離れた。

「は、離せ、馬鹿！ このままじゃ、こっちまで食われちまうだろ!!」

「そ、そんな……。私のこと、大切に思ってくれているんじゃないかなったの!？」

「それとこれとは話が別だ！ いくらお前のことが大切でも、自分の命に代えられるか!!」

無情にも、黒部は星梨香を怪物に向かって突き飛ばした。足元に獲物が転がってきたのを見て、怪物の動きが一瞬だけ止まる。その隙を突いて、黒部は一目散に駐車場の外に向かって逃げ出した。

「あ……ああ……」

もう、自分を助けてくれる者は誰もいない。目の前では怪物の振り上げた爪が、星梨香の首を狙っている。

絶望。その二文字が星梨香の頭を支配した。このまま自分は、怪物に殺されて短い一生を終わってしまうのか。アイドルとして成功することもできず、信じていた男にも裏切られ……そんな無様な終わり方が、自分の一生なのか。そう、星梨香が諦めたときだった。

一陣の黒い風が、突如として怪物に襲いかかった。何かかと思いつつ照瑠が目を見ると、それは先ほど妖怪に白い霧の一撃を食らわされた黒影だった。

身体の再生は行わず、黒い球体から犬の頭だけを出した姿。なんとも不格好な形状だったが、不意打ちで妖怪に食らいつくにはこれで十分だった。

首筋に牙を突き立てられ、妖怪がガラスを引っ掻くような奇声を上げて暴れまわる。星梨香にとって、逃げ出すチャンスは今しかない。が、そう頭でわかつてはいるものの、彼女の足は動かない。

信じていた男に裏切られた絶望や、妖怪に食われそうになった恐怖。そうだった様々なことが原因で、星梨香は完全に自分を見失っていた。逃げなければならぬのに、逃げられない。そうしている間にも、妖怪は黒影を振り解こうと懸命にもがいている。

「麻宮さん!!」

もう、これ以上は我慢できない。そう言わんばかりの勢いで、高槻の後ろから雪乃が飛び出した。

いつもは大人しく、控え目な態度が目立つ雪乃。決して人より目立とうとはせず、ともすれば怖がりと思われがちな色白の少女。そんな彼女が、敵対心剥き出しで嫌味を言ってきたライバルを助けるために飛び出す。それは高槻だけでなく、夏樹や咲花にとっても意外なことだった。

「は、長谷川さん……。あなた……」

「しつかりしてよ! 麻宮さん、来年はソロでデビューが決まっているんでしょ! それなのに、こんなところで死んじやったら、全部お終いだよ!!」

雪乃にとって、確かに星梨香は苦手な相手だ。一度は彼女が雪乃に蠱毒を仕掛けたのではないか。そう疑ったものである。

だが、疑念が晴れた今となっては、雪乃が星梨香を見殺しにする理由はなかった。同じアイドルであるならば、歌という武器で互いに勝負する。そんな想いが雪乃の中にあっただからだ。

未だ腰が抜けている星梨香の手を取って、雪乃は彼女を引っ張ろうとした。その瞬間、とうとう黒影を振り払った妖怪が、再び星梨香と雪乃の方へ向き直る。額にある四つの単眼をぎらつかせながら、妖怪は獲物が二つに増えたことに喜びを隠せない様子だった。

このままでは、二人とも妖怪に食われてしまう。そう思われた次の瞬間、今度は刀の鞘が空を斬って妖怪の頭にぶつかった。

「逃げる……早く……!!」

壁を背に、苦悶の表情を浮かべながら立ち上がる犬崎紅。先ほどの鞘は、彼の武器である闇薙ぎの太刀を入れていたものだ。

「行くよ、咲花!!」

「はい、夏樹さん!!」

紅が作った一瞬の間。それを逃さず、今度は夏樹と咲花が飛び出した。二人は雪乃と同じように星梨香の手を取ると、互いに呼吸を合わせて怪物の前から引きずり出す。言葉など何も交わしていないのに、まるで打ち合わせでもしていたかのように息がぴったりだ。

そのまま高槻のいる場所まで星梨香を引っ張ったところで、三人は全身の気が抜けたようにして座りこんだ。咲花に至っては、高槻の脚にすがりついて泣いている。勢いに任せて飛び出したはいいが、きつと物凄く怖かったのだろう。

T Driveの三人の協力で、星梨香を助け出すことには成功した。しかし、脅威はまだ去ってはいない。

獲物が逃げ出したことに腹を立てたのか、妖怪が低い唸り声を上げて紅を睨んだ。再三に渡って狩りを邪魔されたことで、当面の標的を完全に紅に定めているようだった。

「さあ、来いよ……。貴様の相手は、この俺だ……」

ふらつく足取りのまま、紅は刀を杖代わりにして身体を起こす。口では強がりを言っているものの、既に脚に力が入らない。口からは豪快に血を吐き出し、内臓を痛めているのは明白だ。下手をする<sup>と</sup>、あばら骨の数本は折れているかもしれない状況だった。

じりじりと、妖怪が紅の方へ向かって迫る。動けない紅に対し、妖怪の爪が無情にも紅の首筋を狙って繰り出される。

今度こそ、逃れる術はない。誰もがそう思ったそのとき、駐車場の中にけたたましいクラクションの音が鳴り響いた。

「なっ……今度はいっ<sup>つ</sup>たい何なのよ!？」

それは、駐車場に止めてあった一台の車だった。運転手などいないのに、車はまるで自動操縦でもされているかのようにして、豪快に妖怪を跳ね飛ばす。そのまま柱に叩きつけるようにして、車は妖怪を車体と柱の間に挟み込んだ。

突然の乱入者に、驚きを隠せない表情で見守る照瑠。あの車はいっ<sup>つ</sup>たいなんなのか。その答えは、車のガラスから黒い影が飛び出してきたことで直ぐにわかった。

ガラスから飛び出して来たのは黒影だった。以前、照瑠の行方を搜索する際に、警察のパトカーに憑依した九十九神の術。それを<sup>つくもがみ</sup>使<sup>い</sup>、駐車場の車を使って妖怪の動きを封じたのだ。

グウウウウウ……!!

妖怪の爪が鋼鉄製のバンパーに食い込み、金属の曲がる嫌な音がした。自分の身体を柱に押し付けている乗用車を、妖怪は強引に引き剥がす。

あれだけの重たい一撃を食らったのに、妖怪の身体には傷一つない。やはり、あの怪物に抗う術は存在しないのか。思わずそんなことを考えてしまった照瑠だったが、紅も黒影も、まだ諦めてはいなかった。

「行け、黒影！ 頭を狙え！！」

紅の最後の指示を受け、黒影が再び青白い破魔の炎を吐き出した。車を退けて間もない妖怪に、それを避ける術はない。隙だらけの頭に炎を被り、今度ばかりは頭を抑えながら妖怪が地面を転がった。

普通の悪霊であれば、このままでも十分に滅することは可能だろう。しかし、相手は人間と悪霊が融合して生まれた未知の妖怪だ。この程度で消えるとは思えないし、紅もまたこれで終わったとは思っていないかった。

決めるなら、次の一撃を除いて他にない。そのためには、出し惜しみさえしている暇もない。

何かを決意したような表情で、紅は刀の柄に巻かれていた布を剥ぎ取った。梵字のようなものが一面に書かれたそれは、閻薙ぎの太刀の力を抑えるための拘束具。鞘に無数に巻きつけてあるのと同じ、閻が溢れることを防ぐための封印だ。

刀身と、それから柄に巻かれている布まで失った今、閻薙ぎの太

刀は本来の力を完全に取り戻した状態といえた。それは即ち、貪欲なまでに魂を欲する太刀の本性が剥き出しになったということ。妖怪だけでなく、太刀を手にしている紅もまた、その魂を恐ろしいまでの速度で削られてゆくこととなる。

刀の柄から溢れ出る黒い気が、紅の手に絡みつくようにして侵蝕した。ミミズのようにのたうつそれが掌に入ってゆくと同時に、紅の腕の血管が瞬く間に盛り上がる。

この状態で、長くは太刀を握れない。それは紅にもわかってのことだった。あの妖怪が黒影の炎を振り払う瞬間。そこを狙って、最後の―撃を叩き込むしかない。

頭についた炎を爪で払い、妖怪はその四つの瞳を紅の方へと向けた。破魔の炎によって焼け焦げた部分は瞬く間に剥がれ落ち、傷口から湧いた無数の虫が、集結して新たな甲殻を形成する。

中途半端な攻撃では、相手は直ぐに再生してしまう。だが、その再生する瞬間こそが、紅の狙っていた最後の隙だ。

全身に走る痛みには耐えながら、紅は闇薙ぎの太刀を勢いよく妖怪に向けて突き出した。黒い気が溢れ出しているその剣先は、妖怪の開いた口の中に、まるで吸い込まれるようにして突き刺さる。固い甲殻に阻まれていない唯一の場所。それは、妖怪の体内へと通じる数少ない弱点だった。

ギィィィッ！！



耳をつんざくような悲鳴を上げて、妖怪が最後の抵抗を試みる。爪を振り回し、尻尾を地面に叩きつけ、刀を振り解こうと暴れまわる。

もつとも、そんなことで獲物を離してしまうほど、一度食らいついた闇薙ぎの太刀は甘くはなかった。爪の一撃を避けて紅は妖怪から離れ、最後の気力を振り絞って印を結ぶ。

「滅……」

紅がそう呟くと同時に、今まで見たこともないほどの量の黒い気が、刀の全体から溢れ出した。それは一本一本が蛇のようにつまわり、怪物の身体を貪欲に食らい尽くしてゆく。

霊的な部分を全て食われたからだろうか。赤黒い甲殻は瞬く間に変色し、黒いサソリの死骸となって剥がれ落ちた。妖怪も傷口に生き残りの虫を集結させて再生を試みるが、今度ばかりは間に合わない。

少しずつ、その身を剥がれるようにして、妖怪は徐々にその身を灰の山に変えていった。数匹の虫は逃げ出そうとしたが、すぐに黒い触手に捕まってその魂を吸い尽くされた。

両手の爪、尻尾、そして最後に頭まで食らい尽くされ、いつしか妖怪は完全に灰となる。頭が消えたところで刀が落ち、コンクリートの地面とぶつかって鋭い音を立てた。

「終わった……か……」

ふらふらと、全身の気が抜けてしまったかのような足取りで、紅

はその場に転がっている闇薙ぎの太刀を拾い上げた。太刀は未だ全身から黒い気を放っていたが、手にした封じ布を柄に巻くことで、なんとか力を抑えこむ。その上で、照瑠達の近くに転がっていた鞘を拾うと、紅は黒い気を放ち続ける太刀をその中に収めた。

「これでもう……お前は毒虫の悪夢にうなされることはない……。お前を苦しめていた闇は、俺が全て祓い終えた……」

刀を鞘に収め終え、紅が高槻の横にいる雪乃に向かって言った。が、次の瞬間、紅は糸の切れた人形のようにして、どつとその場に倒れ込んでしまった。

「犬崎君……」

紅が倒れたのを見て、照瑠が思わず彼の名を呼びながら飛び出した。

今回の戦いで、紅は大きな傷を負った。爪の一撃は彼のあばら骨を折っている可能性があったし、刀の力を解放したことで、紅もまた魂を大きく削られてしまったはずだった。

刀を持ったまま倒れ込んだ紅の頭を、照瑠は仰向けにさせて抱え込んだ。周りの目を気にしている暇などない。そのまま紅の手を握ると、精神を集中して陽の気を送り込む。

九条の一族が持つ癒しの力。照瑠はその力を完全に使いこなせるわけではなかったが、今の紅を助けるにはこれしかない。例え効果が薄くとも、ここまで酷く傷ついた紅に対し、何もしないというわけにもいかなかった。

照瑠が紅に気を送り続けてから数分後、紅の口から軽い寝息が漏れ始めた。未だ意識は戻らなかったが、とりあえずは成功と言つてよい。雪乃や夏樹が見守る中、照瑠はほっと溜息をついて、紅の頭を自分の膝の上に降ろした。

「ねえ、照瑠ちゃん……。犬崎君、大丈夫なの？」

「うん、なんとかね。それよりも、早く救急車を呼んでくれる？もしかすると、犬崎君……。骨折しているかもしれないから……」

本当に骨折しているならば、もう少し慌ててもよさそうなものである。思わず自分で自分に突っ込みを入れそうになつた照瑠だったが、あえてそれはしなかった。

照瑠の膝に頭を寄せ、安らかな寝顔を浮かべている犬崎紅。そんな彼の姿を見ていると、なんだかこちらも妙な安心感に包まれてしまふ。

いつもは険しい表情を見せることの多い紅の、意外な一面を見ることができた。照瑠はなぜかそれだけで、不思議と満たされた気持ちになつていた。

それは、どこにでもいそうな小さな黒猫だった。

深夜の駐車場を、黒猫は人目を避けるようにして駆け抜ける。時折、その首についている鈴が鳴り、無人の駐車場に金属のはじけるような音が響き渡る。

ひたひたと、足音さえ殺すようにして、猫は駐車場に置かれた車の下を通り抜けて行った。闇の中、金色に輝く二つ目だけが、まるで流星の如き軌跡を残して左右に飛び交っている。

緑色の非常灯がついている扉の前で、猫はゆっくりと車の下から姿を現した。改めて見ると、その姿は普通の猫と比べてどこか禍々しい。

首に巻かれた赤い首輪には、小さな鈴がついていた。それは髑髏の形をしており、これを猫に与えた人間が、決して良い趣味をしていないということが窺える。

闇の中で光る金色の目は、猫というよりは人のそれに近い。大きく丸まった虹彩は猫のそれに違いないのだが、その瞳から放たれる視線は、まるで人間が相手を凝視する際のものと同じなのだ。

辺りの匂いをしきりに嗅ぎながら、猫は足音もなく駐車場の隅に歩いて行った。タールを塗りたくったような艶やか過ぎる黒い毛並み。非常灯の明かりに照らされて、それはなんとも言えない不気味な輝きを帯びている。

「ニヤオ……」

まったく可愛さの感じられない、それでいてどこか嬉しそうな声で、猫が一つだけ鳴いた。動物であるにも関わらず、目を細めて口元を緩く曲げているようにも見える。まるで、目当ての物を見つけて喜ぶ人間のようにして、猫は舌なめずりをしながら身構えた。

薄暗がりの中、猫の頭がゆっくりと下に落ちる。代わりに尻を大きく上に突き出して、尻尾だけが別の生き物のようにゆらゆらと揺れる。

チリン……！！

首に着いた鈴が鳴るのと、猫が飛び出すのが同時だった。銃口から放たれた弾丸のようにして、猫は駐車場の隅で小さくなっていった物に向かい、一直線に走り出す。

バシツ、という音がして、猫の爪が獲物をとらえた。最後の抵抗として獲物が尾にある毒針を振り回すが、猫はいち早く毒針のついた尾に咬み付くと、完全にその動きを封じてしまった。

獲物を啜え、意気揚々と駐車場の中央に戻って来る黒猫。気がつくくと、駐車場には一人の青年が姿を現している。先ほど、猫が駐車場を走りまわっていた際には、影も形も見えなかったというのに。

「ご苦労さまです、マオ。どうやら今回は、呪具の破壊だけは免れたようですね」

青年が、獲物を啜えた黒猫の頭をそつと撫でる。頭を撫でられた黒猫は、しばし甘えるような仕草を見せたものの、やがて青年の足元に獲物を置いて上を見た。

黒猫が足元に置いた獲物を、青年がそつと拾い上げる。それは、気味の悪い姿をした一匹の毒虫。全身を赤黒い甲殻に覆われた、サソリのような姿をした生き物だった。

既に死んでしまったのか、それとも気絶しているだけなのか。青年の手に握られた虫は、既に動きを止めている。青年は虫の体を裏返したり戻したりして眺めていたが、しばらくすると、鞆から取り出した小さな瓶に虫を放りこんで蓋をした。

「ふむ……。どうやらこれは、既に人の肉を得た存在になっているようですね。本来であれば、虫の力が最高に高まったところで回収したかったのですが……。これは少し、勿体ないことをしたようです」

「デモ、仕方ナイヨ……。コノ虫ノ家来タチ、タブン主人ヲ守ルタメニ殺サレタ……」

黒猫のいた場所には、いつの間にか一人の少女が立っていた。赤い中華服に身を包んだ少女は、片言の日本語で青年に話しかけていた。

「まあ、これも仕方の無いことでしょう。どさくさに紛れて、本体だけでも上手く逃げ出していたのは幸運です。それに……僕もまさか、あの鴨上の下にいた少女の一人が、火乃澤町の出身とは思っていませんでしたからね。まったくもって、奇妙な縁というものはあるものです」

自嘲を込めた苦笑を交え、青年は虫の入った瓶を鞆にしまいながら言った。だが、そんな青年とは対照的に、少女は表情一つ変えず、コケシのような顔をしたまま青年を見ているだけだ。

「ネエ、紫苑<sup>しおん</sup>……。コレカラ、ドウスルツモリ？」

「そうですね……。僕としても、これ以上は邪魔をされたくないというのが本音です。火乃澤町は確かに陰の気が集まりやすい場所ですが、どうやら僕達にとっての抑止力も存在しているようですからね。僕の仕込んだ呪いの旋律が、これで三度も破られたことになる。これは少し、僕達にとって面倒なことになりそうです」

「抑止力……。ナラ、ソレヲ見ツケテ殺セバイイ？」

頭の左右についている、団子状に丸めた髪。そこに刺さっている簪のようなものを外し、少女はそれを自分の中指にはめて構えた。

古代中国で用いられていた、峨眉刺<sup>がびし</sup>と呼ばれる暗器の一つ。相手を刺殺することを目的とした恐るべき凶器を、少女はまるで玩具のようにして弄ぶ。人を殺すことに対する躊躇いなど、まったく存在していないようだった。

「おやおや、どうやら力が有り余っているようですね、マオ。しかし、あまり目立つ行動は控えた方がいいですよ。下手に騒ぎになるのも嫌ですし……。それに、僕はどちらかといえば、暴力を好む性格ではありません」

「ダツタラ、私ハ何ヲスレバイイノ？」

「とりあえずは、偵察といったところでしよう。僕達の仕事の邪魔をする者が誰で、その力がどの程度のものなのか……。まずは、それを探るところから初めて下さい。ただし……。くれぐれも、早まった行動にだけは出ないようにして下さいね。僕達の本当の目的を、邪魔者に悟られるわけにはいきませんから……」

「是、紫苑。デキルダケ、頑張ッテミルヨ」

中国語を交え、少女が答えた。青年はその頭にそつと手を置くと、先ほど黒猫の頭を撫でたようにして、少女の頭を優しく撫でた。

「では、そろそろ行きましようか。今日は雪も積もるみたいですし、いつまでもこんな寒い場所にはいたくありませんからね」

少女の頭から手を離し、青年は踵を返して歩き出す。一、二歩ほど足を進めたところで、その後ろから小さな鈴の音が響いてきた。

チリン、チリン……。

首につけた鈴を鳴らしながら、黒猫が青年の足元に現れる。黒猫は青年の脚に絡みつくようにして甘えていたが、やがて体を縮めると、その脚のバネを使って一気に青年の肩へと跳び上がった。

青年と黒猫が去り、深夜の駐車場に再び静寂が訪れる。かつては異形なる者との決戦場にもなっていたその場所も、今では何事もなかったかのように、平穏な空気を取り戻していた。



一月ともなると、神社は一年でも最も忙しい時期を迎えることになる。照瑠の実家である九条神社もその例外に漏れず、毎年たくさんの参拝客で賑わうこととなる。

普段は人も殆ど訪れないというのに、この時期だけは鳥居に続く長い石段にも参拝客の列ができる。そればかりでなく、境内には小さいながらもいくつかの屋台が店を出し、その賑わいに拍車をかけている。

その日は既に元日から数えて四日ほど経っていたが、神社を訪れる参拝客は一向に減ることがなかった。稼ぎ時と言えばそうなのかもしれないが、それでもこう人が多いとさすがに疲れてくる。巫女として、参拝客に札の販売をしたり甘酒を振る舞ったりせねばならないため、照瑠にしてみれば一年で最も疲れる季節でもある。

「ふう……。とりあえず、午前中の参拝客は一通り捌けたかな……」

額の汗を拭うようにして、照瑠は社務所の奥に戻りながら言った。参拝客は完全に途絶えたわけではなかったが、そろそろ交代の時間である。バイトとして手伝いに来てもらっている亜衣や詩織、その他数名の級友達と交代し、昼食休憩に入らねばならない。

社務所の中に戻ると、そこには亜衣がコタツでみかんを食べながらくつろいでいた。休憩中とはいえ、まるで自分の家にいるかのような厚顔無恥な態度。思わず呆れてしまいそうになったが、今日に限って照瑠は亜衣に突っ込みを入れることができなかった。

亜衣の隣で彼女と楽しく談笑している三人の少女達。その顔を見た瞬間、照瑠の目が大きく見開かれる。何を隠そう、彼女の目の前にいたのは、あのT Driveの三人組に他ならなかったのだから。

「あつ、照瑠ちゃん！ お仕事、もう終わったの？」

「えっ……！ ど、どうして雪乃がここにいるわけ!？」

「お正月は生放送番組で忙しかったけど、今日と明日はお休みなんだ。だから、高槻さんに少しだけ無理言って、火乃澤に帰って来ちゃった」

「で、でも……あなたはいいとして、なんで他の二人まで……」

「実は、それも高槻さんをお願いしたんだ。照瑠ちゃんにはお世話になったし、何か恩返しもしたかったから……。三人で話し合ってお正月のお仕事を手伝うことにしたの。T Drive、一日巫女さん体験企画ってことだね」

「はあ……。まあ、そういうことなら仕方ないわね……」

照瑠の脳裏に、昨年の大晦日に電話越しで楽しそうに話していた父の姿が思い浮かんだ。きっと、あれは高槻からの電話だったに違いない。

神主でありながら妙に俗っぽい考えに囚われて、常に飄々とした態度を取り続ける食えない人物。それが照瑠の父である、九条穂高の性格だ。あの父のこと、恐らくは高槻の注文を二つ返事で了解し、雪乃達が正月の仕事を手伝うことを許可してしまったのだらう。勿

論、国民的なアイドルが仕事を手伝うことで、神社の知名度を上げて参拝客を増やそうという打算が入ったの計画に違いない。

父のことを考えると全身脱力しかねない照瑠だったが、雪乃達の手前、なんとかそれは堪えることができた。代わりに雪乃に近況を尋ねると、なんとか上手くやっているとの返事が返ってきた。

昨年の暮、ホテルの駐車場での戦いで社長が亡くなったことで、当然のことながら鴨上プロは大混乱に見舞われた。公には行方不明としか発表されていないが、照瑠達は社長が二度と見つからないであろうことを知っている。もともと、それを誰かに説明したところで、にわかには信じてもらえないのだろうが。

社長を失った鴨上プロは、事実上の倒産に等しい状況になっていた。新しい社長を決めようにも話が進まず、このままでは社員もアイドル候補生も路頭に迷ってしまう。最終的には業界最大手とされる森内プロダクションか、j m i xに吸収合併されるだろうと言われていた。雪乃達もそれに合わせ、そのどちらかの事務所に移籍する可能性が濃厚である。

事件の後、あの麻宮星梨香のプロデュースも、雪乃達のプロデューサーである高槻が引き受けることになったという。彼女の元担当であった黒部は早々に行方をくらましてしまい、今では連絡を取ることもできない状況だ。

まあ、あんな事件に巻き込まれてはそれも已む無しと思えるが、それでも少し無責任と言わざるを得ない。黒部の本音がどうであれ、彼が麻宮星梨香の拠り所となり、その心も体も捧げさせていたのは事実なのだから。

かつてのライバルのプロデュースを、自分のプロデューサーが代理で行うという事実。どう考えても気持ちの良いものではないだろうが、雪乃はあえて不満を口にはしなかった。アイドルたる者、勝負はあくまで舞台でつける。夏樹に影響されて、そんなプロ意識が芽生えていたということもあつたのかもしれない。

どちらにしても、雪乃がアイドルとして再スタートを切つたのは間違いない。今までは奇妙な力に支えられ、命を削って得ていた成功。今度はそれを、自分の力で勝ち取ること。そんな覚悟が雪乃の中で固まつたのだ。

雪乃の歌唱力の才能は、確かに優れたものがある。だが、歌唱力の才能だけで成功をつかめるほど、芸能会は甘い世界ではない。

雪乃もそれはわかつていようで、彼女は照瑠にこれからも努力を続けるという旨の話をした。それを聞いた照瑠もまた、自分の中で一つの決意が固まつたことを確信していた。

才能だけで、全てが上手く行くはずはない。それは、今回の事件で照瑠も思い知らされたことだ。結局、今回も自分は傍観者のままで、肝心なところは全て紅の力に頼ってしまった。

九条神社の巫女として、一刻も早く癒しの力を手に入れること。それには今以上に厳しい修業と、それに耐える精神力が必要だ。昨年の暮は妙な焦りから自分を追いこんでいたような気もするが、今の照瑠にそれはない。

雪乃の話聞いて、自分もまた同じであると知った照瑠。その胸中に、既に迷いや焦りといった感情は存在していなかったのだから。

自分は自分のできることから始めればよい。決して焦らず、しかしたゆまず怠らず。それこそが、自分が九条家の跡取りとして真の力を得るための近道である。

教えられるはずが、逆に教えられた。助けるはずが、逆に助けられた。そんな事実が、照瑠と雪乃にいつしか強い親近感を抱かせていた。

雪乃であれば、アイドルとしてではなく一人の友人として接することができる。そう思っているのは照瑠だけではなく、雪乃もまた照瑠のことを大切な友人だと考えていた。

「ねえ、照瑠ちゃん。今日は、私達に出来ることがあったら遠慮なく言ってね。今日はアイドルのT Driveじゃなくて……できれば、照瑠ちゃんのお友達としてお仕事を手伝いたいから」

少しだけ照れ臭そうにしながらも、雪乃は照瑠にそう言った。照瑠は大きく首を振って頷いてそれに答える。午前中の疲れなど、既にどこかへ吹き飛ばしてしまったかのような笑顔だった。

「ありがとう、雪乃。亜衣はあの通りの性格だし、実は人手が足りなくて困ってたんだ」

「むうう、失礼な！ 私だって、やる時はやりますぞ、照瑠殿！！」

今までコタツに潜っていた亜衣が、口を膨らませながら文句を言った。

「何を言ってるのよ。確かにあなたも手伝ってくれたけど、初日の賽銭箱の前での出来事……私は忘れてないからね！！」

「えっ……！？ い、いやぁ……。いったい、なんのこつでございましょうなぁ……」

「とぼけるのもいい加減に下さいよ、亜衣……。私があたなのやったことに、気づいていないとも思っているのかしら……？」

照瑠の額に青筋が走り、亜衣を徐々に部屋の隅へと追い詰めてゆく。対する亜衣は、先ほどの調子はどこへやら。顔に油汗をかいて、完全に動揺しているようだった。

「あなた、仕事が終わった後、賽銭箱の周りに転がっていた小銭を拾ってたでしょ。あれ、立派な賽銭泥棒じゃないの！！」

「うぐっ……。で、でも……。元と言えば、箱にちゃんと入れないで、遠くからお金を投げた人が悪いんじゃない！！それに、賽銭箱から直接お金を盗ったわけじゃないし、神様だって許してくれるよ……たぶん」

「なに調子のいいこと言ってるの！ 拾った小銭をネコババしたってことには変わりないでしょう！？ 今すぐ雁首揃えて、盗んだ小銭を返しなさい！！」

「い、いやぁ……。あはは……。実は、その小銭なんですけどね……。あの後、お腹がすいていたもので、屋台のたこ焼き買うのに使っちゃいました……。というわけで、返したくても返せないってわけですよ、ははは……」

自分の腹をさすりながら、乾いた笑い声を交えて話す亜衣。思わず殴ってやるのかと思う照瑠だったが、次の瞬間、彼女達のいる部

屋の襖が豪快に開けられたことで、その拳は行き場を失った。

「お、おい！ 九条はいるか!？」

襖の向こう側から、慌てた様子で一人の少年が飛び出して来る。

照溜の級友であり、今日の仕事の手伝いを頼んでいた者の一人、長瀬浩二だ。

「ど、どうしたのよ、長瀬君！ そんなに慌てて……」

「いや……。実は、今日くらいちょっと羽目を外してもいいかと思つてさ……。九条の親父さんの許可ももらつて、余つた甘酒を飲んだんだが……。詩織のやつが、ちよつとマズイことになつちやつて……」

「マズイことつて……。まさか、急性アル中で倒れたとか!？」

「それだつたら、いくらかマシだつたぜ。まあ、飲ませた俺にも責任はあるけど……。九条も見ればわかると思う……」

いつもであれば気取つて格好をつけている浩二だが、今日に限つてはやけにしおらしかつた。自分の彼女である加藤詩織のことを気にしているのもあるのだろうが、それにしても普段の雰囲気を感じられない。

いつもとは違う浩二の様子を、訝しげな表情で見つめる照溜と亜衣。だが、その答えはすぐにわかることとなる。

「あつひゃひゃひゃひゃ……。九条ひゃくん、嶋本ひゃくん……。わらひ、酔つ払つひゃっひゃよ〜」

いつもの生真面目な空気など皆無な呂律の回らない声。声色からそれが詩織のものだと気づいたが、そこには既に照瑠の知っている詩織はいなかった。

顔を赤くし、目はだらしなく下に垂れ、完全に千鳥足になっている詩織。いつもは真面目で優等生な彼女だが、どうやら稀に見る下戸だったらしい。しかも、酔った際の酒癖は、並みの酔っ払い以上に性質の悪いものだった。

「ねえねえ、長瀬くうくん！　ちゅーひよ、ちゅー！！」

酒臭い息を撒き散らしながら、詩織が浩二の首に絡みついていた。普段であれば人前で手を繋ぐことさえ恥ずかしがる詩織が、こうも大胆に変貌するとは。まったくもって、酒の魔力とは恐ろしいと照瑠は思う。

「や、やめろよ、詩織！　みんな見てるじゃんか！！」

「あれえ〜。もひかひて、恥ずかひいの〜？　二人のとひは、いひゆもすつごくでいーぶなやひゆをやっひえるくせにい〜」

「あの時はあの時、今は今だ！　頼むから、いつもの詩織に戻ってくれればー！！」

照瑠達の見ている前で強引に唇を奪われそうになり、泣きそうな顔になっている浩二。いくら自分の彼女が相手でも、こんな形でのキスなど御免被りたい。浩二は格好こそ遊び人に近いが、実際は悪を気取っているだけなのだ。人前で酔った相手と見境なくキスをするほど節操がないわけではない。



「ちよつと詩織！　ここじゃマズイから、少し奥の部屋に行つてよ……」

浩二に絡みついて離れない詩織を、照瑠が強引に引き剥がす。しかし、酒の力で見境がなくなった詩織は、照瑠のことなど見えてはいない。じたばたと手足を動かして暴れ、しまいには自分の服の胸元に手をかけて肌蹴始めた。

「ああ、もう！　この服あつひゆいね、長瀬君」

「ちよつ……なにやってんのよ、詩織！！」

「あつひゃひゃひゃひゃ……。なんか窮屈らひ、わらひ、これ脱いじゃおうつと！　全部脱いれ、すばあつとすつきりい、みたいなあ……」

「だ、駄目だつてば！　亜衣、長瀬君、二人とも詩織を止めてえ……」

バイト用として貸し出した巫女の服を、豪快に脱ぎ捨てんと暴れる詩織。それを阻止するべく、亜衣と浩二も詩織の腕を取る。それでも詩織は何やら叫んでいたが、やがて奥の部屋に移されたのか、その声も聞こえなくなった。

騒ぎの収まった社務所の一室で、雪乃達は互いに顔を見合わせて頷いた。

照瑠の知り合いには、どうやら一癖も二癖もある人間が多いようである。こんな状況では、確かに彼女が人手を欲しがるのも頷ける

というものだ。

「やれやれ……。雪乃に誘われて来てみたけど、本当に滅茶苦茶な連中ね。東北の田舎町なんて退屈な場所だと思ってたけど、なんだか東京のスタジオ並みに賑やかだわ……」

「まあ、それでも楽しければいいじゃないですか、夏樹さん。それに、私も照瑠さんのお手伝いできるのは嬉しいですよ。巫女さんの服、一度着てみたいと思ってましたし……」

「相変わらず、あなたは悩みがなさそうでいいわね、咲花。言っておくけど、手伝いとはいえ仕事は仕事。オフの日のことでも、T Driveの名に泥を塗るような真似は許されないわよ」

「わかってますう！ 雪乃さんも、今日も元気百倍絶好調で行きましようね……！」

もう、これ以上は黙って座っていられない。そんな様子で小躍りしながら、咲花が雪乃に言ってきた。

「そうね。それじゃあ、皆で照瑠ちゃんの代わりに神社のお仕事手伝いましょう」

雪乃も立ち上がり、三人もまた社務所の奥にある着替えの場所へと去って行く。廊下を走る三人の足音が、徐々に遠くなりやがて聞こえなくなる。

嵐が過ぎ去り、静寂に包まれた社務所の一角。全ての人がいなくなったその場所に、再び誰かの足音が響く。雪乃達が走り去った時とは違い、それはゆっくりと廊下の板を踏みしめるような音だった。

辺りの様子をそつと窺うようにして、廊下の隅から一人の少年が姿を現す。赤い瞳と白金色の髪、そして雪のように白い肌が特徴的な人間、犬崎紅だ。

暮の戦いで負傷していた紅だったが、以外にも彼は早々に病院を退院していた。未だ肋骨にヒビが入っていたものの、動けないというわけではない。常に向こう側の世界の存在を相手に戦うための備えをしている紅にとっては、骨折程度で何日も病院のベッドにお世話になる必要もなかったのかもしれない。

人のいない廊下の壁に寄りかかり、紅はコートのポケットからイヤホンの片割れを取り出した。普段は音楽など聞かない紅だったが、今日は少し特別な気持ちだった。

ポケットに突っ込んだままのプレイヤーのスイッチを入れ、紅は自分の耳に流れてくる音に意識を集中させる。イヤホンの奥から響くそれは、決して上手とは言えない一曲の歌。どこか優しく、それでいて一生懸命な気持ちが伝わってくる、つたなくも心に響くものだった。

長谷川雪乃の選んだ道には、これからも困難が待っていることだろう。そしてそれは、九条照瑠も同じこと。巫女としては未熟な彼女にとっては、これからも向こう側の世界の存在に脅かされることがあるだろう。

そんなとき、彼女を守ってやれるのはいったい誰か。それは他でもない、紅自身である。

強過ぎる力と才能を持ったが故に、その使い方を誤って闇に墮ち

る。かつて、そうやって闇に堕ちてしまった少女を救えずに、殺めることでしか闇から解放してやれなかった紅。その贖罪が、照瑠のような人間を無償で守るといふことなのだ。

曲が別の物に変わったところで、紅はイヤホンを外して歩き出した。社務所の奥からは、詩織を寝かしつけた照瑠や着替えを済ませた T Drive の三人が姿を見せ始めている。

これからも、自分は影ながら照瑠を見守って行けばよい。そうして照瑠が真の力に目覚めたときが、自分が火乃澤町を去るときだ。

そう考えると、紅は少しだけ自分の中に寂しさのような感情を覚えた。だが、すぐに迷いを振り払い、照瑠や雪乃に気づかれないう社務所を後にする。

時刻は既に、昼を少し過ぎた時間になっていた。曇天の多い東北の冬にしては珍しく、今日は太陽がしっかりと顔を出していた。

## あとがき

昨年の夏に始まった猟闇師シリーズも、もう第六弾になります。途中、様々な試行錯誤を経た結果、今回は今までの作品の中でも最も荒唐無稽な話となりました。

まず、一般人がアイドルと接点を持っている。この時点で、既に漫画の世界です。加えて、アイドル達もどこかリアリティが足りないというか……あえて、一昔前の少女漫画から飛び出して来たような性格の人間を集めました。

一方、ホラーな要素としては、とにかく見た目に気持ち悪いものを出そうと考えました。今までの作品には殺人が絡む陰鬱で暗い話が多かったのですが、今回、それはカットです。殺人を話のメインに据えてしまうと、どうしてもそちらに読者の視点が行ってしまうようで、肝心のホラー部分に目が向かないようなんです……。

そもそもホラーの謎解きとは、呪いや祟りといった超常現象に対し、なんとか理由をつけようとする部分から始まるはずです。この登場人物は、なぜこころも恐ろしい目に遭うのだろう。この家に入ると、どうして呪われてしまうのだろう。そういった疑問から、実は過去に何かあったのではないかとか、何か呪いのアイテムのような物が家にあるのではないかといった推理をしてゆくわけです。

しかし、そこに殺人が絡んでしまうと、読者の視点は犯人探しのみに集中してしまいます。こうなると、もう呪いなんてどうでもよく、推理小説として優れているか否かになってしまっわけですね。凶器がナイフか藁人形かの差異だけで、後の要素は全部オマケになってしまうというわけです。

正直な話、これは私の書きたいホラーではありません。猟奇殺人を主軸に据えた話も過去には書きましたが、本気で書くなら単なるサイコサスペンスにした方がまとまりが良くリアリティもあります。そういった諸々の事情から、今回はとにかくぶっ飛んだ話にしてやるうという考えの下、気がつけば自分でも滅茶苦茶な話として完成させてしまいました。

最終決戦に登場した蟲の化け物。モンスター物としてはかなり安っぽい部類ですが、たまにはこんなのも良いでしょう。第四弾も第五弾も陰鬱なバッドエンドだったので、こちらで少しガス抜きです。まあ、少々抜き過ぎて、今までの世界観を破壊していないかが心配なところですが……。

下手すると、今回の話は単なる特撮作品としても成立しそうな気がします。それこそ、少しテイストをライトにするだけで、 仮面ライダー 第 八 話 恐怖の毒サソリ男！！ という話にしてもOKな感じですよ。

作者の息抜きがてら、とにかくB級臭さ満載で作った第六弾。こんなものでも、少しは楽しんでいただければ幸いです。今後は長谷川雪乃の事件によって得た芸能界とのパイプに関しても、作中で生かせれば生かしてゆきたいところです。

2011年 1月5日(水)

雷紋寺 音弥

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7235p/>

---

獵闇師 ~ 悪蟲夢 ~

2011年6月4日21時28分発行